

論文 / 著書情報
Article / Book Information

標題	華
Title(English)	ka
発行者	TIT 建築設計教育研究会
Publisher(English)	TIT society of architectural design education
巻号 / vol.	No. 025
発行日 / Pub. date	2003, 6
権利情報 / Copyright	本著作物の著作権はTIT建築設計教育研究会、および、収録されている論文・記事等の執筆者に帰属します。本著作物は、TIT建築設計教育研究会の許可のもとに掲載するものです。ご利用にあたっては「著作権法」を遵守してください。

本館1F-東工大出版物

華 : ka

20030000 25

大岡山 20100720 00014802 (2009)

巻頭:大学キャンパス計画は今

東工大の建物が変わりつつある。

大岡山キャンパスでは、建物の老朽化や新耐震基準のような物理的要因と、学問領域の再編や新設による空間的要求を満たすための改修と新築があり、すすかけ台キャンパスでは、まだ新築が続いている。

こうした高密度化の段階ではマスタープランから逸脱する傾向があり心配である。

国立大学が独立法人化するとは言い、

施設関係の予算や人に関する中央の手厚い庇護(?)のエネルギーは不変・不滅のように見えるなか、独自の長期計画、質の高い設計をいかに可能にするかは、誰が、どういう組織で設計するかが鍵となる。

建築系学科の存在意義が問われているといえよう。

Headline: New Directions in University Campus Projects

Buildings at TITech are being revitalized these days.

At Ookayama campus physical parameters such as the aging of buildings, are being looked at and the new anti-seismic regulations implemented.

Spatial requirement of complexity and expansion due to the reorganization of academic fields are being reconsidered.

At Suzukakedai new campus is still going forward.

It is a concern that at the current high level of densification the existing master plan of the campus may be ignored.

Although the national universities will become independent agencies,

budget and personals issues in planning and construction are likely to remain under central control.

To establish a long-term plan of unique features and quality architecture,

it is important to determine who and what kind of organization will be involved in planning and design.

A strong role for the Department of Architecture seems to be indicated.

華 [ka] 2003年春・夏号

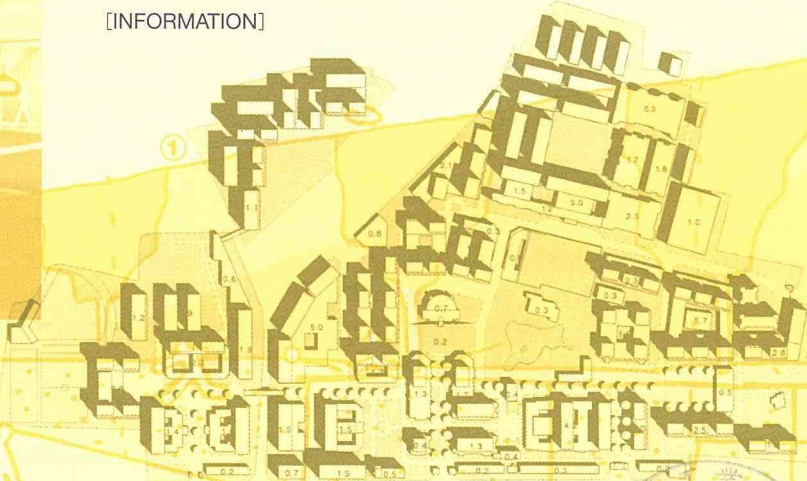
[巻頭記事] 鼎談:大学キャンパス計画は今(岸田省吾+光井純+安田幸一)

[2002年度学生設計課題] 建築設計製図第一、第二、第三、第四

[大学院特別授業] ワールド・アーキテクチャー・ワークショップ:WTC/911

[ニュース・投稿] 海外留学レポート:パリ・ラヴィレット校に留学して/コンペ入賞作品紹介

[INFORMATION]



巻頭記事：大学キャンパス計画は今

Head Line: New Directions in University Campus Projects

鼎談：大学キャンパス計画は今

New Directions in University Campus Projects



岸田省吾(写真左から二人目) [建築家・1951生まれ/75年東京大学建築学科卒業/80年同大学院博士課程中退/80年岡田新一設計事務所/82年磯崎新アトリエ/91年～東京大学助教授]

光井純(写真右から二人目) [建築家・1955生まれ/78年東京大学建築学科卒業/84年イェール大学大学院修了/84年シーザーペリ&アソシエイツ/92年～シーザーペリ&アソシエイツジャパン代表、光井純アソシエイツ代表]

安田幸一(写真右端) [建築家・東京工業大学助教授]

Shogo KISHIDA (Architect・Tokyo University)

Jun MITSUI (Architect・Cesar Pelli & Associates Japan Inc., Jun Mitsui & Associates Inc.)

Koichi YASUDA (Architect・Tokyo Institute of Technology)

以下は2003年3月7日に東工大安田研究室で行われた対談の模様を、学生編集委員の増崎太伸(ID1)と編集部(担当：足永)がレポート・編集したものであり、文責は編集部にあります(敬称略)。

The current state of several new campus building projects was discussed by three architects: Shogo KISHIDA of Tokyo University, presently redesigning the Hongo campus of Tokyo University, Jun MITSUI of Cesar Pelli & Associates Japan Inc., chosen to design the Itoshima Campus of Kyushu University, and Koichi YASUDA of Tokyo Institute of Technology.

At first, Mitsui and Kishida explained their own recent designs. The Itoshima campus master plan for Kyushu University is a new site to which the entire university will be moved from its four existing campuses. It focuses on a new spatial system as a polar diagram, consisting of three vectors: a laboratory vector, a void vector, and polar vector. This is intended to take into account a fluid system of people and spaces within the university itself.

Tokyo University consists of three campuses: Hongo campus, Komaba campuses (I and II), and Kashiwa campus. Kishida pointed out that these three constitute a single line on the map having a length of about 10 km. The three units represent a basic three-pole structure at the heart of the re-design project. Each campus, Hongo, Komaba, and Kashiwa, provides for educational, social, physical, and other as yet unknown elements of the total scheme.

The discussion was focused on design guidelines for campuses. Both Kishida and Mitsui agreed upon the meaninglessness of fixing a style, color, or any other arbitrary parameter in advance. Instead, Mitsui has produced a book to show the intended atmosphere of the future Kyushu University campus, for instance the openness of the mall, the shape of its skyline, and other features. His office had initially submitted two designs, consisting of building and perspective drawings. By contrast, Kishida doesn't show texts or drawings to an incoming designer but has preferred to set up a "Campus Design Associates" group in an attempt to insure consistency in staff and design.

Discussion next turned to the issue of competitiveness. Mitsui stressed that the new Japanese university should aim to attract attention worldwide. Kishida agreed but nonetheless feared such an emphasis might tend to turn students into mere pawns in a popularity contest.

The three panel members discussed general campus attractiveness. They all said Japanese campuses need more "useless spaces" converted into "useful spaces". This means, in general, that our campuses would have less park-like space. Kishida emphasized that we have to decide on a concrete approach to campus design in order to facilitate that conversion.

安田——今回のテーマは「大学キャンパス計画をめぐる状況」というタイトルでお話を伺いたいと思います。昨今、大学キャンパスの建て替えのプロジェクトはかなり多くなってきています。また、大学の老朽化に伴いリデザインされていることや国立大学の独法化がおこなわれたりと制度の改革がなされています。さらに近い将来、少子化によって大学のキャンパスの魅力アップさせなければいけないという切実な問題が出ています。それから他の建築と同じように、資源、環境の問題も当然考え直す時期にきています。岸田先生は東京大学本郷キャンパスの計画に現在携わっていらっしゃる。また光井さんは九州大学新キャンパスをマスタープランの計画段階から担当なさっています。今日はお二人に現在の大学キャンパスの問題点と、実際に関わってきたプロジェクトでの具体的な考え方などを教えていただければと思います。

九州大学新キャンパスのマスタープラン

光井——九州大学(以下九大)の新キャンパスをつくるということで現在分散しているキャンパスを統合するという計画案が10年ぐらい前から検討されてきました。われわれは三菱地所設計と地元の三島設計と共同でコンペに参加し、プロジェクトが始まりました。既存のキャンパスを捨て、新しいキャンパスを糸島半島につくる試みで、広島大学と同様、都心の便利な土地を捨てて郊外に広い土地を求めてキャンパスをつくるというような流れだろうと思います。しかし大学は都市にあるべきではないかという思想もあり、学内外で議論もありました。人里離れた交通の便が悪いところで大学という形式自体が成り立つのかということなんですが、最終的には移転が決まり15年くらいかけて少しずつ計画を進めていくことになったと思います。まず九大のマスタープランの考え方について申し上げます。これから大学自体が独法化していく過程の中で競争の原理が働くキャンパスづくりを行い国際競争力を育てる大学のあり方について真剣に考えました。まずキャンパスというのは教育の場でもあります。と同時に知的な財産を生み出す思考の場であり、歩いている時に車のことを気にしては、安心してものを考えられない。人が歩いたりディスカッションする空間と車の空間は分けるべきであると考えました(図1、2)。このふたつがマスタープランの大きいふたつの軸です。コンペ時には、リニアな敷地ですからキャンパス全体の真ん中にコモン空間をつくってそのまわりに建物が配置される。キャンパスはあくまで外部空間中心に構成され、車は絶対にこのなかに入らないで建物には背後からアクセスしていくという構図を生み出しました。その上で文科省からは学科による単位でパビリオン型の個々の建物、建築学科とか土木学科とか、電子学科とかが並んでいく。建物をキャンパスに並べただけでは、学際研究や研究者間の競争を促すキャンパスにはなりにくいとの指摘をうけました。

競争の空間

光井——結果として先生方の個室を並べた、板状の建物と、自由に空間の大きさを容れられる実験・研究のための板状の建物を吹き抜け空間で連結した空間ダイアグラムを提案しました(図3)。例えばある先生が面白い研究をしていて研究費がたくさんついたとします。今申し上げたシステムによってその先生には十分に広い実験及び研究の場を与えることができます。一方でその時点で興味をもってもらえない研究をしている先生は最低限の個室だけは与え、その研究が成果を生み出し、広い研究スペースが必要になれば、その時点で十分な空間を与えます、という考え方です。個室の空間と実験及び研究の空間が分離して自由に伸縮できる、流動性が高いことが大学の競争力を高める上で必要だということに至りました。研究の学際性を高めるためにこの建物はすべて繋がっていて、傘をささないでどこへでも歩いていける構成としています。個室を中心にした先生方の拠点となる空間と流動の空間の二つを分割し背中合わせにしたことが大きな特徴となっています。アメリカの大学ですと競争力を高めるためにお金を払って有名な先生を雇うということもあります。少なくともそうしたことが可能になる箱のダイアグラムをイメージして、マスタープランをつくりました。

デザインのガイドライン——九州大学の場合

光井——マスタープランの次は地区計画です。工学部の第一期の部分について、デザインガイドラインをつくりました。九州大学の全体的な雰囲気、イメージのようなものを継続的にどうやってつくっていくべきなのかをいろいろと議論しました。特に最初の建物というのは非常に大事です。最初の建物も持っているデザイン特性をどのような形で継承していくのか。ふたつめ以降の建物ではこれについて不断の議論が必要です。基本的にはキャン



図1 九州大学・新キャンパス 全体模型

図2 九州大学・新キャンパス ダイアグラム

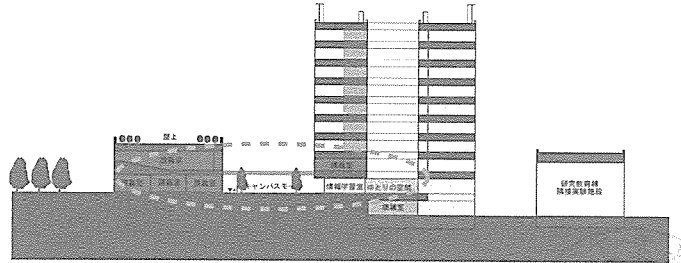
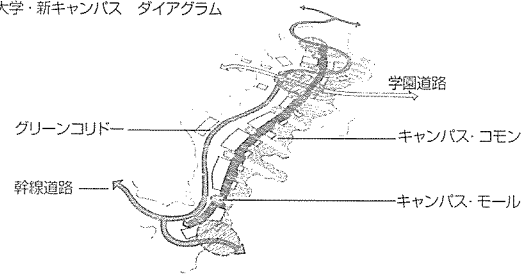


図3 九州大学・新キャンパス 断面図

ンパスデザイン概念としては「オーセンティシティ」に手掛かりを求めました。まず先生方の個室棟と研究・実験棟が吹抜けを挟んで配置された姿を素直に表現することを考えました。それからPAL (Perimeter Annual Load, 年間空調負荷係数)の問題がかなりありましたから環境的な配慮も必要で、真ん中の吹き抜け空間を利用して自然換気や自然採光をとるというように、環境共生の考え方を外観に表現しています。建物の構造、機能、性能をできるだけストレートに表現しながら、現九大のキャンパスのもっている色彩の原風景を重ね合わせることが九大キャンパスデザインのオーセンティシティの構築につながると考えました。

東大の三極構造

岸田——東京大学(以下東大)は今、三つのキャンパス整備を進めています。本郷、これは開学以来120年くらい経ちます。駒場キャンパス(キャンパス2というのは駒場の第2キャンパスのことで生産研などが入っています。)と原広司先生のマスタープランに基づいてつくられた柏キャンパスがあります。実はこの三つのキャンパスが都市図でみまるとほぼ一直線にならんでいます(図4)。

光井——へえ。これは意図的なんですか？

岸田——いや、あるとき原先生が発見しまして。これは三極構造だと。12年位前に東大もこのままだと思った活動ができないということでキャンパス計画を本格的にやり始めました。三極構造というのはまさにそのときに考えられたものです。まず最初に確認したことはアカデミックプランと、フィジカルプラン、このふたつはまさに一体のものであって、全学の力を結集してやることになった。そのフィジカルプランとしてつくったのが三極構造という大学全体のキャンパスの戦略でした。社会との関係を重視し、自分達の成果をどう社会に生かしていくか、あるいは社会からいろいろなことをどう取り入れていくか。一方で、これからできあがる未知の分野をどう開拓していくか。そこで「内に深めていく」「外との関係をつくる」さらに「未知のフロンティアを開く」という三つのアクティビティを軸に、フィジカルプランとして本郷、駒場、柏という三つのキャンパスが対応する。

光井——三つの軸にそれぞれが対応していくのですか？

岸田——はい。各キャンパスに各々が対応し、各々の地区についているんなら条件がある。柏は全くの更地で、分野、方法論に対しても未知であり、新領域創成科を中心に研究が行われる。駒場の方は教養学部と総合文化研究科という文理融合型の学部と生産技術研究科という社会との関係の中で工学技術を展開しようという組織がある。場所も渋谷と比較的近いということから、社会との接点にしていこう。本郷キャンパスはメインキャンパスとしていわば老舗の学部が揃っていてベースとなっているような学問が展開する。もちろん未知の分野に挑戦しているところもありますが土台のある

ものをベースにしながらか研究を進めるといふ具合です。

本郷キャンパス計画

岸田——本郷は120年くらい経ってまして、歴史を積み重ねた古い建物が多いんです。関東大震災で明治時代の古いものがほとんど壊れたので、中心部分は大正末から昭和の始めにかけて内田祥三先生がつくったものです。建物と植栽等の環境のデザインの両方です。

光井——両方やられたんですか？

岸田——はい。内田先生は、建物はもちろんしっかりとやりましたが、でも建物は型をつくれればそのバリエーションでできると考えて、重要なのはむしろ、建物群や植栽などのある屋外環境が作る全体の環境だということと言われて、今日のようなキャンパスができあがったと思います。10年前にマスタープランをつくるときに、このような歴史的な環境をいかに継承するかということが決定的な課題になった。そこで中心部分の歴史的なゾーンと、比較的新しい建物とか未利用地のゾーンを分け、歴史的な部分は再生を中心としたエクステンション、それ以外は高密度に、開発するというマスタープランをたてました(図5)。東大の場合、本郷は2万人弱ぐらいの学生、教職員が日夜活動している。病院では患者さんも大勢いるわけで、日常の活動を一旦止めて下さいとは言えないですから、そのために考えたのが玉突き方式、更地にひとつ建物をつくって、そこに、古い建物の住人を移して順次更新していくということになりました。

デザインのガイドライン——東大・本郷キャンパスの場合

岸田——歴史的なゾーンといっても内田ゴシックという具体的にデザインされた建築があって、植栽もケヤキとクスとイチョウという三種類の樹種が計画的に配置されている。そういうものの中でどういう空間、あるいは場所をつくるかということまでなかなか話がブレイクダウンしない。九大の場合も同じだったと思うのですが、僕たちもそういう具体的なものを前にしてどうしたらいいかということで、結論としてはあるスタイルにスタイルをぶつける、あるいはある素材に別の素材をぶつける、またかたちにかたをぶつけるっていうのは、無理ではないか。デザインする関係者もたくさんいる。それで、結局ガイドラインはつくりませんということになりました。

光井——つくりなかつたんですか(笑)？

岸田——その代わりに、キャンパス計画室をつくりました。これはマスタープランの時の考え方を理解している人の組織で、具体的な計画を判断するのが実質的かつ機能的なのではないかということで、そこで重要な計画を立てていくということになっています。

光井——キャンパス計画室でデザインのレビューをしていくのであれば、人間的な継続性がないと途切れてしまう可能性がありますよね。それはど



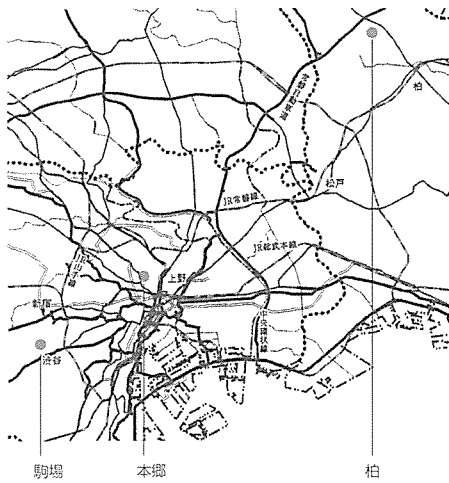


図4 東京大学三極構造

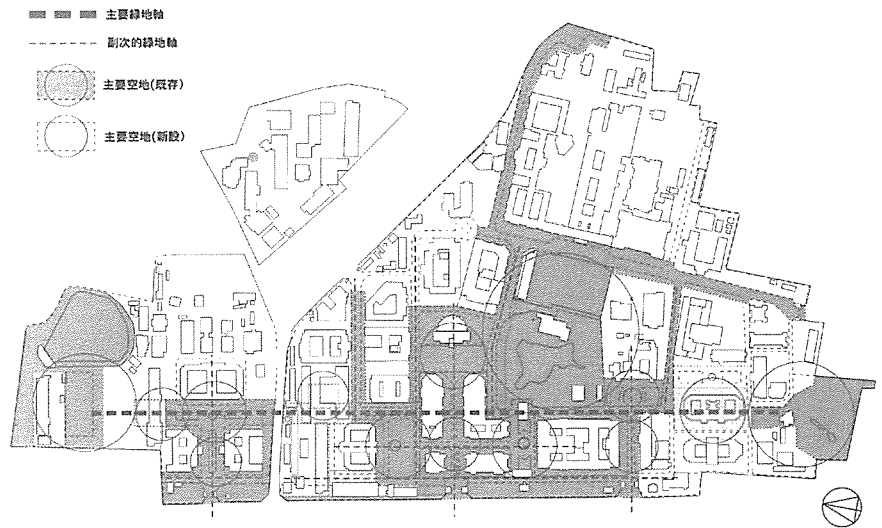


図5 東京大学・本郷キャンパス 緑地軸と公共空地

ういふうに担保されているんですか？

岸田——法学系の先生、それから建築、教養の先生などが再任して引き継がれました。ヘッドは施設担当の副学長が前任の人からよく引き継いでいて、一部のメンバーは変わるのですが主要メンバーの継続性が担保されているので、実質的には対応しています。この2年間、経済学部出身の副学長の下でうまく回転しています。

光井——理想的なやり方ですね。人材的な継続性が非常に重要です。九大の場合はマスタープランを理念としてまとめたあと、空間のイメージを示す「地区計画図書」をつくりました。外観の材料は自然の風合いのあるものが好ましいとか、キャンパスモールにはベンチを出したりしてオープンな感じにしなさいとか、そういうガイドラインをつくって、具体的な設計に反映しました。これに対して反発するのがあるいは継承するのとかいうところで少なくとも議論の出発点は提案できたのではないかと思います。東大の例から比べると九大の場合はガイドラインが細分化していると思います。

キャンパス計画の決め方を決めないといけぬ

光井——次にキャンパス委員会の役割を考えてみます。これは少し岸田先生のご意見もお伺いしたいと思いますが、学内の先生方は研究者、教育者として対等であると考えられますので、先生方からたくさんの意見が出たときにどの意見が優先されるかについては、決定のためのプロセスが明解になりにくいということがあったと思います。そういうことに直面した時には、九大営繕の方々やと落としどころを見つけておいてプレゼンテーションを行って決定するという方法をとりました。この意志決定の難しさを九大の時には感じました。

岸田——今の光井さんの話って、日常的に感じる大学民主主義っていったらいいんですか（笑）？ そういうものの良い面が悪い面が分かりませんが効率の問題がありますね。やっぱり重要なのはキャンパス計画の決め方をとにかく決めないといけぬ。

光井——そう（笑）。まず決め方を決めないとプロセスが前に進まなくなります。

岸田——これまでの昔ながらの大学民主主義でやったらこれはスピーディにいかないし、基本的には対応できないことが多い。それが社会の仕組みと現実いろいろな軋轢を起こしている。例えばいきなり補正予算がついたりした時、その計画を延々とやっていたら、できるものもできなくなっちゃう。国立大学の場合は来年から法人化でそのへんの仕組みが変わる可能性があるから九大も効率的になるのではないですかね。

光井——そうした傾向は非常にあると感じています。先生方や文科省の方と一緒に打ち合わせをする時、これからは大学といっても、一般の企業に非常に近いところがあって、成果主義になっていくと思われれます。ある予

算の中で研究や教育を実行せざるを得ない状況になってくると本当にこの施設なり面積というのがいるのかということが対投資効果という側面から現実的に評価せざるを得なくなってきました。

岸田——競争の原理というのは重要だと思うし、そういうことを言わざるを得ない組織もあると思います。一方で、私立国立問わず、大学を本当に全部すっからかんにして変える必要があるのか。競争の原理って日本の大学では馴染みが薄かったんだけど、本当にそういうものを一斉にやっつかざるを得ないのか。九大も含めて。無駄な部分を切り落とすって意味で競争の原理は必要だと思いますが、大学の活動、それから空間を考えるとキーワードになるのかどうか考えると、そう簡単には言えないのではないかなと思います。

光井——社会にとって存在価値がないと判断されるとその研究に対し風当たりが強くなる傾向は高まってくると思います。大学としては社会の中で開かれた状態が必要だという話がありましたが、社会と関係をもとうとしない大学は存在価値が落ちてくるかもしれません。時代の変化や社会のニーズにえられるということも重要です。大学には教育と研究という二つの重要な役割があると考えられます。優秀な人材を輩出できない大学は存在価値が落ちてくるでしょうし、研究の成果があげられなければそれも大学の評価として表れてきます。そういうふうに考えれば、先生方にインセンティブを与える仕組みがあり得るのかもしれない。例えば、簡単に言えばノーベル賞をとったら給料1億円のようなことかもしれませんが、実際米国では、大学の競争力を高めるために高い給料でノーベル賞級の学者をリクルートすることが行われています。評価の仕方にも問題がありますが、成果を出したことに對してわかりやすく評価をすれば社会から見たとき大学というものが動いている感じがしますね。そこには人材が集まるし、企業からも産学協同で一緒にやりましようとかいうことが生まれやすくなります。大学の基本として80%くらい社会評価軸が働き、その他に20%くらいは当面お金にもならないけれども将来への投資、あるいは文化の継承という形の研究もきちんと続けてゆく姿があり得ると思います。そのための舞台として世界に負けない魅力あるキャンパス空間をつくるのが建築家としてできる最大限のことだと思っています。

岸田——そのときに大学の意味とか価値というのは社会にとってそんなに自明のことなのかな。つまり、教育と研究ってたとえば、その教育の成果について、すぐ人材って言いますよね。でも人は材料じゃない。これからの大学は人材を供給する以前に人を育てる。人に育ってもらう。要するに重要なのは一人ひとりの幸せであり、人生の充実ではないかと。「人材」を養成することよりもっと大学としての大切な役割があるのではないかと思います。そこをまず社会は理解してもらいたい。最近どこの政治家が世論だけで政策は決まらないって言ってるんだけど（笑）、社会がどう思お



図6(上) 九州大学・新キャンパス俯瞰イメージ

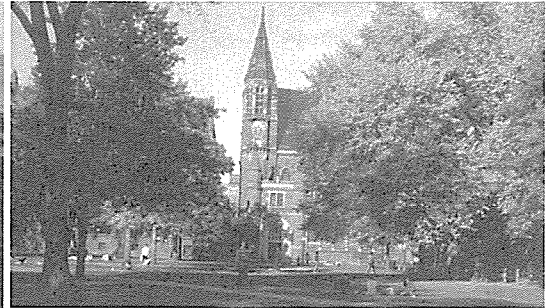
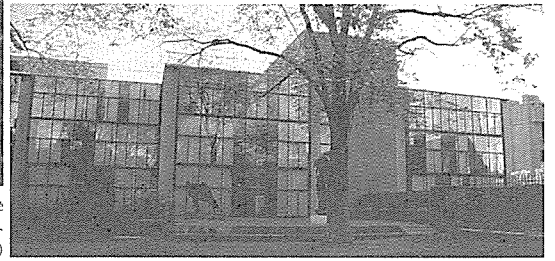


図7(上) イェール大学
図8(下) イェール大学 アート
ギャラリー (L・カーン設計)



うとこれはおかしいとかこれは正しいんだっていう見識を大学はもつべきで、そこは譲れないと思うんです。研究でも評価はそんなに単純ではなくて、社会にすぐには理解してもらいにくいサンスクリット語の研究、あるいはインド哲学の研究を地道に進めている人もいます。無論、そんな分野のノーベル賞はありません。そういうものの評価をどうやるのかという難しさが大学にはあって、社会に評価をゆだねるのも大事ですが、それ以前に大学の評価は長い目、広い目でみないといけない。どれだけの成果、人材を出したということだけではいくらやっても日本の大学のキャンパスは真の意味で魅力的なものにならないと思います。大学キャンパスに魅力があるとしたら空間としての力、あるいは場としての力といったことでしょうか。それは空間と人の営みがつくる。本郷の場合だったら120年っていう歴史の厚み、時間の厚みがあっていろいろな人がそこに集まっているいろいろなことをやったという場の記憶がフィジカルに分かる。一方で九州大学みたいに新しい将来にかけたようなものもつくり得ると思います。20世紀の大学で一番成功した仕組みをつくったのはどこかとなるとたぶんアメリカだと個人的には思います。何故うまくいったかという、アメリカの大学論で大抵カレッジの伝統っていうことに触れる。プロフェッショナルスクールとかグラジュエイトスクール以前の前期過程が充実していることが挙げられます。ハーバードグラジュエイトという言葉がありますが、これもハーバードカレッジを卒業した人間しかいわないらしい。そこで共有する何かがあるんでしょね。いろんな分野の人と知り合って、いろんな分野の活動を知って、人間とか社会、世界、自然について視野を広げ、問題の発見や解決の方法みたいな知的なフィールドで不可欠な基礎的トレーニングを受ける。納税者に説明する努力はしても、分かりやすい説明ができるような大学を目指したら絶対だめです。アメリカだって資金を得られない地味な研究もあります。しかし、いろんな多様な評価の仕組みをノウハウとしてもってる。ところが日本は成果主義でしょ。それもひとつのファクターだけれど、そんなことを重視したらろくなことにならない。もっと長い目でみましょうって言う人がね、僕は出てきて欲しい。

光井——でもやはり成果を出さないと世間は納得しないですから、大学は社会に対して自己アピールしてゆく必要があります。年間何千万あるいは何億という予算が組み込まれて使われるわけですから説明責任を果たすことは必要だと思います。少し話が変わりますが、アメリカの大学の場合、学部の4年間は教養課程でじっくり考える訓練をしますが、良い伝統だと思います。日本は一般的に建築学科とか方向性を決めて大学へ入っていきますね。個人の個性を生かして社会に貢献していく人材をじっくり育てるには将来の方向性を決定する時期が少し早計に過ぎると思います。もう少し時間をかけて人間を育ててゆく考え方が大学に必要なと思います。

岸田——日本の場合、教育制度が大きく変わったのは大戦後で、アメリカ

の影響が大きいと思いますが、徹底しなかったところが致命的だったかなと。しかも専門教育としても2年間で終わってしまう。旧制のシステムよりもさらに詰込みみですよ。これではうまくいきません。アメリカにしても日本にしても研究を大学でやり始めたのはここ二百年くらいで、その発祥の地はドイツです。ドイツ人が近代大学制度をつくって、ドイツの大学には学問に完成はないということ卒業がない。

光井——そりゃそうですね。永遠に続くわけですからね。

岸田——その点、日本の場合、実践に則して考えるという伝統があって理念重視のドイツとはかなり違う。だから良い面もあるんですが。

光井——プラクティカルってことですよ。

岸田——そう。だけど大学に関してはそれでいいのかと感じています。

無駄の空間

安田——大学の魅力っていうのは“無駄”のなかに多いんじゃないかって思うんですよ。効率主義以前に。まわりの状況がごみごみした住宅地のなかにキャンパスがあって、“無駄”な雑木林なんか残っている。そういう“無駄”をもってる余裕が何か新しい発想に結びつく。光井さんと一緒に行ったイェール大学も“無駄”なスペースが多い(笑)。

光井——それが素晴らしいんですよ。中庭空間に入ると、ものすごく静かで、びっくりするくらい落ち着いていて静寂です。学生や先生方が本を読んだり語り合うというイメージと非常によく重なりあいます(図7、8)。

安田——異空間というか……。

光井——異空間ですね。非常に文化的な。大学ですから何百年という知の積み重ねが所々に感じられるのは重要なことです。

岸田——ヨーロッパやアメリカのすばらしいキャンパスはまず、環境としての良さを感じます。先ほど本郷キャンパスのマスタープランについて触れましたが、歴史的なゾーンとその周辺の密度を上げていくというフィジカルプランをたてたんですよ。これは建物の再配置なんだけど、むしろオープンスペースに関する計画なんです。確か最近のヨーロッパの街づくりでオブジェクトの計画ではなくてオープンなスペースの計画をたててそれは守るというやり方がありますね。いろいろな要素が入っていく環境を長い目で育てていくときに非常に有効になって思います。大学のスペースとしての魅力もまず、オープンスペースにあるのではないのでしょうか。

使われる大学、大学の開放・解放と安全性

光井——イェールのキャンパスも1930年の始めに建てられたものがほとんどです。建築自体のデザインも重要ですが、中庭空間や街路空間、広場などがキャンパスの中心であることが大学を歩くとよく分かります。建物と建物との間の空間、具体的には芝生があって学生達が話をしていたり、



図9 (上) 九州大学新キャンパス キャンパス・モール
図10 (下) 九州大学新キャンパス ゲート

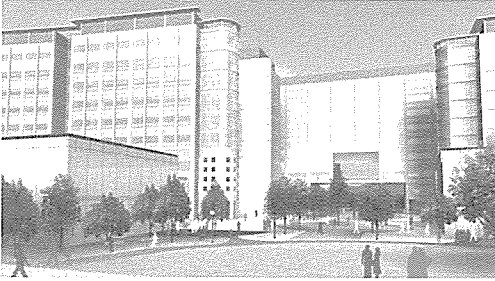


図11 東京大学・本郷キャンパスサイン計画

課外授業のような形で議論しながら外を歩いたり、あるいは大学を開放してコミュニティによって使われ、地域文化の醸成場所として重要な役割を果たしています。社会と大学を対立的にお互いを評価するのではなく、不可分に一体化していく考え方です。そのようになれば大学の存在価値が市民のなかに文化として育つと思います。そのあり方が日本の大学のキャンパスを見ると少し足りないと思います。

岸田——足りない原因のひとつは大学の基本的な役割を誤解しているところにあると思います。大学の人間がこういえば、じゃあそういう実験室をつくりましょうとそれで決まってしまう。そんなことを避けるためにも、イエールの素晴らしさをつくるオープンスペース、つまり建物の建っていないところの魅力を考えなければならぬ。“キャンパス”って言葉が頻用されるんですけど、“なにもない原っぱ”という意味のこの言葉は本当にいい言葉だと思うんです。“無駄”といえるようなそういう場所を実現してゆきたい。

光井——そうした一見無駄に見えるものを種のようにして蒔いておくこと色々なことがみえてくると思います。

岸田——社会との関係が重要だというのは確かですが、優れた大学というのは、いわゆる政治的、経済的な国境を越えて色々な地域から人を惹きつける。かつその人たちが、ひとつの共同体あるいはグループをつくっている実感をわかせる。イエールで実現されているオープンスペースもそういうものだからこそ魅力になっていると思うんです。

光井——国境も年齢も越える自由さがキャンパスに入ったときに感じられなくてはならないと思います。

大学の開放・解放とセキュリティ

光井——実は私は東工大の近くに住んでいます。日本の大学って塀で囲まれていて、通り抜けができないから住民から見ると邪魔で仕方がないんですよ。東工大の中には素晴らしい桜があるんですが朝早くか夕方遅くだと門が開まっていて見ることもできない。本来自由であるべき大学の基本姿勢としては間違っているのではないかと感じています。建物ごとにセキュリティをきちんと固めてキャンパスの美しい空間を外に開放すべきです。九大も大学の開放性が議論になって、基本的には建物管理をすることになっています。セキュリティ度の高いものについては入り口からロックをかけて、それから廊下に入るところにももう一度ロックをかけて、という風にセキュリティの度合いを高めていく。これによりキャンパス空間には、近くから家族がやってきて、そこでピクニックをすることも可能になります。大学は地域社会の支援がないと十分に役割を果たすことができません。

岸田——なるほど。ゲートがないのは日本では早稲田大学ぐらいですかね。今はあるんだけど、基本的には開放されています。一方で、最近キャンパスの中で強盗事件が頻発しているなんて話を、よく耳にします。

光井——だけど、それをやっぱり乗り越えないと。

岸田——乗り越えないといけなし、アメリカみたいに拳銃持ってる人がうろろしている国でも、開放しているところは開放している。けれども、現実にはそれなりに色々な凶悪事件は起こっている。どの程度開放するかは、社会、そして大学が判断せざるを得ないところかな、と思います。日本の場合、大学の独立性について学問の自由ということと、空間的な独立性ということが少し混同されていますよね。「街の中で君臨する大学」というイメージと、学問の自由とが重なってしまう。特に旧帝国大学や東工大などで……。

光井——昔のヨーロッパのお城のように城壁を固めて誰も入れないということでは、知の自由と開放を標榜する大学のあり方として閉鎖的過ぎる気がします。

大学の賑わい

光井——九大新キャンパスは人里離れてますから、どのように街としての賑わいをつくるかが課題になっています。いろいろな店が集まってきて、大学街として賑わっていく。それが大学生にとっても安全で便利になっていくわけですが、人工的につくる離れた大学で、どうやってそれをつくるかというのは実は大きな課題じゃないかなと思います。

岸田——一番困難な課題かもしれませんね。

光井——夏は誰もいなくなりますから、キャンパスでプログラムをつくって、サマースクールを開催したり、社会人教育にあてるとかの工夫を行って大学を365日稼働させることでタウンキャンパスをつくっていくという取り組みも必要です。

岸田——ただ大学のキャンパスっていろんな在り方があるし、なにもポロニーヤとかソルボンヌみたいに街に組み入れられた大学しかありえないってわけではない。例えば、カルフォルニア大学にサンタクルズという丘に展開するリゾート地みたいな大学があるし、あるいはスタンフォードも、もともと原野の中に建ったわけですよね。九大の新しいキャンパスはかなりの丘陵地になってるので(図6)、必ずしもタウン的な魅力だけを追求しなくてもよいのではないのでしょうか。

光井——もちろんそうです。九大では結節点のところにタウンキャンパスの賑わいをつくらうとしています(図9、10)。その他は大学のキャンパスが展開するわけですが、大学生活を支える商業的な賑わいも必要です。

トータルデザイン

光井——大学にとって重要なのは箱よりも外部空間だという議論がありますから、まず外部空間をしっかりデザインをして、それに箱を当てはめていかなければならないという議論をしています。外部空間のデザインにな



図 13 東京大学・本郷キャンパス 武田先端知ビル

図 12 東京大学・本郷キャンパス 工学部 2 号館

かなか予算がつかない現状があります。建築と外部空間が一体となったキャンパスを生みだせる設計のシステム自体ができてないことが問題です。

岸田——東大の場合はキャンパス計画室で環境に関わる重要なことを議論しています。

光井——それは画期的ですね。

岸田——緑地軸って何もない空間を設定して、様々な広場をつくり、緑地軸から枝が生えてネットワークを形成するというマスタープランをつくり、重要なオープンスペースに関しては、たとえばゴミ箱やサインボードのような小さなものを置くということも含めてデザインレビューして一貫してやろうという仕組みでやってきている。

光井——すばらしいですね。

安田——その時、既製品から選びなさいとかいうことにはなりませんか？

岸田——そういうこともあります。重要な部分については地区ごとに建築の専門の担当者が決まっています。デザインできるような仕組みになります。たとえばサイン計画や(図 11)、外部照明として古い建物のポーチに照明を仕込んだり、部分的にライトアップなんかでもできるようになりました。環境は重要だという認識が一般の構成員にもだんだん根づいてきている。

一同——そこが一番重要ですよ。

岸田——だからぜひそういう仕組みをやってもらいたい。

光井——でも実際は、敷地区分みたいになっていて難しい。本来ならば九大のキャンパスモール全体を、東大の緑地軸のように一つの大きな空間として統一したデザインをしなければならぬと思います。ここをデザインすることが、全体のものの在り方を決めていくと思うんです。もちろん多様性も必要ですが、少なくともこのモールを壊すようなものは困るというメッセージを示しておくことは重要です。ただ横断的な空間を設計するための予算措置ができないのが現状です。工学部がここからここまで、農学部がここからここまでというふうになると、それを横に通す軸の存在を作るとするのは難しいんです。

岸田——そもそも地区を指定して、ここがどこの専攻とか研究科とかっていうこと自体が最初の競争の原理とかと齟齬をきたしているという気がしますよね。土地をさらに分割することにつながる。制度的な問題もありますが、まず担当の施設の人、事務局が統一的な計画によって、いかにすばらしいものができるかという体験をしていただくことが重要なんじゃないですか？

光井——ところで東工大は少しひどいかなと思います。建築学科の先生方はキャンパス計画に関わられているのですか？ ログハウスみたいなものが突然できると地域住民としてはこれでよいのかと思っています。

岸田——決定的に仕組みが悪いんです。

安田——結局どう仕切るか。キャンパス計画をつくる前に、つくり方をど

うつくるかっていうのが悪ければ結局何やってもだめですよ。

岸田——そう、だめなんですよ。でも僕は来年以降国立大学全体として、徐々に変わるのではないかと期待しています。法人化で総長が、権限としては事務局のデザインをできるようにすると聞いてます。東大の場合も企画とか、長期計画、それから利用状態の点検・評価、その辺に特化したようなセクターに重心を移していきたいと思います。

光井——それは面白いですね。

岸田——イギリスで support but no control っていう言葉があるらしい。そういうふう信頼される大学になっていくべきですよ。でないと、さっきも言ったような世界中から人が集まってくるような、ほんとに魅力ある大学にはなりませんよ。

光井——観光地になるような所があるかって話ですよ(笑)。

岸田——東大はツアーを作ろうかという話は出てたんですけどね。

光井——日本はキャンパスツアーないですよ。イエールではカーンが設計した美術館の中にゴッホのオリジナルがどんと無造作にガラスも何もかけないで置いてありますが近くの学生がキャンパス内を頻繁に見学しています。文化に投資をすることで大学の知的資産を高めてゆく工夫がこれからの大学にはないといけないと思います。日本の大学では文化にまで手をのばせる余裕はないのかもしれない。

岸田——国立大学は一応公的な資金で運営されているんですが、法人化すると裁量が増える面もある。例えばハーバードがハーバード不動産なんていわれるように、とんでもない資産をもっていたりする。そういう完全なフリーハンドまで国立大学が手に入れるのか、あるいはすべきなのかっていう議論はまた別にあるとは思いますがね。

光井——あると思います。しかし同時に大学の自立性を保つためにある程度は経済的な自立を確保することも必要といえます。国に対して「援助なんかいらぬよ」って言えるぐらいになって欲しいなと思います。キャンパスの計画に関しても、国は単年度予算だからこれしかできませんということではなく、自分の大学のキャンパスを世界の中で最も魅力的なものにするんだというくらいの気概で取り組まないと海外のようなキャンパスを生み出すことは難しいと思います。

岸田——なかなか厳しいですね。世界的に見た場合自前の資金と、資金を集める力でうまく総合大学、しかも大規模な総合大学を経営しているところは少ないのではないですか。ヨーロッパでもイギリスは実質、国立大学だし、ドイツはもちろん、フランスも典型的な国立大学でやっていますよね。だから話としてはわかるけど、あまりにもアメリカ的な発想だなと思う。

光井——確かに理想かもしれないけど、国からは金を出してもらって文句は言わせないというそのぐらいの大学になれば、外から見ても非常に魅力的な大学にきっとなっていると思いますけどね。

岸田——ただやっぱり理想じゃダメだし、時間がかかると思う。だってケンブリッジとオックスフォードだって800年、700年でしょ（笑）。その中で、今のポジションを築いているわけで、一週間や二週間ではできませんよ。

光井——確かに。でも時間をかければできることでもないかもしれない。

岸田——そうですね。もっとも、オックスフォードに留学して先生から聞いたんですが、どうしても何を専門でやってるか分からない老教授がいたんだって。ある時あまりにも不思議で、あの人は一体何が仕事なんですかって聞いたら、平然と彼はワインが詳しいんです、ワインの専門家なんですって。そういう人がいる。それで彼はやっぱり大学はこういうものなんだなって思ったらしい。そういうことは納税者に説明できませんよ（笑）。

光井——（笑）それぐらいの余裕を持つのは必要ですね。“無駄”と余裕の境目も難しいところなんでしょうけどね。

キャンパスをもっと考えなくてはいけない

安田——ではそろそろ最後ですが。共通点として九大も東大もデザインガイドラインをつくらないというのが新鮮でした。イェールも建物自身はバラバラですからね。ゴシックを基調としていますが、カーンがあったり、ルドルフもあつたりします。だけど統一感がなぜかある。

光井——一定の落ち着きがありますよね。あのベースにある一定の落ち着きをどうやったら実現できるかということは大事な課題ですね。

安田——スケール感みたいなものが共通しているんじゃないですか？

光井——フィリップ・ジョンソンが設計したグラインバイオロジータワーとかは外壁の柱列が細やかなスケール感を生み出しています。九大でも自然のスケール感や既存の建物に対するスケール感などを基本的な骨格のところで合わせれば、雰囲気は合ってくるのかもしれない。

岸田——スパイン（軸線）という大きなランドデザインと同時に、最初の建物のスケール感が大事なのではないかな。

光井——展開の仕方として、建築ポキャブラリーはあんまり細かく規定しない方向でマスタープランを考えています。大きな骨格として雁行型にすること、アイストップを形成すること、道路からキャンパスモールに入るときのゲートを形成すること、東側と西側の緑をグリーンコリドールによって連続させ、微生物が歩いていけるようにしておくことなどを緩やかに規定しています。今、センター地区のところを黒川紀章事務所と日本設計がやられており、マスタープランの理念を尊重されて設計をすすめられていると伺っています。今後、この二期のほうについてどのように展開していくか、マスタープランをつくった我々としては非常に興味がある。さっき話に出たイェールのキャンパスをカーンとかいろんな人がやっていながらどこかで雰囲気共通点がある、ということがここで実現できるかが楽しみです。

安田——長い間年月をかけてキャンパスが新しくなっていく、育っていくわけですよね。色んな建築家の方が参加なさって。でも質を守る、ある最低のモラルのようなものが、それをマスタープランで縛るのではなくて、その創設時代のコンセプトがそのまま継承されるそういうものの仕組み、その精神をいかに伝達するのかをどうやっていくのか。

光井——雰囲気を統一するようなものをどうやって継承できるかということが、非常に面白い課題ではあると思います。建築の教育のようなところがあるのかもしれない。

安田——形や色じゃない。

光井——倫理ということかもしれません。既存の建物を尊重して群としての連続性をつくり、街としての時間を重ねていくことが建築家の仕事であるということなどが教育として教えられるかどうかですね。そのへんのモラル性は大学に期待するところです。アメリカの教育では、周囲に古い建物があってその中に建物を埋め込むと、コーニスラインを揃えろとか、材

料を合わせろとか言われました。街並に対して、突然違うものをつくると大議論になったりする。建築の教育に対する倫理として、彼らははっきりしたものをもって感じました。これに対し日本での課題は更地に敷地が与えられて、美術館をつくるとか図書館をつくるといった課題が多く、都市コンテキストをどう捉えるかという類の課題はなかなか成り立ちにくい。周りの建物のクオリティ自体が疑問視される部分がありますから、何かに合わせるということが、議論として出てこないのではないかなと思います。

岸田——そのへんは全く同感です。その問題は大学の計画以上に根が深い。そもそも日本の街ってヨーロッパの古い街、アメリカの古い街と比べてずいぶん様相が違う。つくり方のプロセス、発想自体が違う。日本の場合はテリトリーが固まっちゃうと、そのテリトリーのなかでは自分は自由だよ、隣は隣のテリトリーだから勝手にやっとなる。街並みとか都市空間はその結果としてできあがる。個々の活動の集積としてね。大学が新しいキャンパスの土地を分割するって話も共通のことであって、それが日本の大学のユニークさで、日本の都市空間に近いようなキャンパスが再生産される。岸田——個々の建物のよさを保ちながら、統合的なキャンパスが生まれるには、やっぱり何百年かかかるんでしょうか。

光井——かかるんですよ。形態に対する自己満足を満たすためにやるわけじゃなくて、大学を成長させていくんだよっていうふうにならざるを得ない建築家が考えてくれば、きっといい結果ができると思うんですけどね。その姿勢だと思えますよ。

岸田——そのためには大学は建築家を信頼し、彼らが自由にできるような枠組みをつくっていかないと駄目じゃないですかね。

光井——キャンパスを設計するための仕組みをデザインしなくては。

岸田——上のほうがある程度キャンパス、空間、フィジカルな情景というのが非常に重要だと、研究と同じように重要だという認識をもち、建築家もまず信頼されるようになる必要があるのではないのでしょうか。

安田——ここのキャンパス計画もあるんですよ。

岸田——そういうものは必要ですね。なにかあったときにパッと僕たちはこれだけ考えていますと。

安田——予算がついたときにさっとね（笑）。

光井——準備しておかないとできませんからね。東工大の本館前には素晴らしい桜並木がありますから毎年家族をつれて来ます。個人的な話で恐縮ですが、昨夏に亡くなった義理の父親がまだ歩ける頃に「東工大の桜が見たい」と言っておりました。ある日、義父が早起きをして桜を見に行ったらゲートが閉まって見られなかった。それから調子が悪くなって二度と見ることはできませんでした。だから季節には、お墓参りに行くときに必ず桜を持ってゆきます。楽しみにしている人がいるんですよ。是非キャンパスを開放してほしいと思っています。

安田——キャンパスをもっと考えなくてはいけないですね。今日はありがとうございました。

図 1-3,6-8; シーザー・ペリ・アンド・アソシエーツ・ジャパン

図 4-5,9,10; 東京大学、岸田研究室

図 11; A.D.A EDITA Tokyo Co.Ltd & GA Photographers 高瀬良夫

図 12; 『YALE UNIVERSITY』、CRESCENT BOOKS NEW YORK

図 13; Klaus-Peter Gast 『Louis I. Kahn The Idea of Order』、Birkhauser

建築設計製図第一

Sophomore-studio Work · Spring Semester

住宅設計課題：「木造戸建住宅」

"Detached House"

担当：

藤岡洋保 [教授] 宮本文人 [助教]

塚本由晴 [助教]

Hiroyasu FUJIOKA (Professor), Fumihito MIYAMOTO (Associate Professor), Yoshiharu TUKAMOTO (Associate Professor)

山崎鯛介 [助手] 長岡大樹 [D3, TA]

吉村英孝 [D3, TA]

Taisuke YAMAZAKI (Research Associate), Daiju NAGAOKA (D3, Teaching Assistant), Hidetaka YOSHIMURA (D3, Teaching Assistant)

以下は、授業の内容を山崎（助手）がレポートしたものであり、文責は編集部にあります。

設計製図第一では、実際の建物がどのような要素によって構成されているかについて具体的に把握することを目的とし、テーマとして木造戸建住宅をとりあげた。授業では右のようにトレース、実測調査、設計課題といった視点の異なる3つの課題を与え、建物について多角的に理解することを期待している。

The purpose of this assignment was to learn what an actual building should be (whether a combination of building elements, a structural system, or whatever). Following two practice sessions (tracing and a building survey), the project got underway to design a "detached house with 50 meters of bookshelves" for six occupants.

1—トレース課題：増沢洵自邸、浜田山の家（吉村順三）

木造の住宅作品の基本図・詳細図のトレース
 ・増沢洵自邸 [鉛筆書き]：平面図・立面図・断面詳細図 (1/20)・建具枠現寸図 (1/1)
 ・浜田山の家 (吉村順三) [インキング]：平面図・立面図・断面図 (いずれも 1/50)

2—木造住宅作品の実測調査

江戸東京たてももの園 (小金井市) の4棟：小出邸 (堀口捨己)、前川國男自邸、田園調布の家 (大川邸)、三井八郎右衛門邸、各建物につき2箇所ずつ (居間廻りと玄関廻り)

・提出物：平面図、展開図 (開口部・地盤の断面を含む) (1/20)

3—設計課題：「書棚を持つ木造戸建住宅」

設計課題では木造戸建住宅の設計を行った。敷地 (奥沢)、課題趣旨、設計条件は右の通り。

設計上の手掛かりになるように、居住者数は通常の核家族より多めの6人に設定し、また総延長50mの本棚を要求した。

結果から見ると、これらの条件を空間や造形的な特徴へと積極的に展開できた案はあまり多くなかった。一方、製図に関しては比較的良好に描かれており、特に矩計図は例年よりも丁寧に描かれていたと思われる (p.10, 11)。

【課題趣旨】

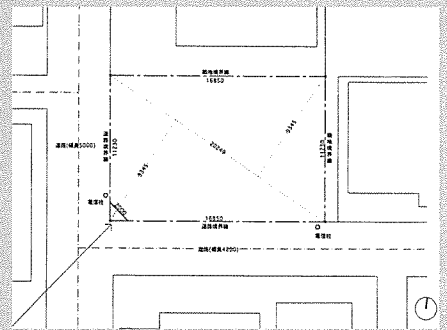
以下の条件を考慮して木造戸建住宅を設計して下さい。

- 居住者は6人以上 (構成員の組み合わせは自由)
- 駐車場を最低1台は確保
- 庭をどこかに確保 (前庭、中庭、屋上庭園など形式は自由)
- 本を大量に所有している。目安として本棚の総延長は50メートル

【設計条件】

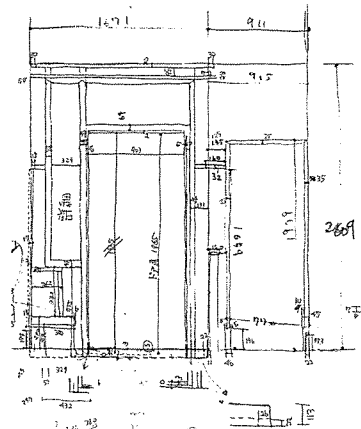
下記の法的制限を守ること。また構造形式は木造 (軸組構法、枠組壁式構法いずれも可) とする。

敷地面積：189㎡ / 用途地域：第一種低層住居地域 / 建蔽率：60% (最大113.4㎡) / 容積率：100% (最大189㎡) / 高度地区：第一種高度地区

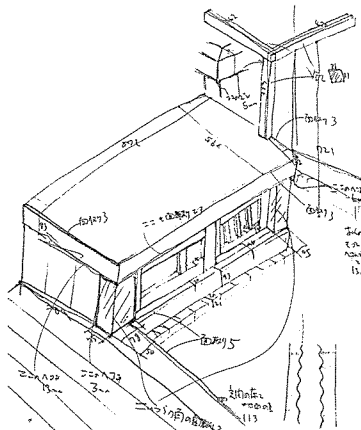


●敷地図

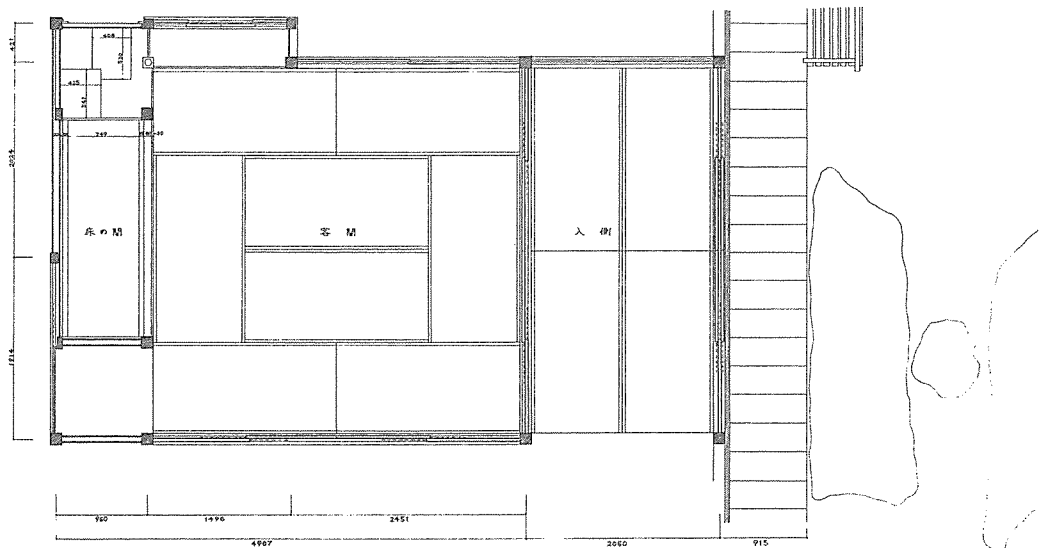
2. 木造住宅作品の実測調査



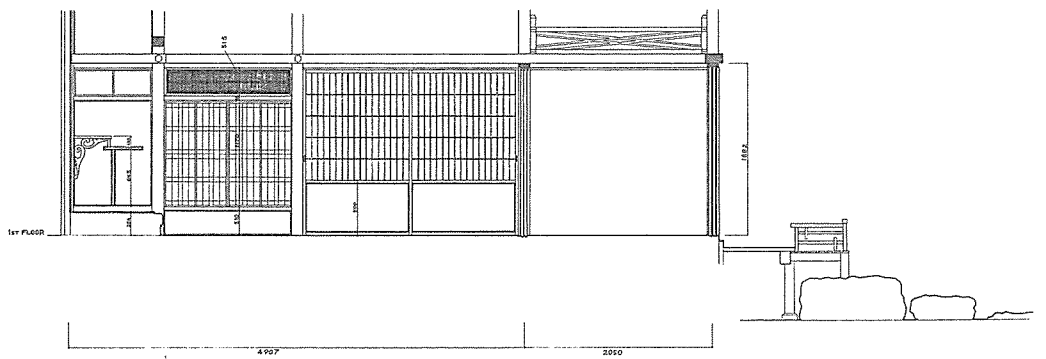
●実測野帳1：小出邸玄関展開



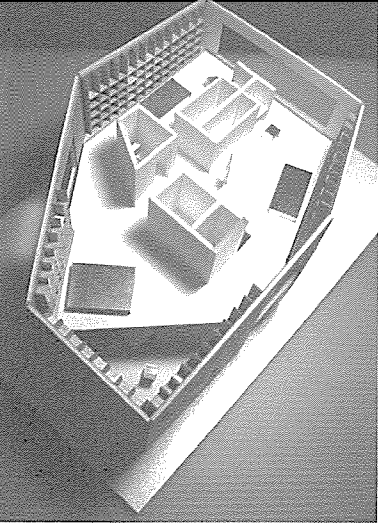
●実測野帳2：小出邸下駄箱



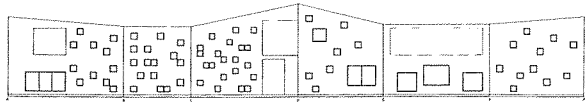
●三井邸平面図：金野千恵



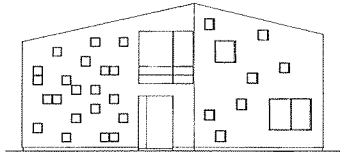
●三井邸展開図：金野千恵



●模型写真



●展開図



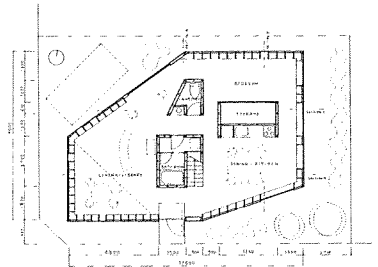
●南立面図



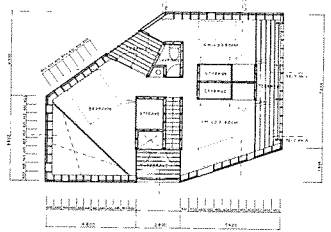
●模型写真

タナノス 能作文徳 Fuminori NOUSAKU

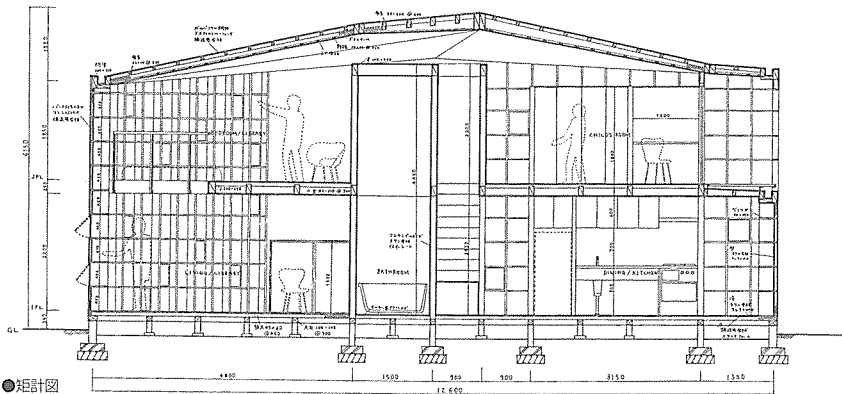
夫婦、老夫婦、子供2人が住む家である。家族はそれぞれたくさんのおもちゃを所有しているため、インフラのボックスをタナで被うことで住む場所ができるのではないかと考え、この住宅を設計した。タナの所々に開口を設け、採光、通風、景色を得ることができ、ものを置いたり取ったりする行為が楽しくなると考えた。また、小さな窓が散りばめられているので、外からはどこにどのような部屋があるのか分からない。そのことが住む人のプライバシーにつながると思った。



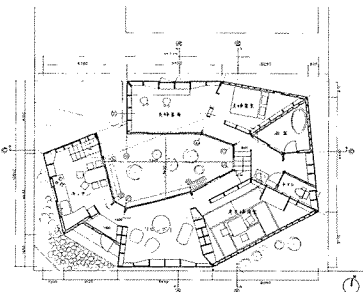
●1階平面図



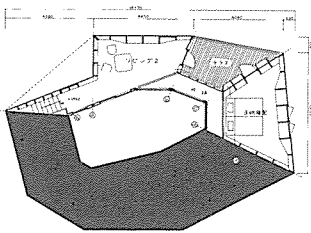
●2階平面図



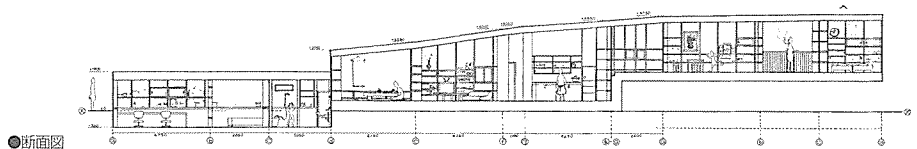
●矩計図



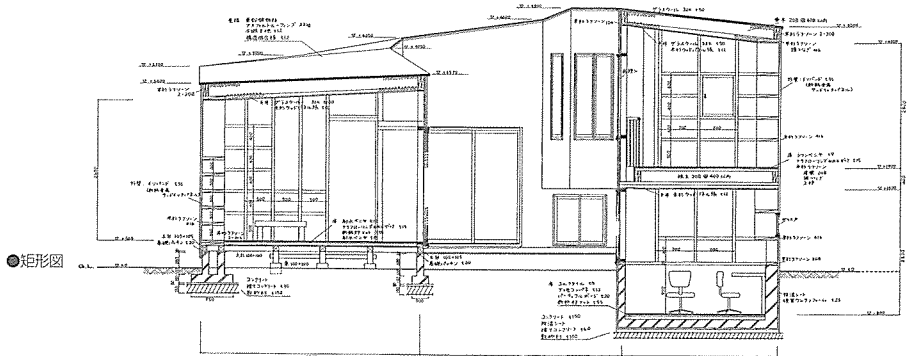
●1階平面図



●2階平面図



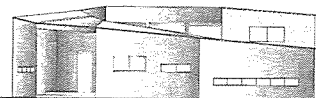
●断面図



●矩計図



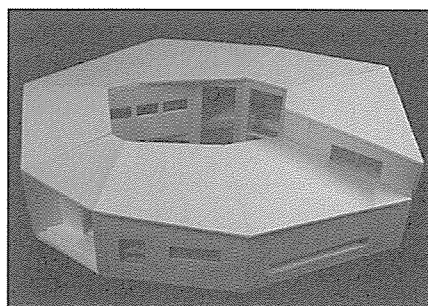
●西立面図



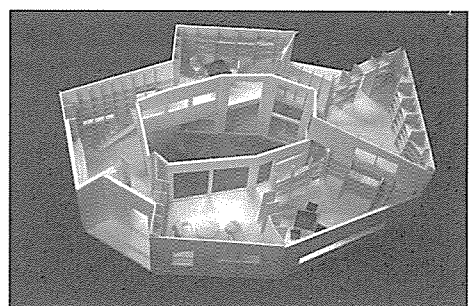
●南立面図

びょうぶの回る家 金野千恵 Chie KONNO

本棚を中庭と部屋との関係を性格づけるものと考え、空間の仕切り等に用いられる屏風に見立てた。中庭 - びょうぶ - 部屋からなる所は中庭から少し隠れた private space または外部、中庭 - 部屋 - びょうぶとなる所は中庭に向かって開く public space となるように配置した。また、全体で1本のらせんを描くことにより、個々に性格づけられた部屋に一体感を与えた。



●模型写真



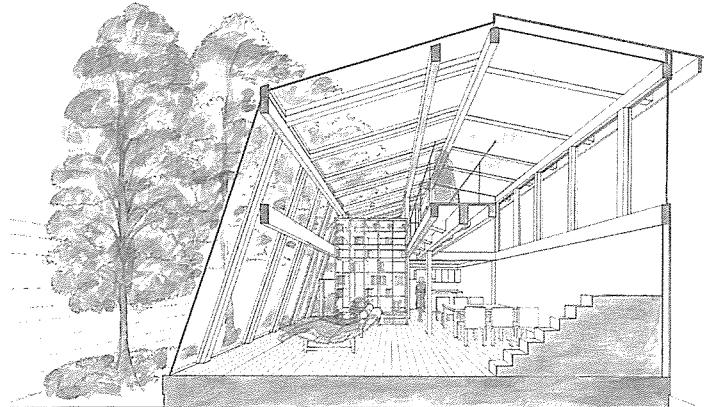
●模型写真

森林浴の家 井橋朋子 Tomoko IHASHI

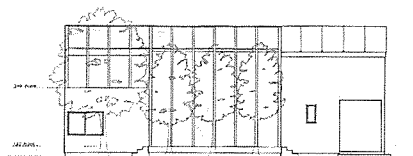
木に囲まれて読書のできる空間を家の中につくりたいと考えた。土地の北側に広めの庭を設け、そこに比較的大きな木々を植え、また、内部には、吹き抜けを持つアトリウムのような空間をつかった。そこでは、木々に反射した穏やかな光の中で読書を楽しむことができる。



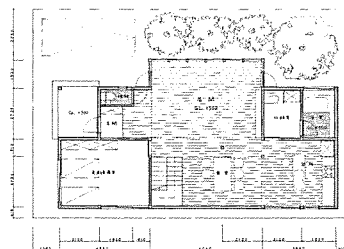
●西立面図



●透視図

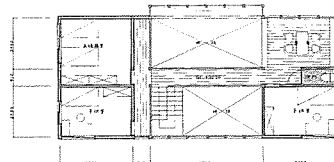


●北立面図

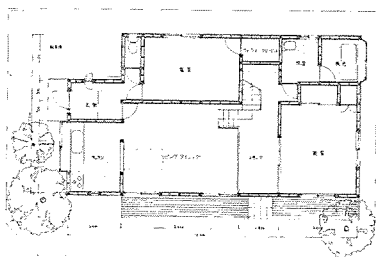


●1階平面図

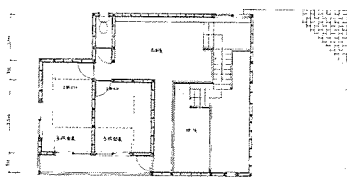
1階平面図 1/50



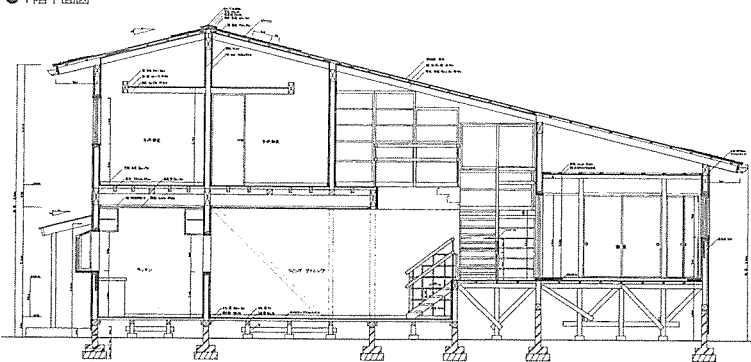
●2階平面図



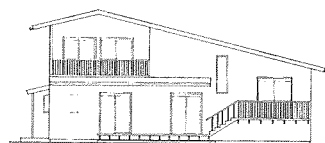
●1階平面図



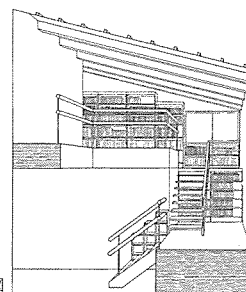
●2階平面図



●矩計図



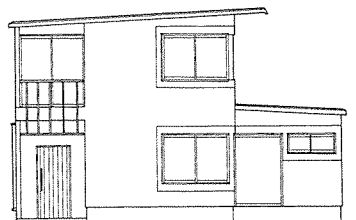
●南立面図



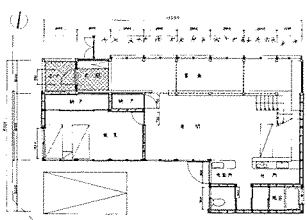
●透視図

STEP HOUSE 久保田創 Hajime KUBOTA

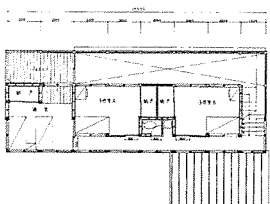
吹き抜けを中心にこの家は構成された。吹き抜けは1階のリビング・ダイニング、中2階、2階の本の部屋を垂直方向につなぐ。また、水平方向にはテラスを通じ庭が広がり、部屋も東西方向に長くつながる。2世帯であるが玄関を2つおいたりせず共にくらすことを意識した。本は2階と階段スペースに配し、1階のリビングとは異なる雰囲気をつくりだしている。2階の本の部屋は、本を読むのはもちろん多目的な部屋とする。



●西立面図



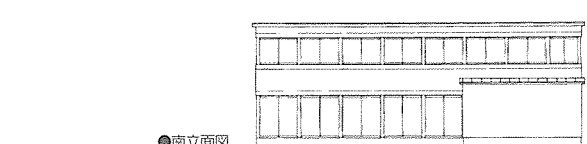
●1階平面図



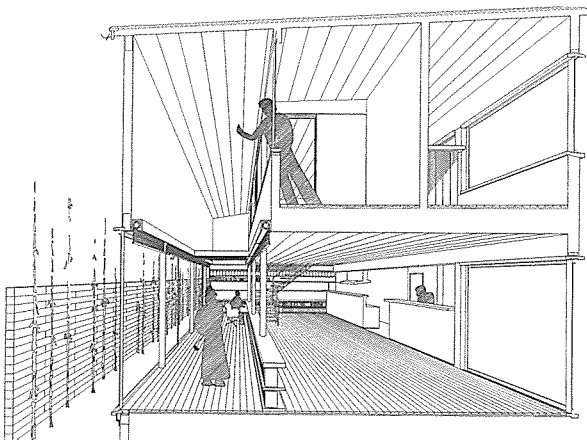
●2階平面図

北を見る家 府中拓也 Takuya FUCHUU

玄関を端部にまっすぐ長く延びた1本の吹き抜け。そこは書斎であり、緩やかに家の内部を結び付けている場でもある。居間にいけば書斎さらにその向こうの北の竹庭に視界が通り、広がりを感じる。二階の子供室は一階とのつながりを感じる。すだれをおろせば吹き抜けは書斎として区切られる。本を通じて家族が、広がりにつながり、そして必要に応じて区切りを使い分けられる家を創出した。



●南立面図



●透視図

建築設計製図第二 / 第1課題

Sophomore-studio Work: Autumn Semester

「ふだんの居場所を考える」

Designing a Daily-use Space

担当:

藍澤宏[教授] 青木義次[教授]

藤井晴行[助教授] 大佛俊泰[助教授]

Hiroshi AIZAWA(Professor), Yoshitsugu AOKI(Professor),
Haruyuki FUJII(Associate Professor), Toshihiro
OSARAGI(Associate Professor)

斎尾直子[助手] 木下芳郎[助手] 菊地聡子[TA]

井上龍之介[TA] 梅田美鈴[TA] 櫻木邦浩[TA]

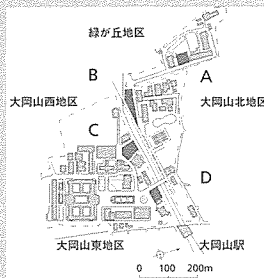
村阪尚徳[TA]

Naoko SAIO(Research Associate), Yoshiro KINOSHITA(Research
Associate), Satoko KIKUCHI(Teaching Assistant), Ryunosuke
INOUE(Teaching Assistant), Misuzu UMEDA(Teaching
Assistant), Kunihiro SAKURAGI(Teaching Assistant), Naonori
MURASAKA(Teaching Assistant)

講評会:

奥山信一[助教授]

Shin-ichi OKUYAMA (Associate Professor)



【課題主旨】

大岡山キャンパス内に、学生のための「ふだんの居場所」を計画する。大岡山キャンパスの中には70棟程度の建物が建ち並び、近年、次々と新築・建て替え工事等も進んでいるが、学生のための空間計画は少ないのが現状である。簡単な飲食を行うスペース、雨の日や授業の合間などの居場所、学部生や大学院生の学年・研究室を越えた研究活動のスペース、近年の建て込みによる緑空間の減少などが不満として挙げられる。課題は、こうした学生の身近なテーマに対して、建物と外構部を一体的に計画し、具体的な空間を提案してもらうことを求めている。敷地として4つの候補地を与え、提案に適した敷地を選べるようにした。

本課題では、すぐに各自が設計にとりかかるのではなく、まずグループディスカッションを行ない、発表会を行うこととした。グループディスカッションと発表会により、自分の意見に対する他人の意見や、他人の考え方を参考にする機会を設け、どの場所にどのような施設があると望ましいのか、また課題についてどのようなとらえ方、考え方があり得るのかを各自がより深

く考えることをねらっている。発表会后、グループごとにA～Dから敷地を選び、グループのメンバーは同じ敷地を設計することとした。個人ごとのエスキースチェック、中間発表会の間にもグループディスカッションの機会を設け、常に他人の設計の進め方、考え方を意識しながら設計を行うように配慮した。

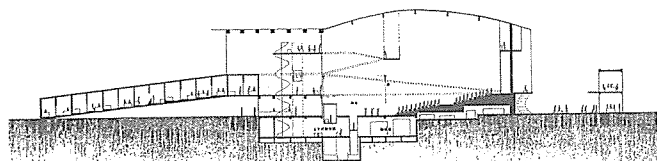
This assignment required design of a daily-use space at O-okayama campus, a location familiar, of course, to students. Discussions were held while designing so that the students would be able to take into account and evaluate the design of other participants.

【課題のプロセス】

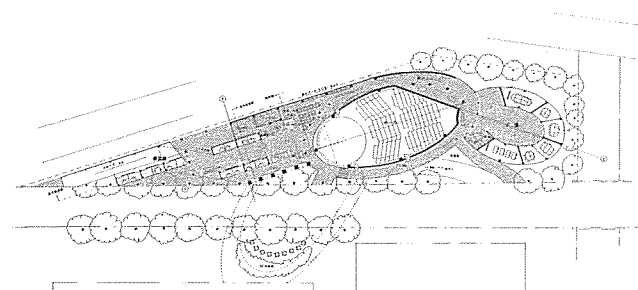
- 1 課題説明、課題内容解説
- 2 キャンパス調査・グループディスカッション
- 3 グループ発表会、グループ敷地決定
- 4 エスキースチェック
- 5 グループディスカッション
- 6 中間講評会
- 7 基本図面しめきり
- 8 最終図面しめきり
- 9 講評会

空中廻廊 上田 遼 Ryo UEDA (敷地B)

●模型写真

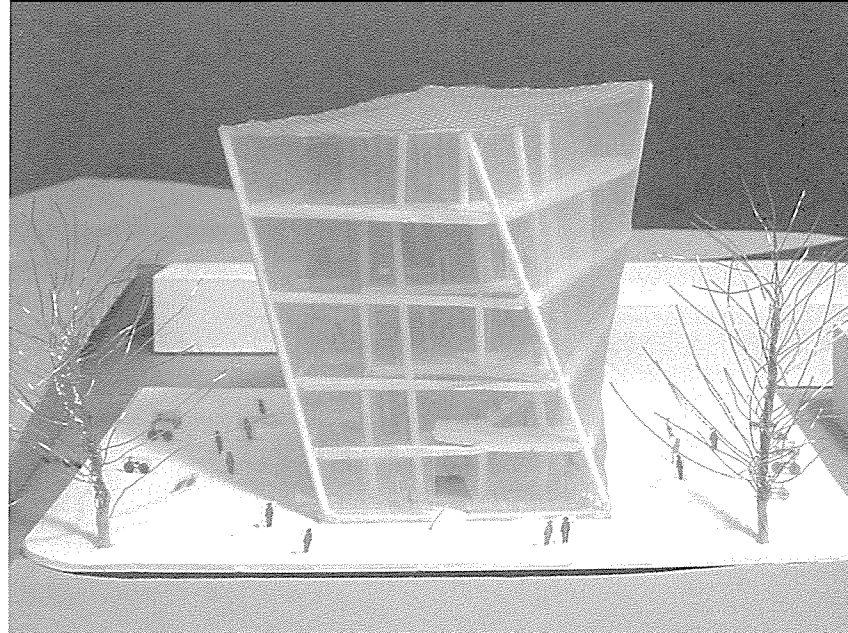
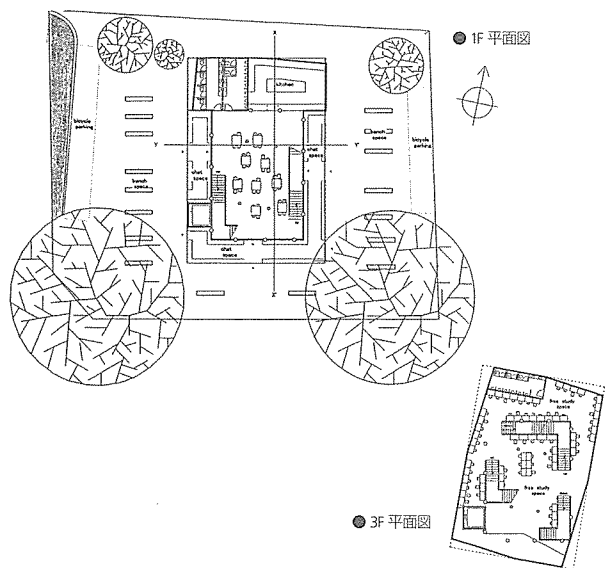


●断面図

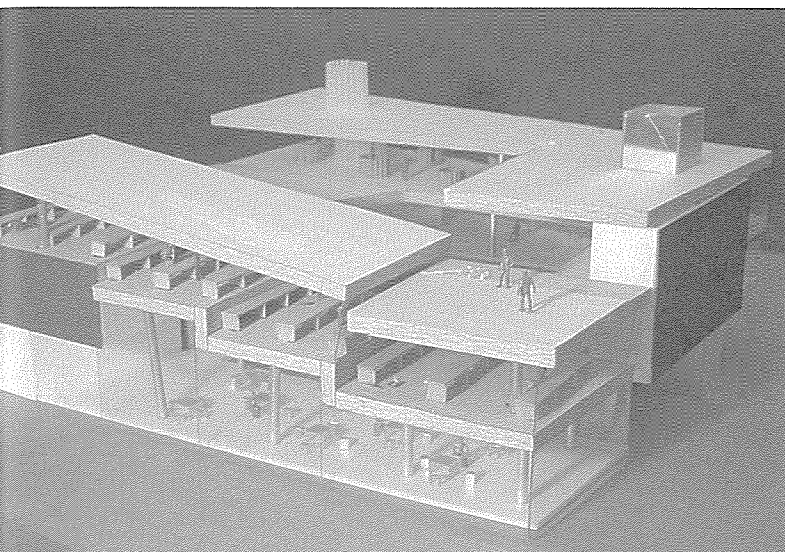


●1F 平面図

Bibliothèque Annexe 冲村徹也 Tetsuya OKIMURA (敷地 D)

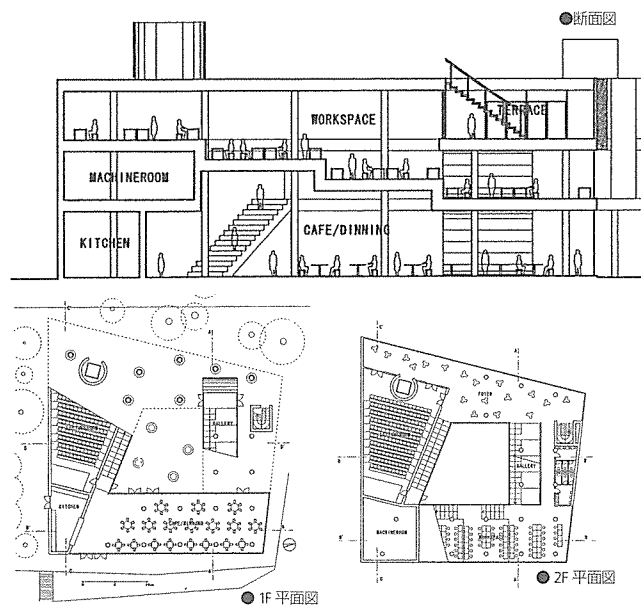


● 模型写真

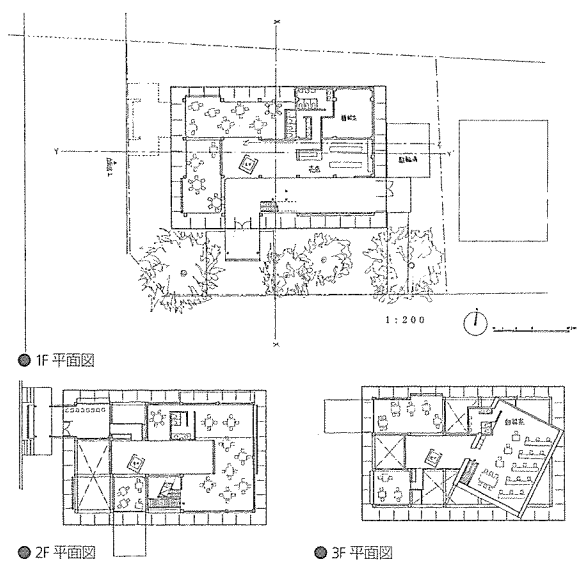


● 模型写真

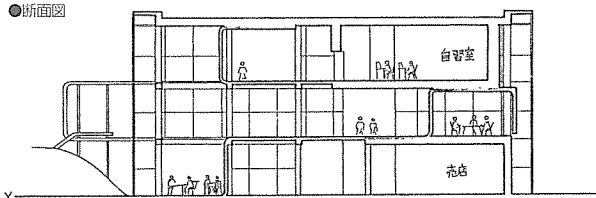
MO11NEXT 能作文徳 Fuminori NOSAKU (敷地 A)



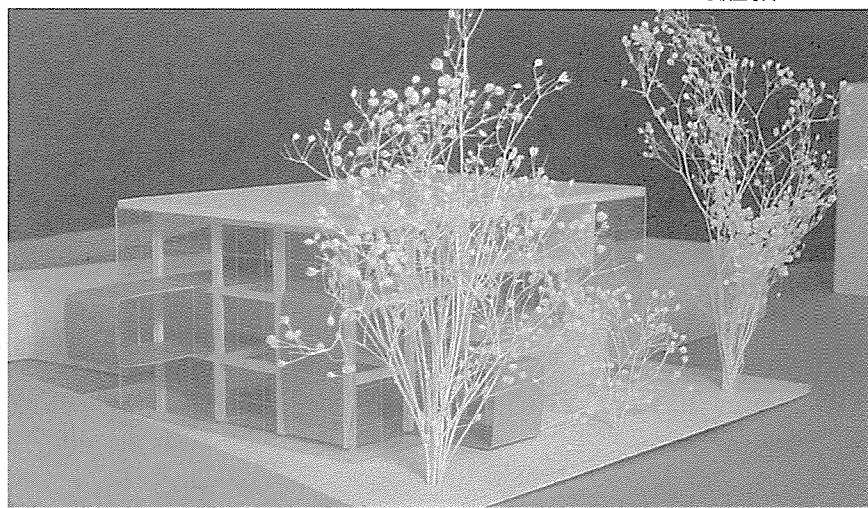
MIXER 吉田拓也 Takuya YOSHIDA (敷地 D)



● 断面图



● 模型写真



建築設計製図第二 / 第2課題

Sophomore-studio Work : Autumn Semester

「都市と住居」

Designing a Daily-use Space : the City and Housing

担当:

青木義次[教授] 奥山信一[助教授]

藤井晴行[助教授]

Yoshitsugu AOKI(Professor), Shin-ichi OKUYAMA(Associate Professor), Haruyuki FUJII(Associate Professor)

木下芳郎[助手] 斎尾直子[助手] 菊地聡子[TA]

井上龍之介[TA] 梅田美鈴[TA] 櫻木邦浩[TA]

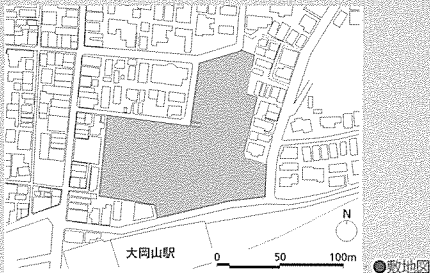
村阪尚徳[TA]

Yoshiro KINOSHITA(Research Associate), Naoko SAIO(Research Associate), Satoko KIKUCHI(Teaching Assistant), Ryunosuke INOUE(Teaching Assistant), Misuzu UMEMEDA(Teaching Assistant), Kunihiro SAKURAGI(Teaching Assistant), Naonori MURASAKA(Teaching Assistant)

講評会:

藍澤宏[教授] 大佛俊泰[助教授]

Hiroshi AIZAWA(Professor), Toshihiro OSARAGI(Associate Professor)



●敷地図

【課題主旨】

本課題では商業施設や公共施設と複合した都市型集合住宅を設計する。住戸内部のプランはもちろん、住戸どうしの関係、住居部分と非住居部分との関係について熟慮し、既存の住まい方にとらわれない、「都市に住む」ということをより実感できる、楽しい住まい方の提案を求めている。

様々な人が生活する都市における集合住宅の設計では、集合住宅や周辺にどのような人がどのような価値観を持って生活しているかをまず考える必要がある。また様々な価値観を持つ住み手や周辺住民に対し、自分の提案を適切にかつ魅力的に説明することも実際の設計では重要である。このように他者の立場に立って考え、他者とのコミュニケーションの中で自分の提案を語ることは、期限内に正しく図面を仕上げることで同様に設計製図で学ぶべき重要なことであるが、本学ではこの能力が未熟な学生が多いように思われる。そこで本課題では計画地を分担してグループ設計を行うこととした。はじめに、計画地をどのように読むか、どのような全体像を形成するかについて議論し、全体コ

ンセプトを作り、そのコンセプトにもとづいて各自が担当する敷地や計画地内の道路の位置を決めた。各自が設計を行う時にも、全体コンセプトの中での自分の役割や、自分の敷地の周辺を担当する人が設計した建物との関係を常に考え、何度もグループで話し合い、調整を行いながら進めていくようにした。このような課題の進め方により、学生が他者を意識して設計を行ない、コミュニケーション能力を高めることをねらっている。

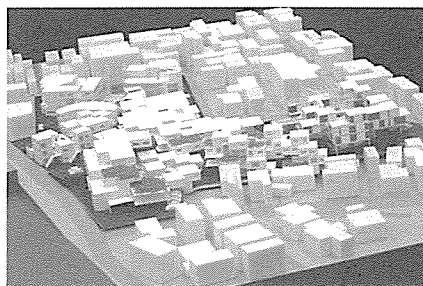
This assignment specified the design of an urban housing complex that was to include commercial, as well as public, facilities. For each building site, a design was produced by a group of six or seven students, since the studio also aims at promoting communication ability and teamwork.

【課題のプロセス】

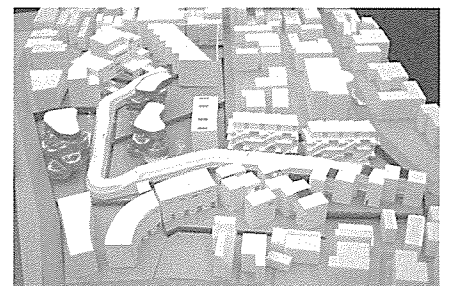
- 1 課題説明、グループディスカッション
- 2 全体コンセプトの発表
- 3 エスキースチェック
- 4 模型、全体配置図提出、中間講評(1)
- 5 エスキースチェック
- 6 基本図面しめきり、中間講評(2)
- 7 最終図面提出
- 8 全体配置図、グループプレゼン資料の作成
- 9 講評会

○各グループのコンセプト

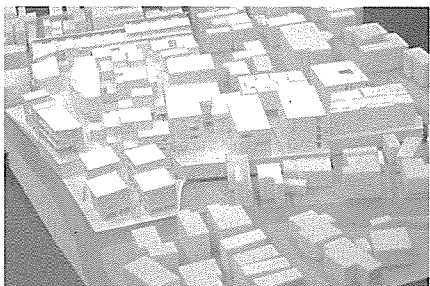
- グループA: エコロジーというテーマを共有する。
- グループB: 温泉を中心とした街を考えた。
- グループC: 建物同士が接するように配置する。
- グループD: 南北に敷地を六等分し、敷地内の経路に選択性を持たせた。
- グループE: 東京を選んで住むことをテーマとした。
- グループF: 小さい建物とレベル差という敷地周辺の特徴を敷地に適用した。
- グループG: 1階部分を大きく開けて通り抜けできるようにした。
- グループH: 敷地内にデッキを設け、その高さによって二種類に性格付けした。



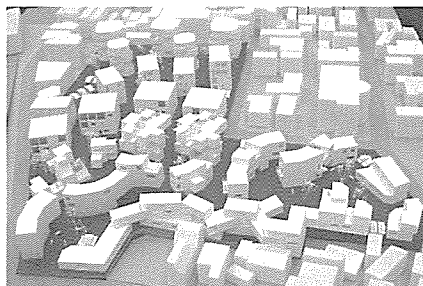
●グループA



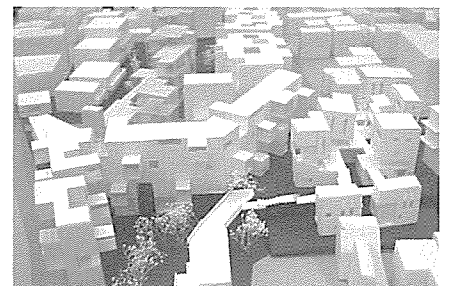
●グループB



●グループC



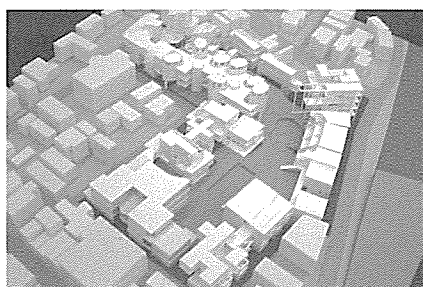
●グループD



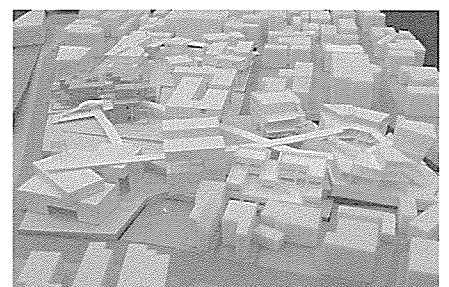
●グループE



●グループF

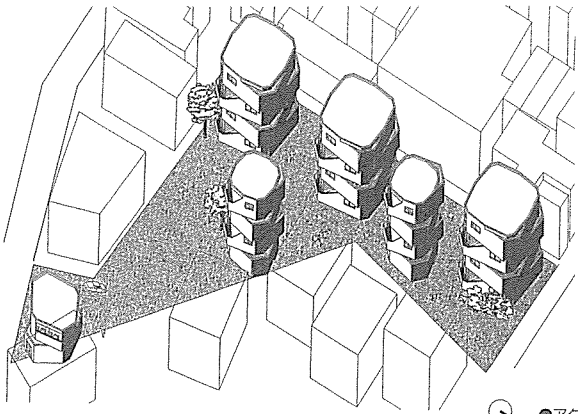


●グループG

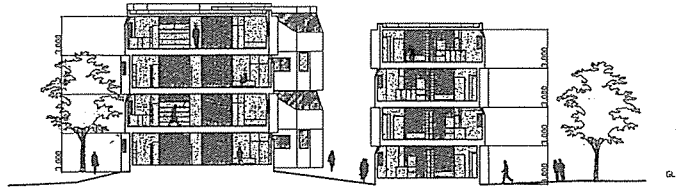


●グループH

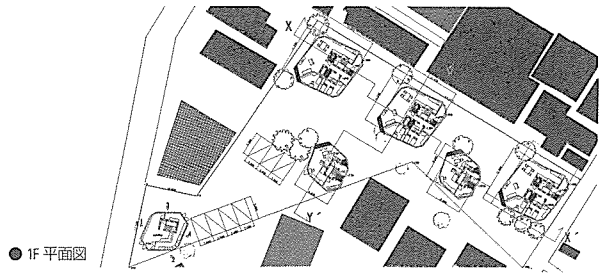
ヒガシトニシノカオノイエタチ 田中真紗美 Masami TANAKA グループD



●アクソメ

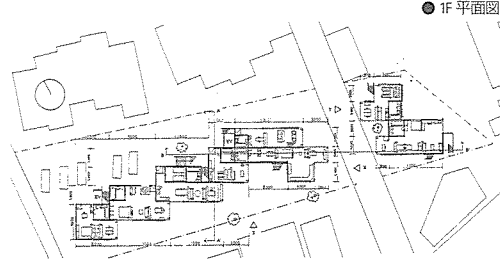


●断面図

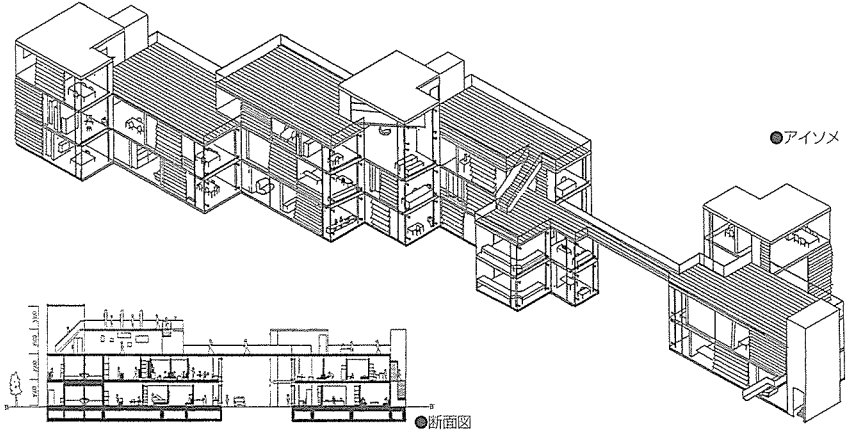


●1F 平面図

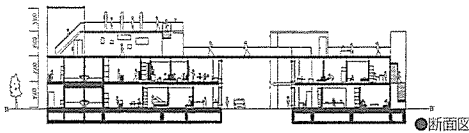
styles 中尾理沙 Risa NAKAO グループE



●1F 平面図

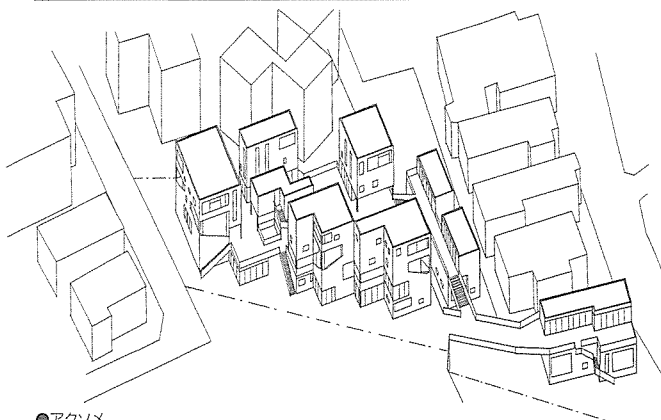


●アイソメ



●断面図

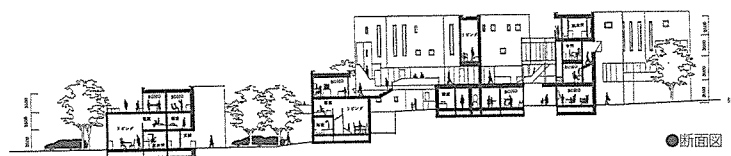
ウチとソト 西浦栄里子 Rieko NISHIURA グループE



●アクソメ

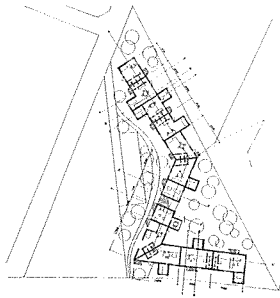


●1F 平面図

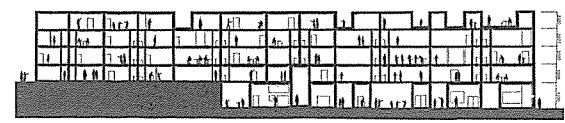


●断面図

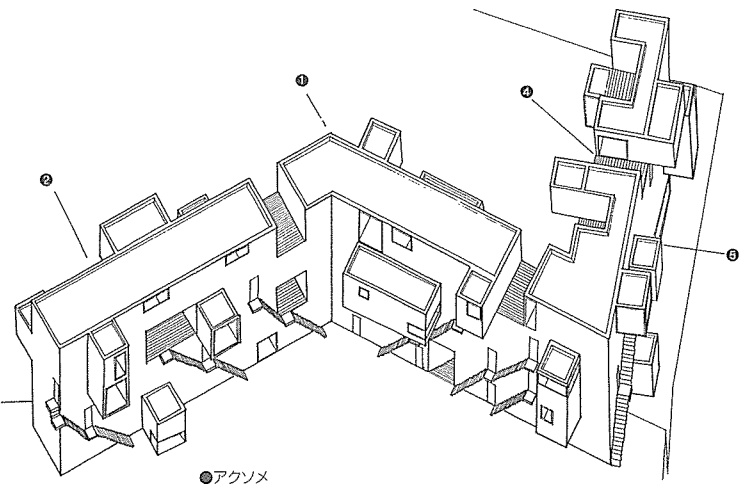
human behaviour 根本理恵 Rie NEMOTO グループE



●1F 平面図



●断面図



●アクソメ

建築設計製図第三／第1課題

Third-year studio work · Spring semester

「原宿～超東京的空間～に建つ複合商業建築物」

“Commerce building complex on Harajuku
—super TOKYO space—”

担当:

ベンジャミン・ウォーナー [非常勤講師、C.D.]

青山スタジオ

Benjamin WARNER (Guest Professor, CDI Aoyama Studio),

八木幸二 [教授]

Koji YAGI (Professor)

是永美樹 [助手] 内山森 [技術補佐員] 松本淳 [D3, RA]

田中盛志 [M1, TA] 山崎範子 [M1, TA]

Miki KORENAGA (Research Associate), Shin UCHIYAMA (Technical Assistant), Jun MATSUMOTO (D3, Research Assistant), Seiji TANAKA (M1, Teaching assistant), Noriko YAMAZAKI (M1, Teaching assistant)

[ゲストクリエイター]

高田典夫 [非常勤講師]

坂本一成 [教授] 安田幸一 [助教]

Norio TAKATA (Guest Professor, Atelier TEN)

Kazunari SAKAMOTO (Professor) Koichi YASUDA

(Associate Professor)

【課題内容】

敷地は、原宿という常に変化し多様な要素の混在するな超東京の場所である。この敷地に特有な歴史的背景、周辺環境をよみとり立地条件を活かしたプログラムに基づいた複合商業建築の計画をする。

①現地調査を行い、原宿・表参道界隈の歴史的背景や敷地周辺の環境を考慮したプログラムをまとめ、グループごとに発表する。

②立地を考慮したプログラムに基づいて、複合商業建築の計画を行う。

The site is in Harajuku (an archetypical Tokyo space) where multiple elements are forever changing and mixing. The assignment was to design a new commercial complex with a program based on the special conditions of the site, rooted in both its historical background and general surroundings.

□課題条件

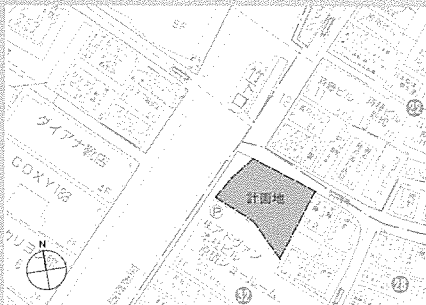
- 敷地：渋谷区神宮前4丁目
- 敷地面積：500㎡
- 建築面積：500㎡以内、延床面積：2500㎡以内
- 駐車場：地下2階に機械式駐車場を設置することを前提とし、1階に駐車場用エレベーターとターンテーブルを計画する。

□提出物

- 配置図
- 平面図（縮尺 1/100）
- 立面図（縮尺 1/100）各面
- 断面図（縮尺 1/100）2面以上
- 矩計図（縮尺 1/20）特徴のある部分1カ所
- 外観パース
- 模型（1/200）



●現地見学会風景



●敷地図

以下は2002年5月30日(木)に行われた講評会の模様を、学生編集員のト部祐加[M2]がレポートしたものであり、文責は編集部にあります(敬称略)。

先生方総評

ベンジャミン——このあたりは近年相当変化しています。表参道はシャンゼリゼみたいな東京の一番綺麗な、中心的な通りだと思いますが、今後同潤会も壊されますし、明治通りも近々拡幅され、地下鉄も通る。どんどん変わっていく。もう少し都市計画的な提案がされることを期待していました。この場所に対してどういう考えを持つか、みんなの提案したそれぞれのプログラムは面白いのですが、この街のために何を寄付できるかということをもう少し考えてほしい。そういう都市計画的な視点からの提案がなかったのが残念です。製図室の中で座って思い込まないで、外に出てものを見て、どんどん刺激を受けてください。

八木——誰に向かって、どう話すかという、人を説得するためのプレゼンテーションにすることにちょっと気を配ってください。このままだとクライアントを獲得するのは難しい。

高田——プレゼンテーションはうまくなっていますが、実際の建築を注意深く見ていない。目には入っているけど全然理解してないのではと思います。ガラスの建物を設計しようと思ったら

実際にそういう建物を観察した上で自分のやりたいことに応用させていく、とうことは絶対に必要だと思います。建築が模型と違うのは、それなりの重力があるので何もしなければ倒れてしまいます。そこに工夫があるわけで構造家がいる、デザイナーがいるわけです。実際の建築家がどう工夫しているのかを、まずはよく見るということです。実際の空間と図面をよく比較することです。こういうことをやろうするとこういう図面になるんだということが分かるはずですよ。

坂本——スケール、プログラム、場所など、やりやすい良い課題だったと思いますが、このスケールならどのくらいのことかというスケール感を養ってほしいと思います。図面や写真を見て実際の空間を想像できないとだめで、学生の時に実際の建物とその図面を徹底的にみて、その力を養ってください。

安田——図面の表現力がついてきて、自分が何がやりたいのかを表現する力が少し出てきたんだという気がしました。残念なのは、やはり普段建築をしっかりと観察していないのがわかってしまいます。是非旅行して、いろいろな人と会い、いろいろな建築を体験することを実践してほしいと思います。建築は縁ですからね。



ベンジャミン・ウォーナー
Benjamin WARNER

経歴

1954年イギリス・オックスフォード生まれ

1979年 The Polytechnic of Central London 卒業

ジョン・ボーン事務所

1981年黒川雅之建築事務所

1985年東京工業大学大学院修士課程修了

1985～86年日建設計

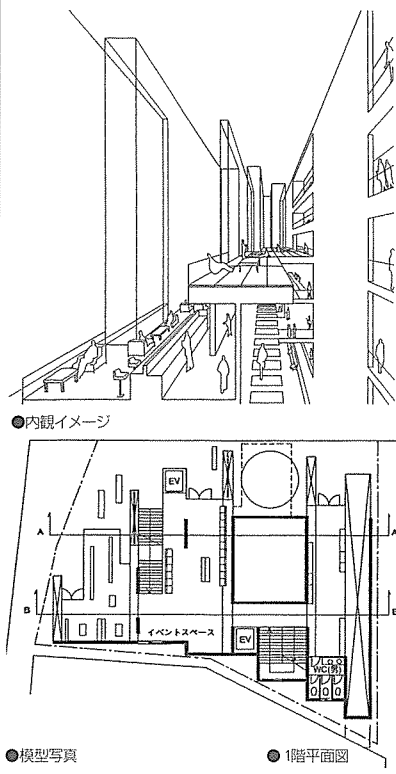
1987年 Richard Rogers Partnership

1992年リチャード・ロジャース・パートナーシップジャパン 設立(代表取締役)

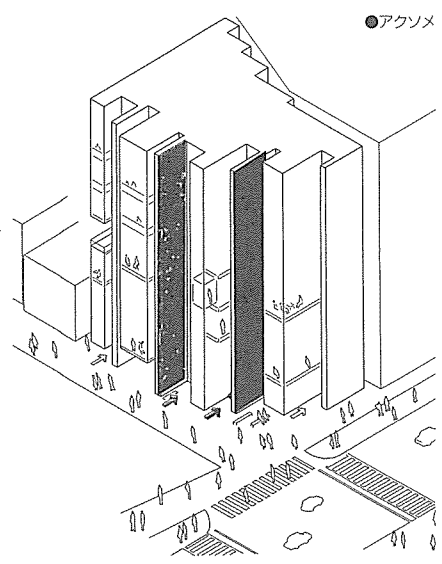
1993年 CDI青山スタジオ設立(代表取締役)

2001年新潟大学非常勤講師

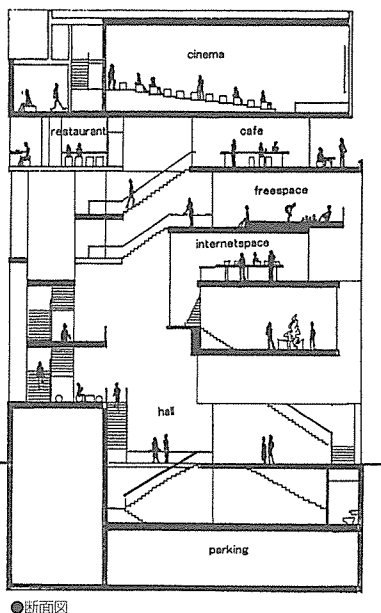
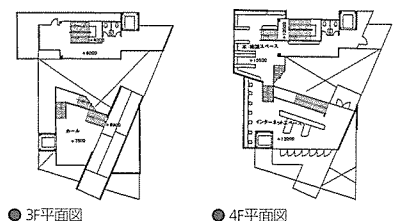
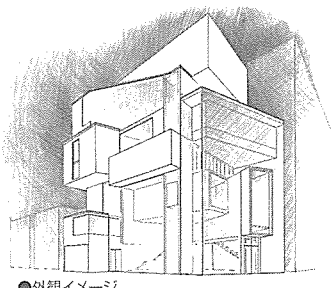
主な作品: V 28、ブリティッシュ・カウンシル東京センター、国立ソウル大学スポーツコンプレックス、台湾国際科学館



リラックス イン プリーツ
内部美鈴 Mirrei UCHIBE



原宿カオス 大森彩子 Ayako OMORI

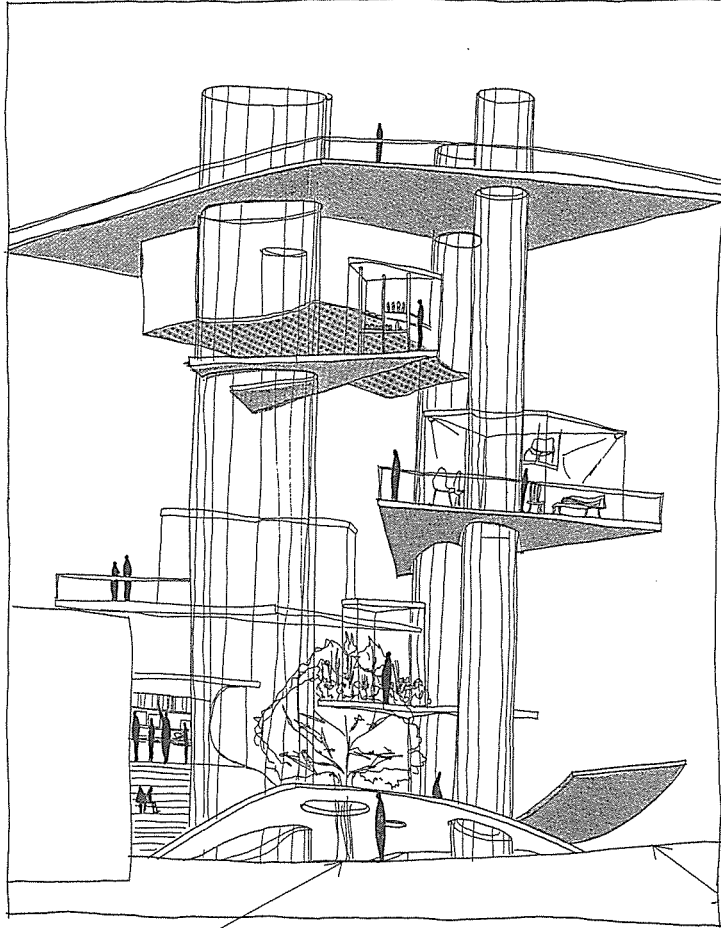


■「リラックス イン プリーツ」内部美鈴 Mirrei UCHIBE
内部——疲れた時のための休憩所です。歩いている人が小道に入っていきようにプリーツの間に入って休める場所を作りました。入り口を4つ設け、竹下通りにいる中高生、表参道を歩く人、裏原宿にいる人、観光客など、原宿にいる様々な人に合う場所を考えました。それぞれの活動が吹き抜けを通して垣間見られます。入口横のガラスケースに広告を掲示できます。
ベン——プログラムはなかなかしっかりしていますね。構造はどう考えていますか？
内部——プリーツの縦の方向に入る壁で支えられています。
安田——構造的には側面から押すとパタンと倒れてしまうけど、珍しく芯の通っている構成です。
坂本——これを壁構造と言ってしまおうとまずく

て、壁式ラーメンとか説明しないとイケない。プリーツの逆方向をちゃんと考えるとリアリティが出てくる。
高田——アドバン側を雁行させるのはあんまり意味がないのでは？
内部——色々なゾーンがあるというのが分かりやすくなるかなと。
安田——のぼりみたいなイメージが軽やかで、「和風」も感じます。

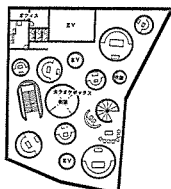
■「原宿カオス」大森彩子 Ayako OMORI
大森——原宿は商業地域であり、住宅地である特有なカオスだと思います。小さなヴォリュームの集まる裏原宿と大きなヴォリュームの集まる明治通りのちょうど交差点にあるという敷地の特性を生かして、商業だけでなく住民も使え

る空間、文化を創り出す表現のための空間を作りました。
安田——カオスといいながら、目的性のある空間は上階に持っていくなどプログラムはしっかり考えている。
坂本——カオスって言うのは構造的な問題かな？ 構造的には成立しているの？
大森——2つのエレベーターと、柱と両サイドの壁で支持しています。
坂本——吹き抜けがないならそれでいいのだろうけど、吹き抜けがあるからね。だからカオスなんですよ。
高田——構造は誰かが考えてくれるものだと思っている。設計者が言わない限り構造家が一番解きやすい方法でしか解かない。構造のシステムは少なくともデザイナーが考えないと。

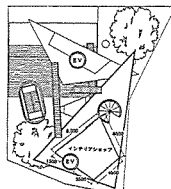


●外観イメージ

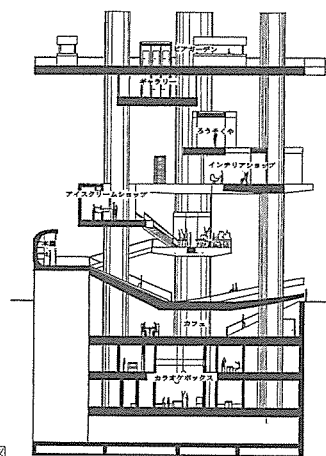
原宿ジャングル
小林はるか Haruka KOBAYASHI



●地下2F平面図

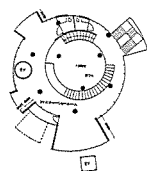


●4F平面図

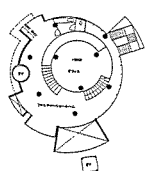


●断面図

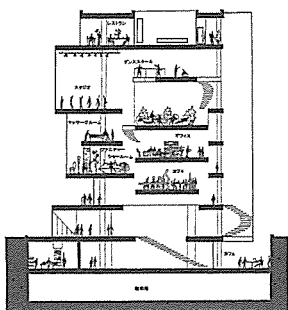
AMANE 小林亜希 Aki KOBAYASHI



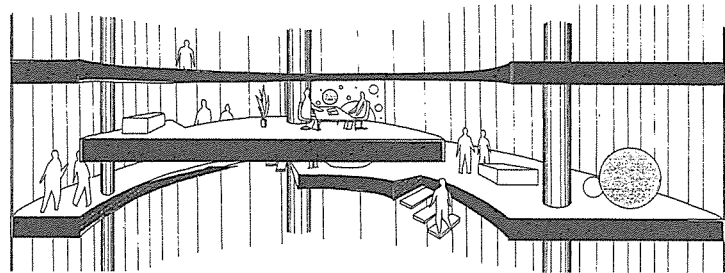
●2F平面図



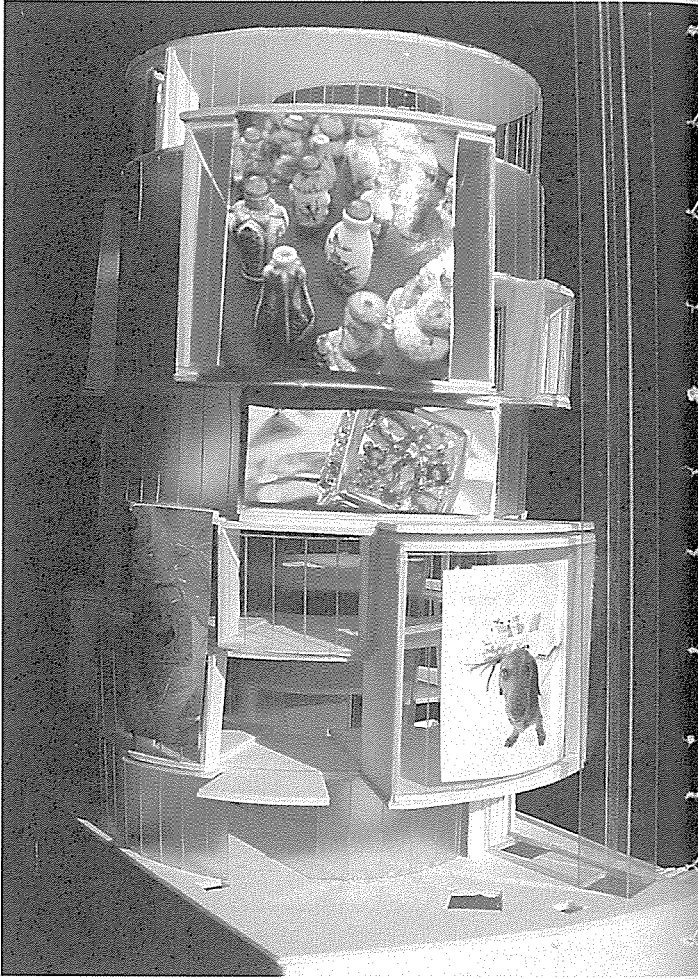
●3F平面図



●断面図



●内観イメージ



●模型写真

■「原宿ジャングル」小林はるか Haruka KOBAYASHI

小林——周辺には店やビルが建ち並んでいるので、その連続の中にちょっと違うものがあると目が向くのではないかと思いました。歩いてくる人の注意を引き込むために、一階部分のスラブを変形させました。4本のチューブはエレベーターと階段になっていてそれぞれ個別に上れますが、それらを回って登る階段も別に設けました。建物としての機能は地下2層分に集約しました。
安田——モニュメンタルな物を地上に上げて他は全部地下にするという手法は存在するけどコストがかかるから、これに手を挙げるクライアントは出てこないかもしれない。

坂本——イメージは面白いと思います。でも敷地の大きさに対して、分節の仕方が細かすぎる。もっと大胆にやった方がいい。
高田——下の木は余計で、これだけ人工的な物の中にあると自然の木が可哀想。2階3階以上のお店はよほど目的性がないと行かないよ。

■「AMANE」小林亜希 Aki KOBAYASHI

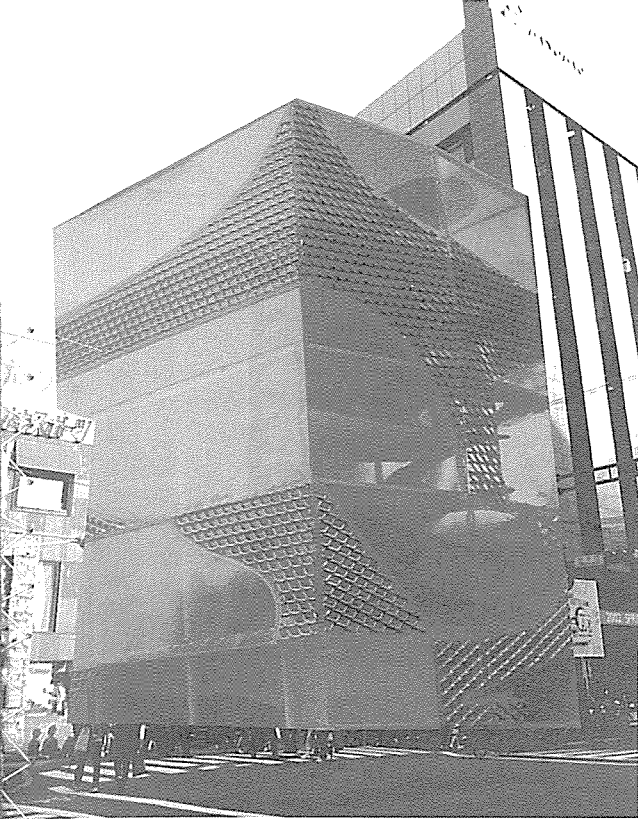
小林——全体は丸い円筒で、それに360度色々な方向に凹凸を付けることで原宿全体に建物自身をアピールしています。内円筒と外円筒の中心をずらして、異なる用途を入れました。外側はショーウィンドウ的な空間として使い、内側に

はカフェやオフィスが入っていて、外円筒を眺めることもできます。

高田——この模型みたいにガラスで支持できるといい。

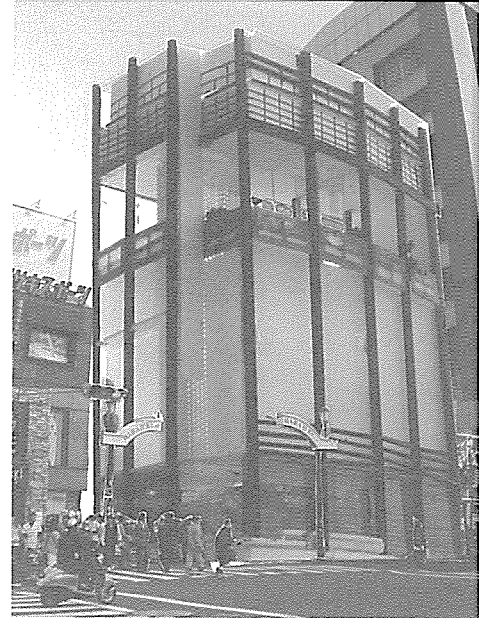
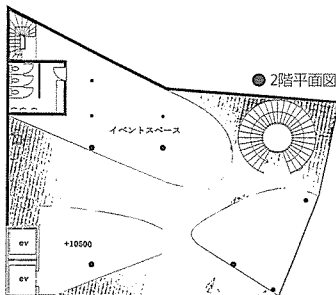
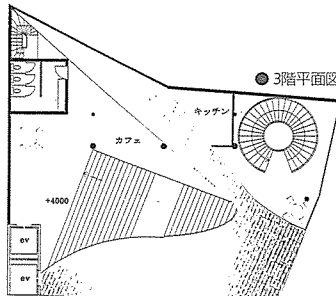
安田——円筒の周囲に細い柱をいっぱい立てた方がいい。原宿というラフォーレ原宿の印象があるんだけど、あれはマッシブな円筒で、こちらは軽快なガラスの円筒で、何となく原宿にずっと入ってくる形をしています。三角形のコアの所を階段に使ったり、プランがうまいですね。
八木——柱の置き方に規則性あるの？

小林——六角形と三角形に並べてますが、ショーウィンドウにかかるところは少しずらしています。



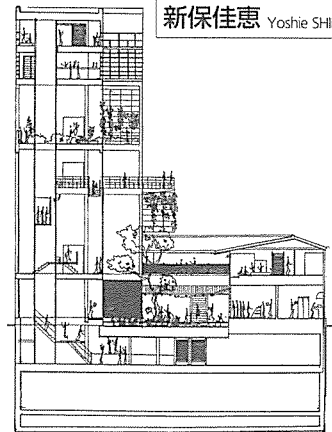
●カラージュ

tatoon 文野義久 Yoshihisa FUMINO

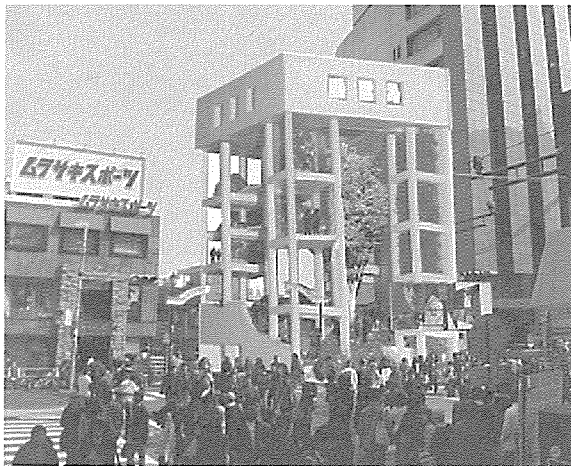


●模型写真

〜華〜
新保佳恵 Yoshie SHINBO

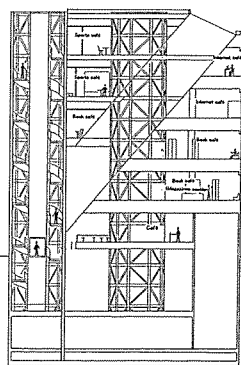


●断面図



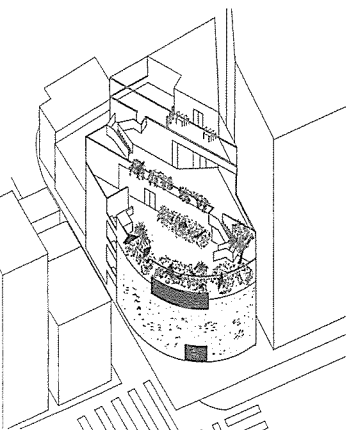
GREEN BOX 栗原淳 Jyun KURIHARA

●模型写真

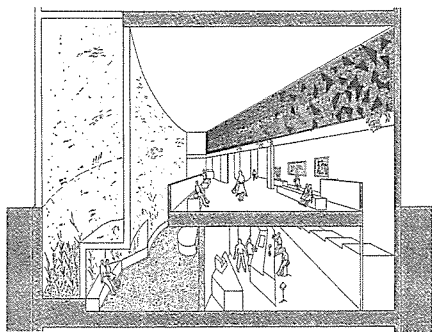


●断面図

LASER BEAM 岡田元 Gen OKADA



Natural Box 井田茉莉 Mari IDA



●アクソメ

●内観イメージ

●「模型写真

■「tatoon」文野義久 Yoshihisa FUMINO

文野——グレーチングが帯状に壁やスラブから這っていく様に上階まで登っていきます。ガラスで覆った面は、歩行者から見るとグレーチングがルーバーの様に視線を遮ったり外からの光の調節をするように働きますが、中に入るとグレーチングの床を通して上下階の光や音などが浸食しあうようになっています。

八木——グレーチングは構造的なものなの？

それとも単に置いてあるものなの？

文野——この下に梁などがあって、それに乗っています。

ベン——グレーチングという構造をもっと考えた方が良かったかもしれないね。

安田——不思議な雲型みたいなパターンが不安定さを醸しだしていて面白いし、非常に危うい印象で、原宿における現代都市の雑踏を表している気がします。

●「〜華〜」新保佳恵 Yoshie SHINBO

●「GREEN BOX」栗原 淳 Jyun KURIHARA

●「LASER BEAM」岡田 元 Gen OKADA

●「Natural Box」井田茉莉 Mari IDA

建築設計製図第三／第2課題

Third-year studio work : Spring semester

「大空間建築」 "Huge Space"

担当:

金箱温春 [非常勤講師、金箱構造設計事務所]

高田典夫 [非常勤講師、アトリエ・テン]

Yoshiharu KANEBAKO (Guest Professor, Kanebako Structural Engineers)

Norio TAKATA (Guest Professor, Atelier TEN)

八木幸二 [教授]

Koji YAGI (Professor)

是永美樹 [助手] **内山森** [技術補佐員] **松本淳** [D3, RA]

田中盛志 [M1, TA] **山崎範子** [M1, TA]

Miki KORENAGA (Research Associate), Shin UCHIYAMA (Technical Assistant), Jun MATSUMOTO (D3, Research Assistant), Seiji TANAKA (M1, Teaching assistant), Noriko YAMAZAKI (M1, Teaching assistant)

[ゲストクリティーク]

金田充弘 [アラップジャパン]

坂本一成 [教授]

Mitsuhiro KANADA (Arup Japan)

Kazunari SAKAMOTO (Professor)

〔課題内容〕

大架構で 4000m² 以上の空間を覆う。その際、建物の機能と構造のシステムとの関係を考慮し、また川沿いという敷地の特性を活かした全体的な計画を行う。

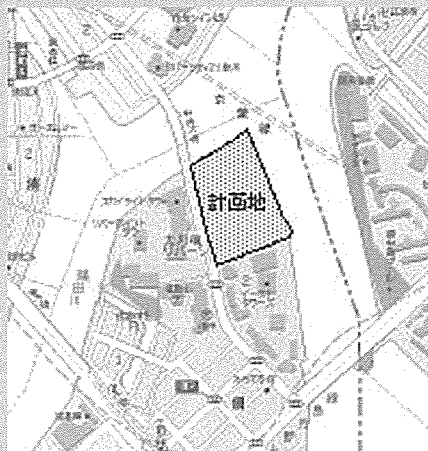
The assignment was to design a megastructure covering over 4,000 m². The goal is a large-scale design, including a site plan for this characteristic location along a river, by means of establishing a relationship between systems and functions.

□課題条件

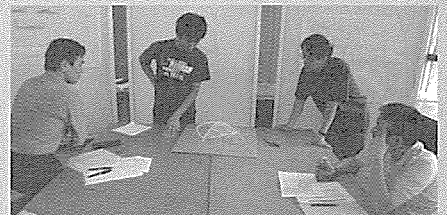
- ・敷地：大川端リバーシティ地区
- ・構造形式：自由
- ・機能：自由

□提出物

- ・配置図 (縮尺 1/500) 周辺環境との関係が説明するもの
- ・平面図 (縮尺 1/300)
- ・立面図 (縮尺 1/300) 2面以上
- ・断面図 (縮尺 1/300) 2面以上
- ・説明図 計画主旨および構造システムを模式図などを用いて簡潔に説明する
- ・パース 大架構で覆われている部分の外観・内観各1面以上
- ・仕上表 主架構を含む部分
- ・模型 (縮尺 1/300) 大架構部分の構造システムを表現



●敷地図



●中間講評会風景

以下は 2002 年 7 月 16 日(火)に行われた講評会の模様を、学生編集員のト部祐加 [M2] がレポートしたものであり、文責は編集部にあります(敬称略)。



金箱温春

Yoshiharu KANEBAKO

1953年長野県生まれ

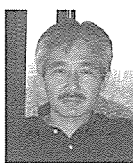
1975年東京工業大学工学部建築学科卒業

1977年同大学院修了。横山建築構造設計事務所入社

1992年金箱建築構造設計事務所設立

1998年日本建築構造技術者協会賞受賞

主な作品: 京都駅ビル、ふれあいセンターいすみ、遊水館、湯博博物館、広島市立基町高校、兵庫県立新美術館



高田典夫

Norio TAKATA

1951年東京都生まれ

1974年東京工業大学工学部建築学科卒業

1976年同大学院修了 東京工業大学工学部建築学科技術補佐員

1978年東京工業大学工学部建築学科共通講座(長津田計画室) 助手

1978年横総合計画事務所

1990年レンゾピアノ/ビルディングワークショップジャパン

1991年ヘルム建築都市コンサルタント

1998年アトリエテン設立 現在に至る

2003年実践女子大学生生活学部生活環境学科

主な作品

横浜市立川和中学校、慶應義塾日吉図書館、東京体育館、関西国際空港旅客ターミナルビル、中野坂上サンブライトツイン(日本建築学会 作品選奨)、レジデンス中野坂上、デイホーム玉川田園調布(日本医療福祉建築協会 医療福祉建築賞)、二俣尾・武蔵野市民の森 拠点施設

総評

金箱——重要なのは、プロポーションと力の流れをどういう風に把握するかです。同じような部材で全体を分散系にする、ヒエラルキーを付けて集中させる、方向性を持たせるなど、バリエーションを身につけてほしい。もう一つ重要なことは、デザインと構造のバランス。やはり建築のデザインは魅力的でないといけないし、そのデザインにいかにか構造デザインがうまく整合しているか、構造デザインそのものに創意工夫があるか。今後の課題でも、構造との関係を常に頭の隅において下さい。自分なりに構造のイメージを考える癖をつけることが重要です。

高田——全体的にはよく頑張ったと思います。でももう少し前から気合いを入れて議論してください。特に3年生の時期はやればやるほど確実に良くなります。意匠的立場からの感想は、配置までをきちんと計画してほしい。この敷地でなければできないものを作ってほしい、それを表現できるのが配置図です。

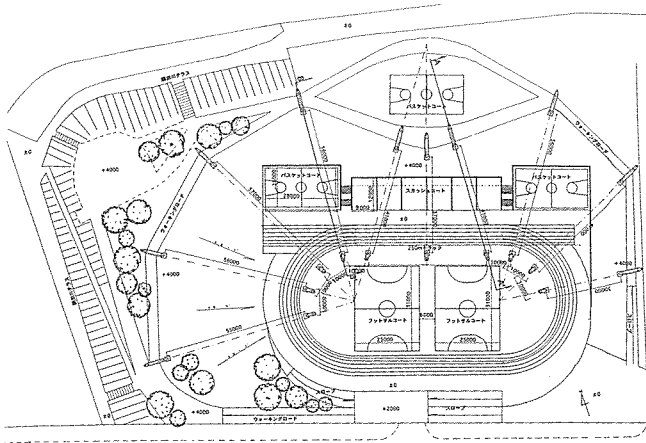
金田——構造のリアリティーを考えながら建築を作っているという点で非常にレベルが高いと

思いました。設計は、その制約を味方にできる人とできない人がいます。プレゼンテーションではもっとストーリーを作って、自分が実現したいことを社会的に説得できるようになってください。その時に構造だけでなく設備や環境などの幅広いエンジニアリングを自分のツールとしてできれば、より説得力のある建築ができると思います。

坂本——可能性のある作品が多くありましたが、次の課題になると構造のことを忘れてしまう。どんな建築でも構造がよくなったら面白くない。今回は構造に特化して、配置計画とか建築的計画がとても貧弱。特化した故に得られた内容を是非保持してほしい。

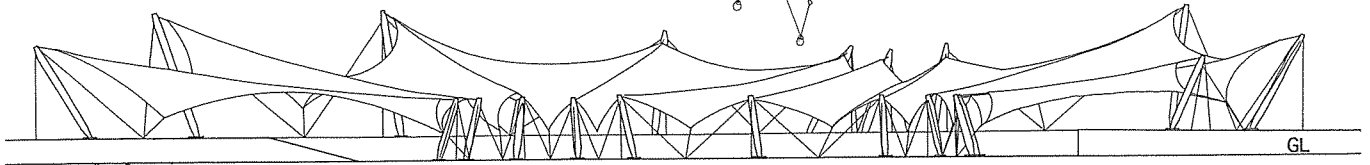
八木——設計課題でこれだけ構造の先生に参加してもらおうという非常に幸せな珍しい設計課題でした。高校まで結果が一つしかないような勉強をしてきていて、議論やプレゼンテーションの力が非常に不足している。それは社会全体の問題ですが、自分の思っていることをきちんと表現する力が非常に必要です。自分をいかに見せるかということにもっと気を付けて努力してください。

relaxer 殿井環 Tamaki TONOI

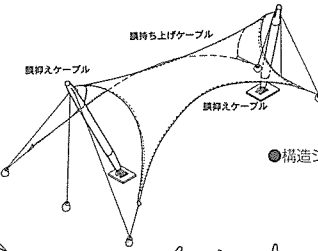
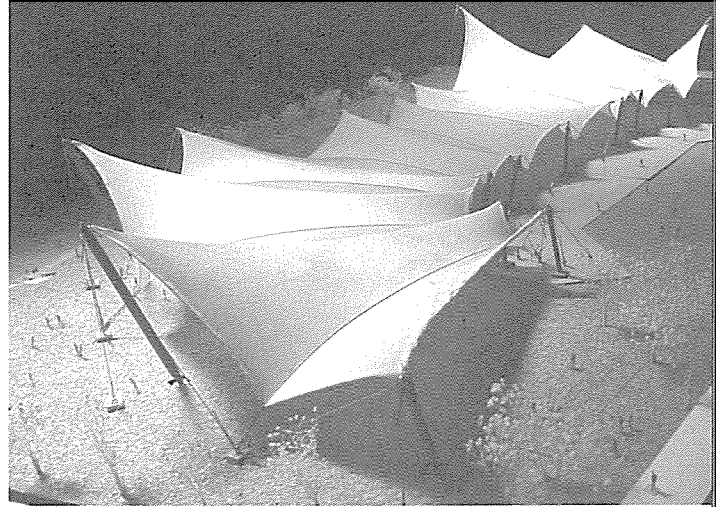


●平面図

●立面図

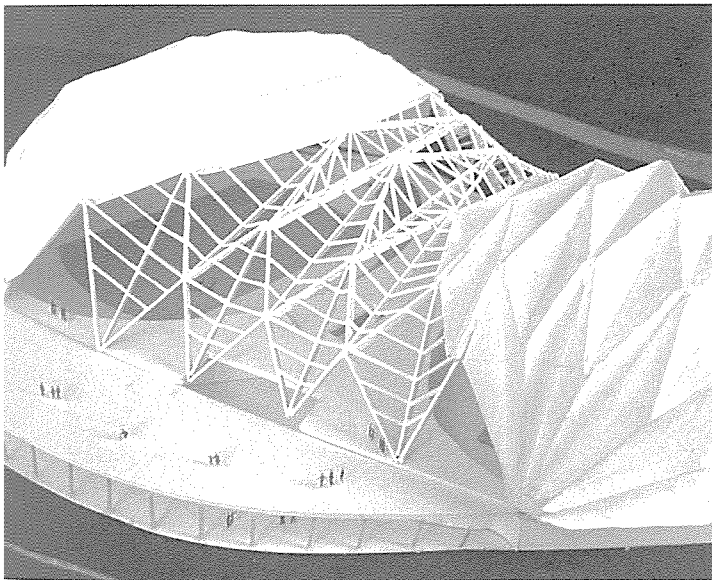


●模型写真

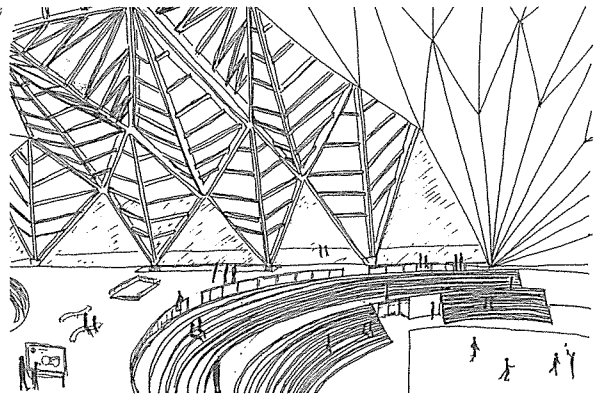


●構造システム図

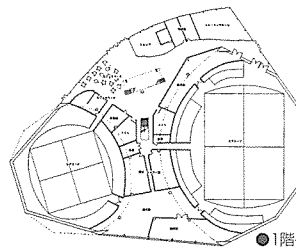
Ori-Ita Twin 鈴木彩子 Ayako SUZUKI



●内観イメージ



●大ドーム展開図



●1階平面図

●模型写真

■「relaxer」殿井環 Tamaki TONOI

殿井——周辺にはオフィス街、再開発した超高層住宅地、昔ながらの住宅地といった3つのゾーンがあって、それらの関係を和らげる場所として、運動場付きの公園を作りました。2本の柱で持ち上げられたケーブルが幕を持ち上げ、そのケーブル間に配したケーブルで幕を押さえて全体を固定しています。

金箱——模型のディテールが綺麗。

金田——長い柱と短い柱のスケール感が違う。軽快感のあるところと重いところとあって、その辺はもっと細くしていいと思う。

高田——敷地全体を使って川側からの見え方とか逆側からの全く違う見え方とか考えたところは

すごくいい。

金田——トラックのコート配置と構造の支持位置の関係が面白い。

殿井——イメージとしては、自分たちが小さい頃野球とかサッカーをして遊んだ何も無いグラウンドに、芝があったり、ゴム質のトラックがあったり、ちょっと豪華な近所の公園です。

■「Ori-Ita Twin」鈴木彩子 Ayako SUZUKI

鈴木——市民のための体育館施設。一枚の面から作れる折板構造で2つのドームを作ったその下に大きさの異なる2つのフロアを入れました。その間は線材だけ繋いで、光の入る空間になっています。

高田——レベル差を、動線の処理にうまく利用していてもいい。形が有機的で、配置図が単調になっていない。

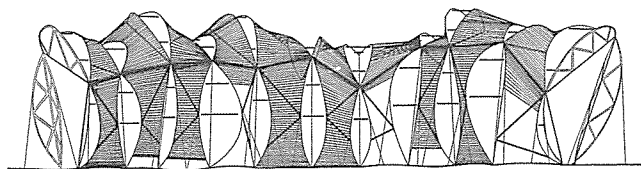
金箱——構造も3つに分けていて、右側と左側は左右対称、少しずらして真ん中のガラスの入るところで固定している。建築と構造が整合しているし、ちょっと崩してるから非常に魅力的。

金田——折って行ってドーム状になるものを、切れ目を入れてキュッと摘みでるのが面白いと思いました。

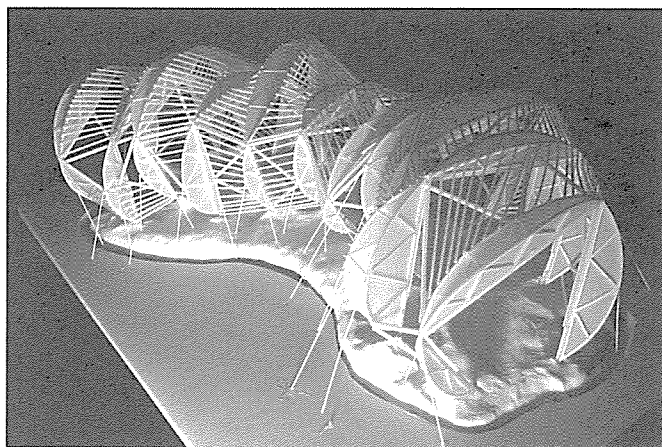
鈴木——模型を作りながら、平行だと単純になるので逆に川に開くことを考えました。



●内観イメージ

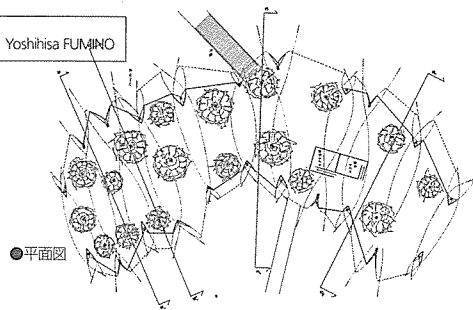


●立面図



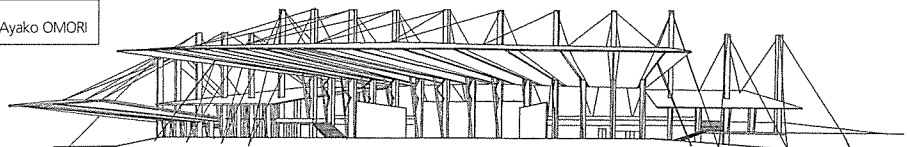
●模型写真

ephed 文野義久 Yoshihisa FUMINO



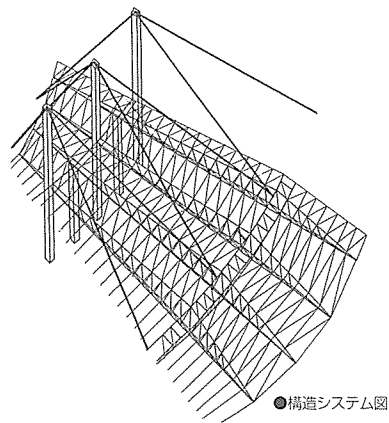
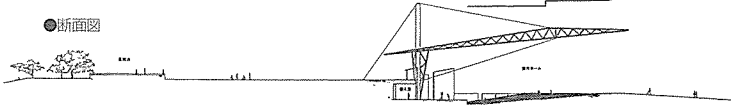
●平面図

RIVER RUNS THROUGH IT 大森彩子 Ayako OMORI



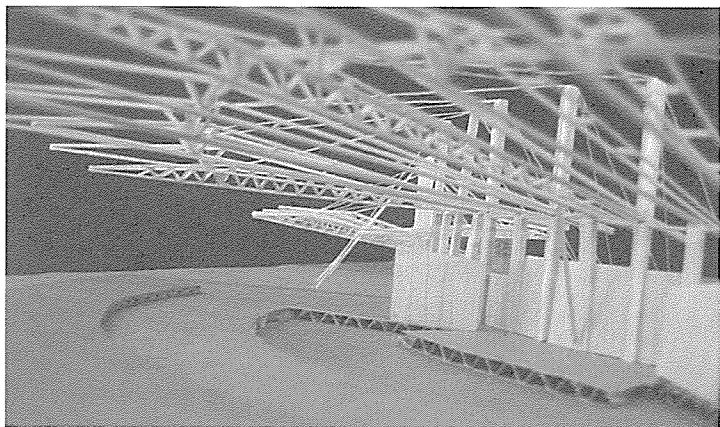
●立面図

●断面図



●構造システム図

●模型写真



■「ephed」文野義久 Yoshihisa FUMINO

文野——周りを薄い水に囲まれた植物園を計画。構造は崩れた門型のようなものから2方向に羽根を出して、1つのユニットの羽根の曲がった接線上から左右に計4本のケーブルで引っ張って変形を防いでいます。

金箱——主構造だけではヒンジが4つあって不安定となります。そこで両側にケーブルを配していますが、片側が引張で効くとスリーヒンジの構造となり安定します。またケーブルは直交方向のブレースの役目も果たしている。極めて面白いシステムです。

金田——羽根みたいに開いているところは立体トラスになっていてとても面白いと思います。作

りたい空間と構造がうまく合致しています。

八木——架構が光が通ってどう見えるかまで考えるのはすごくいい。

■「RIVER RUNS THROUGH IT」

大森彩子 Ayako OMORI

大森——川に囲まれた敷地なので川に対して開き、流れが感じられるような、構造が綺麗に見えるようなものを作ろうと考えて、吊り構造にしました。野外ホールの屋根を立体トラスで吊っています。また野外ホールへ続く船着き場からのアプローチ空間、陸側からは住民の人たちが気軽に入ってこられるような公園を計画しました。

金箱——端部の吹き上げ防止材だけ形状が異なっている。この材はない方が綺麗なのでは？

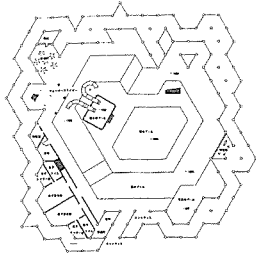
金田——この柱状の状態では力を受けるのが大変。断面図みたいに下からトラス状のものが立ち上がってくれば受けられると思うけどでもそれはいい。

八木——実際下の方から見上げると逆に上に飛び上がった方がいいのでは？

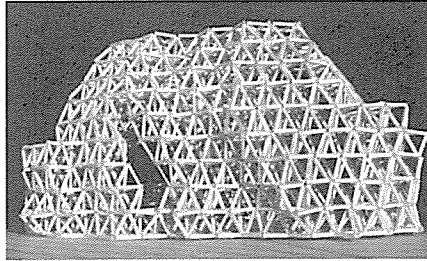
大森——敷地がめくれるようなイメージにしました。

八木——この場合は下からの視線に対して形をいかに綺麗に見せるかということを考えて方がいい。

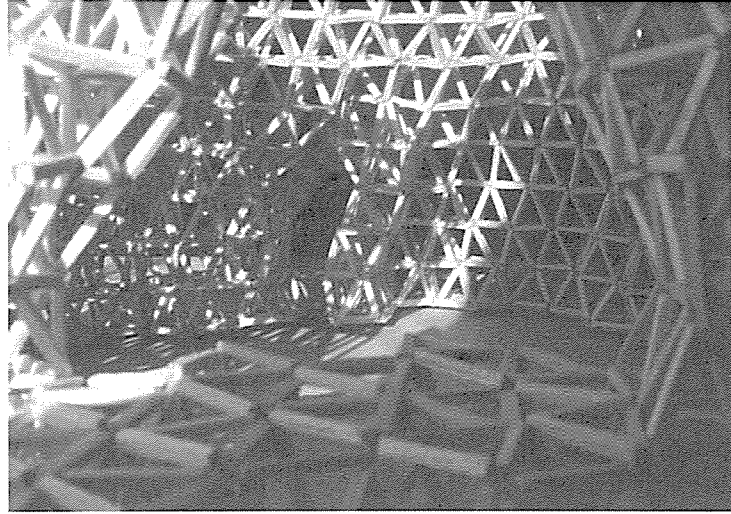
トラスロッククライム 溝口恵美 Emi MIZOGUCHI



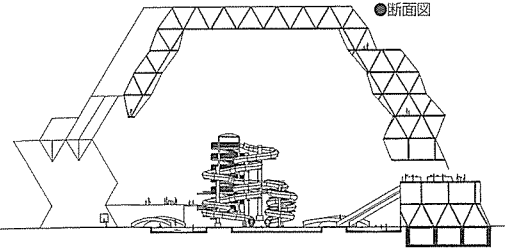
●1階平面図



●模型写真

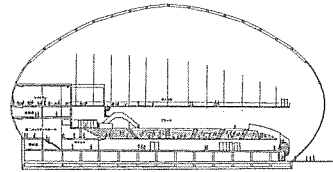


●内観イメージ

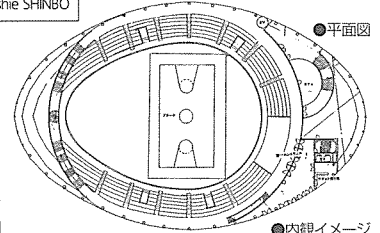


●断面図

RIVER SIDE EGG 新保佳恵 Yoshie SHINBO



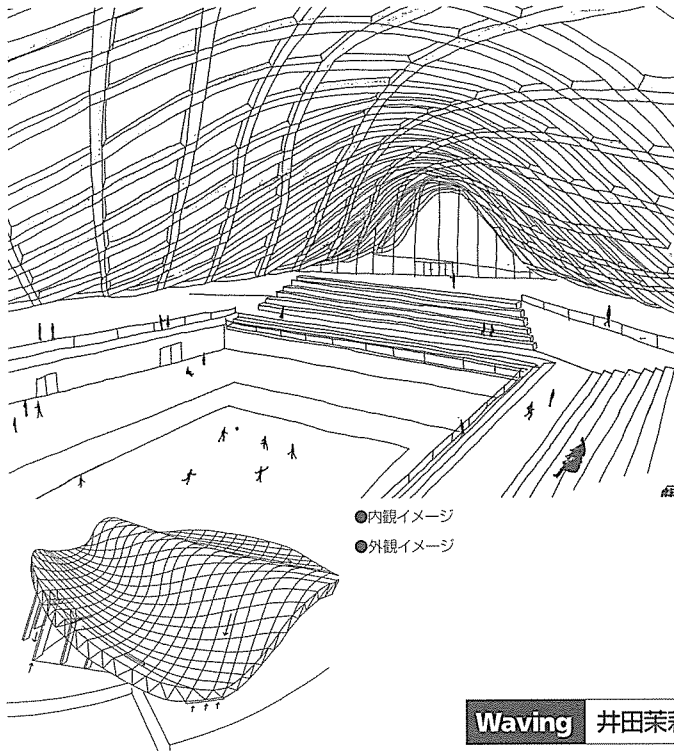
●断面図



●平面図

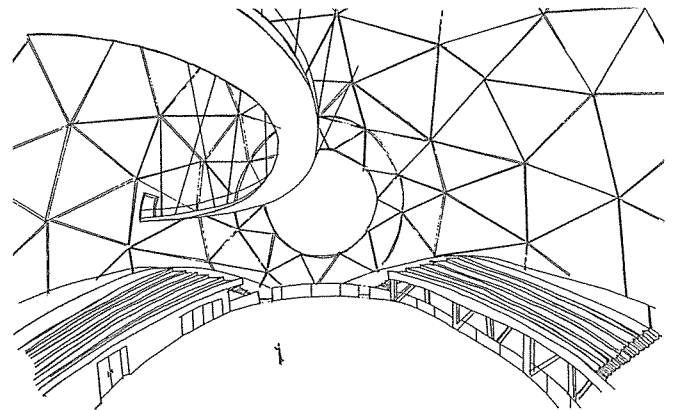
●内観イメージ

winding 内部美鈴 Mirei UCHIBE

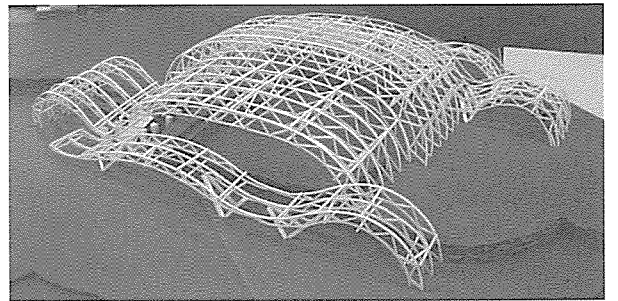


●内観イメージ

●外観イメージ



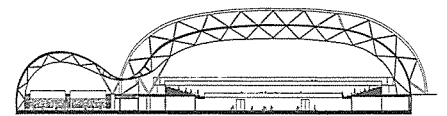
Waving 井田茉莉 Mari IDA



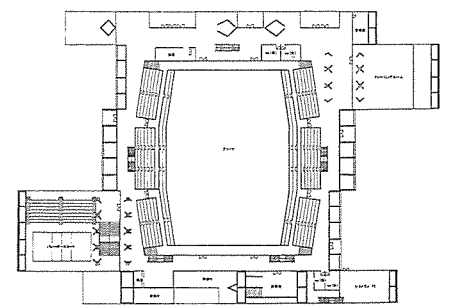
●模型写真

■「トラスロッククライム」溝口恵美 Emi MIZOGUCHI
 溝口——ランダムに重ねた正四面体トラスを利用した迷路で大空間を覆いました。この迷路はパネルを加えて螺旋階段にしていくことで中身を変化させていくことができます。大空間の構造体を身近な物に感じられるように集成材を使用しました。
 金田——迷路の中は歩けるということですか？プランは模型作りながら考えたようだけど、そういう建築っていいと思います。
 金箱——最初から70mのキューブを作りたいということで、二次部材が必要になるという話をしたら、それなら全部細かい部材で組み立てれば形も変形できるという風に、最初は構造のこ

とを意識していなかったけどだんだん理解してきた。
 坂本——そういう実感が大事。
 金田——大空間を作る時に、キールトラスを組んでそれにサブのシステムを架けていくという考え方と、一つのユニットのシステムを解いてそれを自由に展開していくという全然違うアプローチがあるんですが、これはその自由さが出ていいですね。
 ■「winding」内部美鈴 Mirei UCHIBE
 ■「RIVER SIDE EGG」新保佳恵 Yoshie SHINBO
 ■「Waving」井田茉莉 Mari IDA



●断面図



●1階平面図

建築設計製図第四 / 第1課題

Third-year studio Work: Autumn Semesterr

せんだいメディアテーク・アネックス "Sendai Mediatheque Annex"

担当:

西沢大良 [非常勤講師、西沢大良建築設計事務所]
Taira NISHIZAWA (Guest Professor, Taira Nishizawa Architects & Associates)

坂本一成 [教授]

奥山信一 [助教授] **塚本由晴** [助教授]
Kazunari SAKAMOTO (Professor),
Shinichi OKUYAMA (Associate Professor), Yoshiharu TSUKAMOTO (Associate Professor)

中井邦夫 [助手] **足立真** [助手]

久野靖広 [D3,TA] **遠藤康一** [D1,TA]
Kunio NAKAI (Research Associate), Makoto ADACHI (Research Associate), Yasuhiro KUNO (D3, Teaching Assistant), Koichi ENDO (D1, Teaching Assistant)

[ゲストクリティック]

桑原立郎 [クワハラオフィス]
八木幸二 [教授] **安田幸一** [助教授]
Tateo KUWAHARA (Kuwahara Office),
Koji YAGI (Professor), Koichi YASUDA (Associate Professor)

以下は2002年11月15日に行われた展覧会の模様を、学生編集委員の倉林 尚彦 (M2) がレポートしたものであり、文責は編集部にあります (敬称略)。

昨年オープンした「せんだいメディアテーク」(設計: 伊東豊雄) の隣に、アネックスを設計してください。

どんな状況が来ると「せんだいメディアテーク」に増床が必要になるか、よく考えて設計してください(←これが非常に重要)。またメディアテークのどこがダメになるか、よく考えてください(←これも非常に重要)。

課題の目標は、もちろんメディアテークよりも優れた施設をつくること。がんばってください。

The aim of this studio was to design an annex to the Sendai Mediatheque, which opened in 2001 (design: Toyo Ito). It was essential to consider the provisions under which expansion was desired and also what parts of the former building might be made redundant. In other words, the goal of this assignment was to design a better building compared to the old one.

[設計条件]

敷地: メディアテークの西側隣地群 (図参照) のどれか
状況の設定: アネックスが必要になる状況を、各自具体的に考える。メディアテークのどこがダメになるか、各自考える。

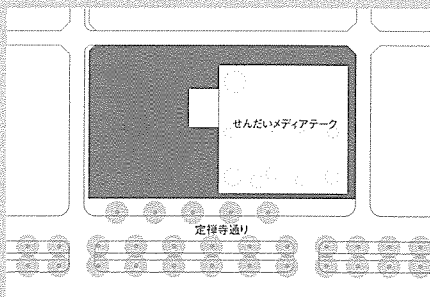
計画の種別: 新築・増築・改修など全て可能

規模: 計画面積=延 7,500m² 程度。ただし特別な理由がある場合は、各自設定による。

用途・構造・法規: 自由

[最終提出物]

1. 模型 (1/100, 全体模型にはめ込むこと、インテリアをつくること、人・家具をつくること)
2. 各階平面図 (1/200, 必要場合はメディアテークの平面図も描くこと) / 断面図 (1/200, 2面以上) / 面積表 / その他の図面 (パースやダイアグラムなど) の追加は各自決定による

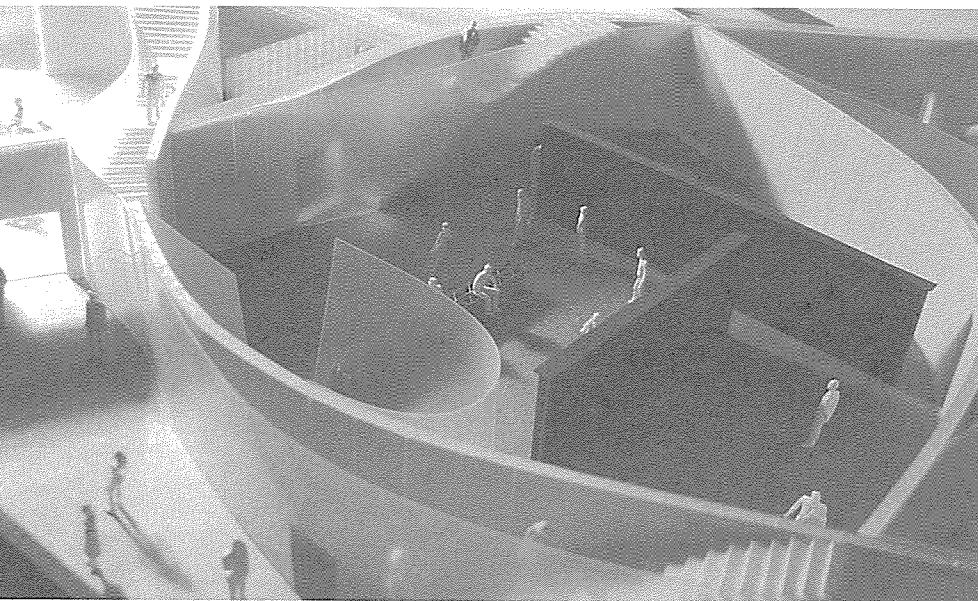


●敷地図



西沢大良
Taira NISHIZAWA

1964年 東京都生まれ
1987年 東京工業大学工学部建築学科卒業
1987年 入江経一建築設計事務所
1993年~ 西沢大良建築設計事務所 主宰
主な作品: 立川のハウス、大田のハウス、諏訪のハウス



●模型写真

せんだいメディアテーク・アネックス

文野義久 Yoshihisa FUMINO

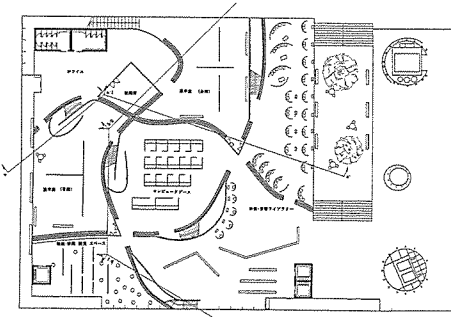
文野——メディアテークの2階と7階がごちゃごちゃしていたので、その部分の機能を何とかしようと思いました。1フロアを7つに分け、壁の仕上げが剥がれた隙間のような部分に階段があり、明るさや外部との関係などの空間の質が階ごとにどんどん変わっていくようにしました。

奥山——すべての部屋が動線空間になっていて、それが立体的に咬み合っている。そうすると使用用途がかなり限定されてしまうのでは。

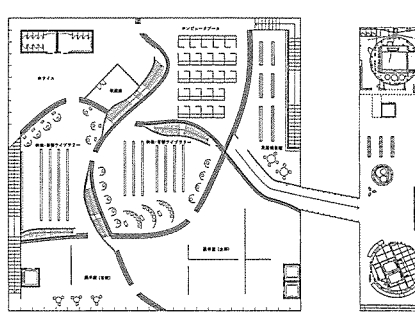
桑原——メディアテークとは違う空間ができていいと思う。ただ、これを成立させるためのシステムがまだまだだ。

塚本——体験的にはすごくイメージできる。次々と壁抜けしていくみたいでおもしろい。

西沢——各階を同じようなプランで解いた場合、各階ごとの違いをプラン以外で出す必要がある。1階は全方向からアクセスできるようにするとか。外装や開口の種類も変わるはずだ。

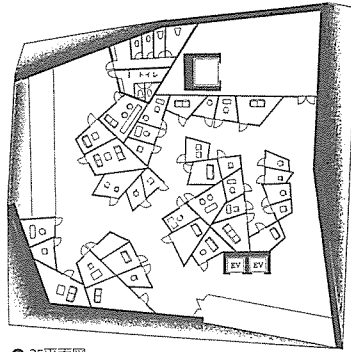
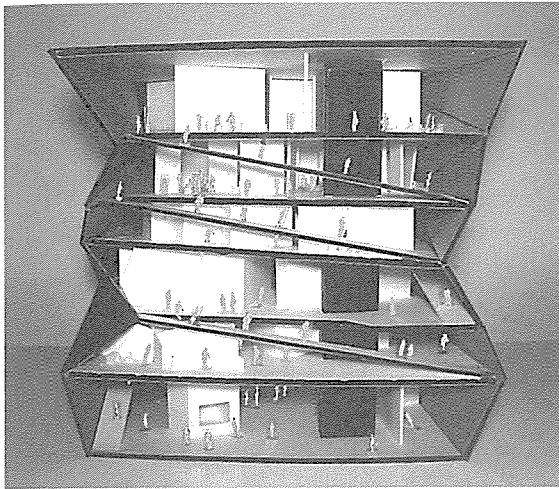


●1F平面図

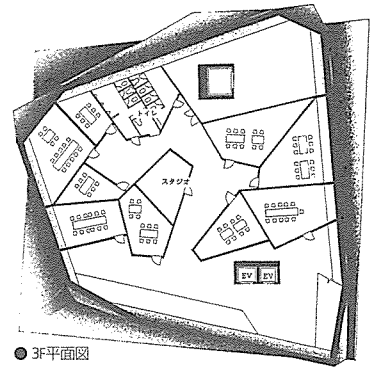


●3F平面図

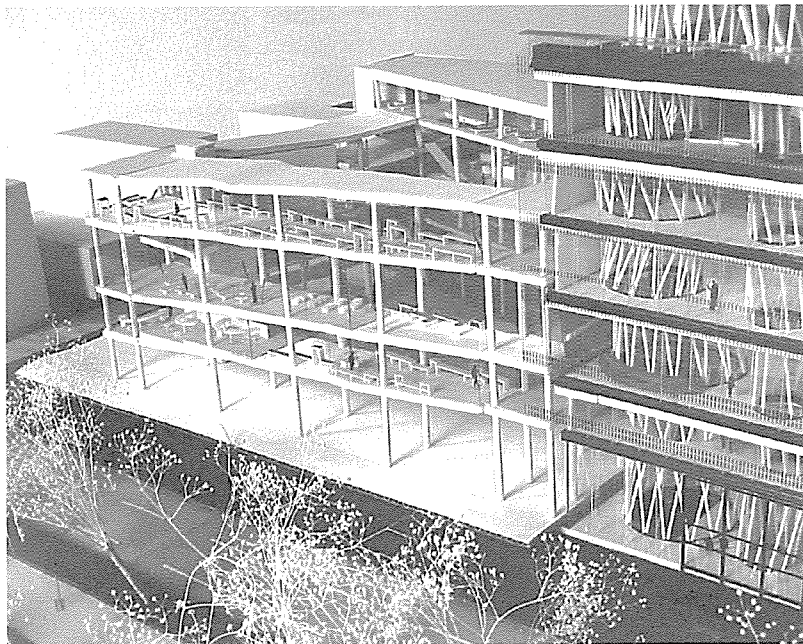
●模型断面



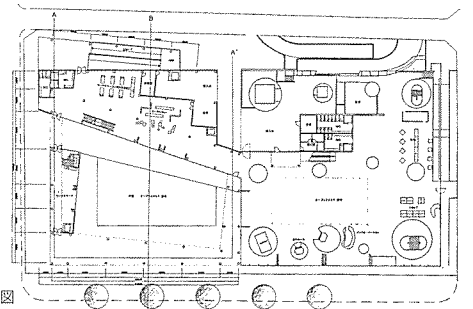
● 2F平面図



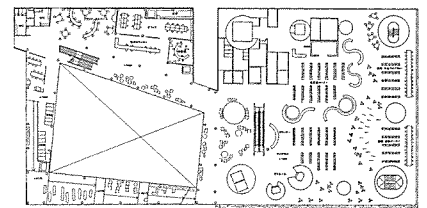
● 3F平面図



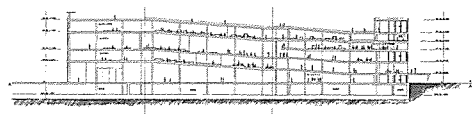
●模型写真



● 1F平面図



● 2F平面図



●断面図

■ [蛇腹箱] 新谷隆志 Takashi SHINTANI

新谷——メディアテークとは外観的にまったく違うものをつくろうと思いました。メディアテークはガラス張りであるべく壁をなくし、周囲に開こうと頑張っているのに対して、アネックスでは壁をたくさん入れ、閉じることで様々な小規模の部屋をつくることを考えました。

奥山——どういうことをイメージしているのか？開いているのに対してただ閉じたと言うのでは説明にならない。閉じるべき部屋はありますが、あなたは閉じなくてもいい部屋まで閉じている。

西沢——もっと閉じた部屋の豊かさ、可能性がいろいろあると思う。このCDを聞くとこの部

屋、この本を読むならこの部屋がベストだとか。そうならば、インテリアも外観ももっとスタディできるようにする。

■ [EAT-THEK] 大森彩子 Ayako OMORI

大森——メディアテークには気持ちのいい屋外空間がないと思ったのと、情報や知識を人と人との媒体（メディア）として機能させようと思いました。中庭に対して螺旋状の空間をつくり、ワークショップやキッチンなどの様々な機能を配していきます。屋上には菜園があります。

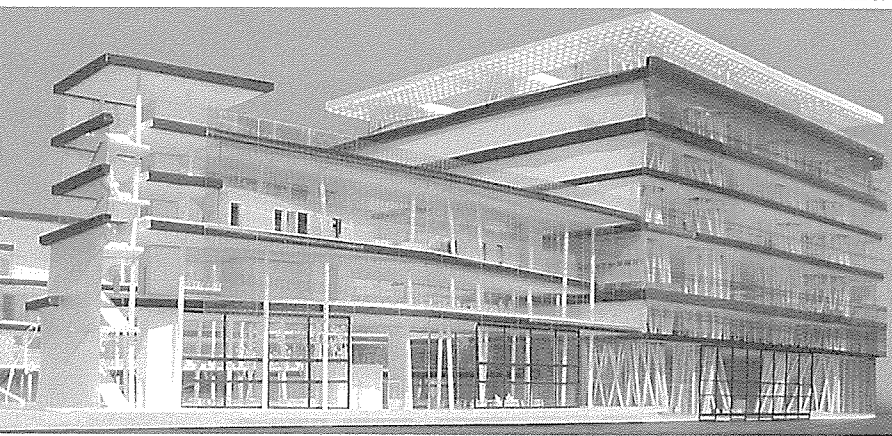
西沢——食に注目したのはおもしろいと思う。でも、三回転させるにはプログラムが貧しい。

アイデアが規模に匹敵していないのでは。

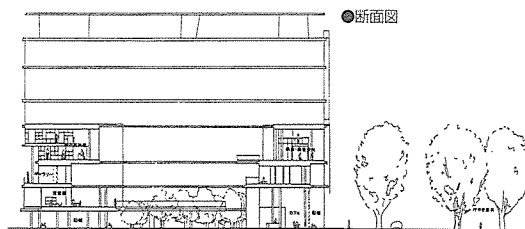
八木——屋外空間について言っていたけれど、中庭とメディアテークとの関係が考えられていない。螺旋状のスロープも、途中で屋外になっていたり、そのままメディアテークの屋上に連続するようなことを考えてもよかったのでは。

桑原——メディアテークの層状の空間に対してスロープみたいな連続した空間で各フロアを繋げたい、と言っている割にはメディアテークとの関係が切れすぎていて、いかにも増築という感じに見えてしまう。

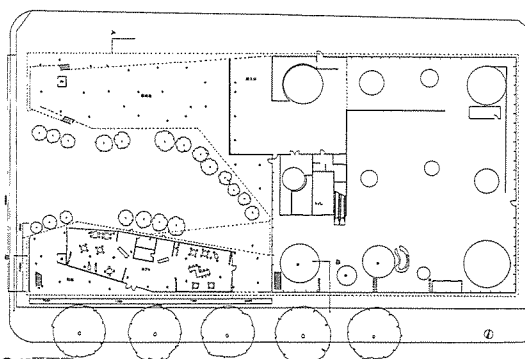
塚本——スペースが細すぎて、やれることが限られてしまう。



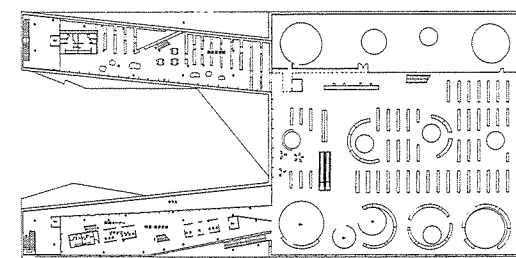
●模型写真



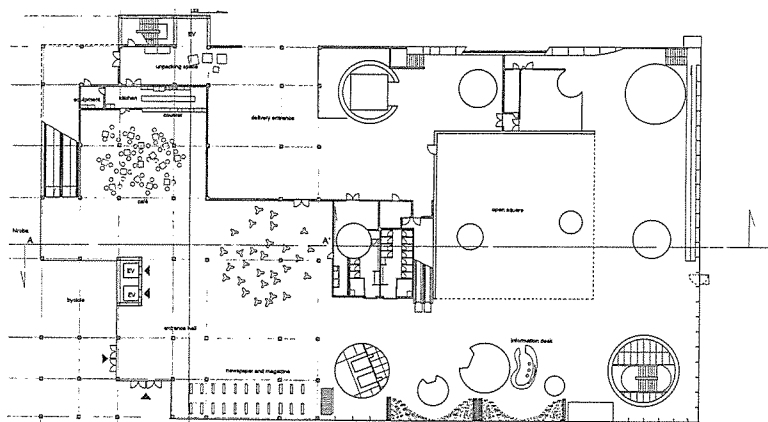
●断面図



●1F平面図

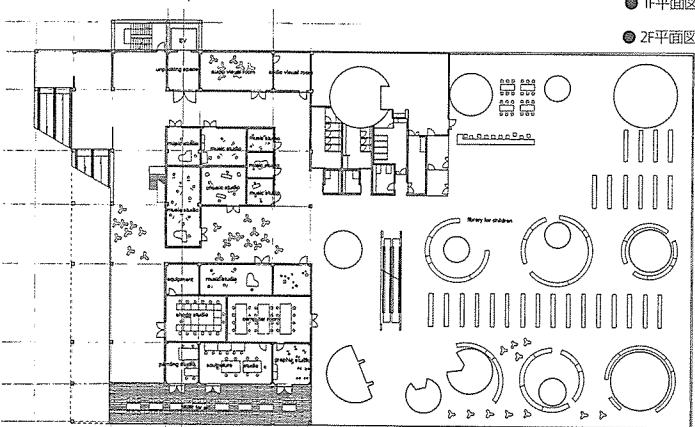


●3F平面図



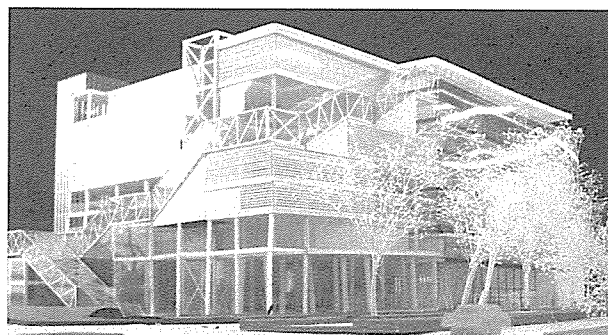
●1F平面図

●2F平面図



せんだいメディアテーク・アネックス 殿井環 Tamaki TONOI

●模型写真



■ [A Linear Process] 立花美緒 Mio TACHIBAYA

立花——外部との関係をコントロールすることで、明るい場所や暗い場所などいろいろなスペースができるようにし、もっと外部を意識できるようなものを考えました。

西沢——なぜ3階までなのか。

立花——それ以上の床面積が不要と思ったのと、高くすることで街との関係が薄くなるのを避けました。

西沢——既存の四角い輪郭にぜんぜん違う突起物みたいなものがついているのはおもしろいし、室内もおもしろくなりそうだが、もっと発展させられたはず。メディアテークの懐の深いワンルームに比べ、このような浅いスペースでは外装や街路樹の影響がますます切実な問題になる。アイデアの可能性はある。

塚本——フィジカルに使われるスペースの質感とプログラムの質がマッチングしていないように思う。もうちょっとやりようがある気がする。

■ [せんだいメディアテーク・アネックス]

殿井環 Tamaki TONOI

殿井——コンペ時の模型のようなメディアテークの開放的なイメージを大切にしようと考えました。現状ではあいまいな空間の中に機能の固定された部屋が不自然に入っているの、それらを新館の方で吸収することを考えました。

安田——奥行き狭い部屋をたくさんつくるためには中庭をとるなどの工夫があるべきです。先にボリュームを決めてから室を配列しているので場当たりのプランになっている。プログラムにあったスパン割りなど、まず全体の骨格

を考えてからプランニングすることが大事。

塚本——これだけ大量の個室をつくるのに、設計している材料は床スラブとエスカレーターだよ。個室が材料になってない。そこが問題。

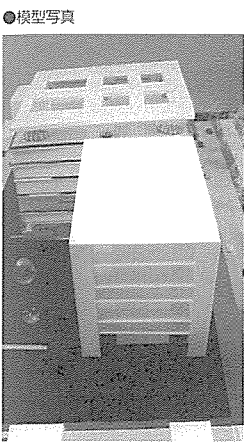
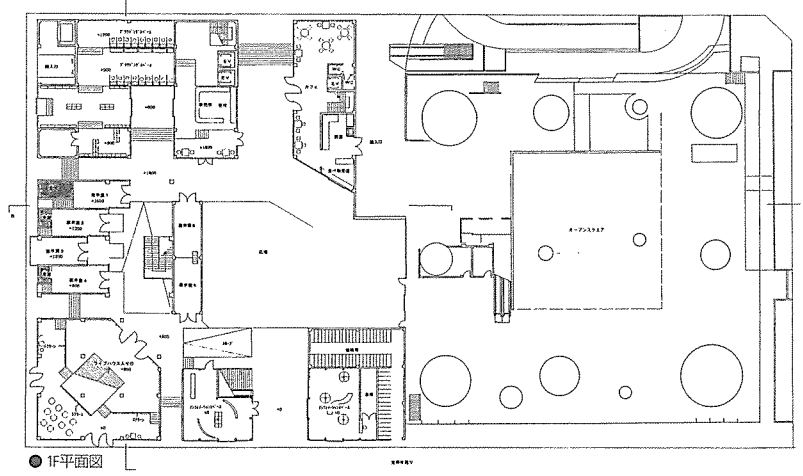
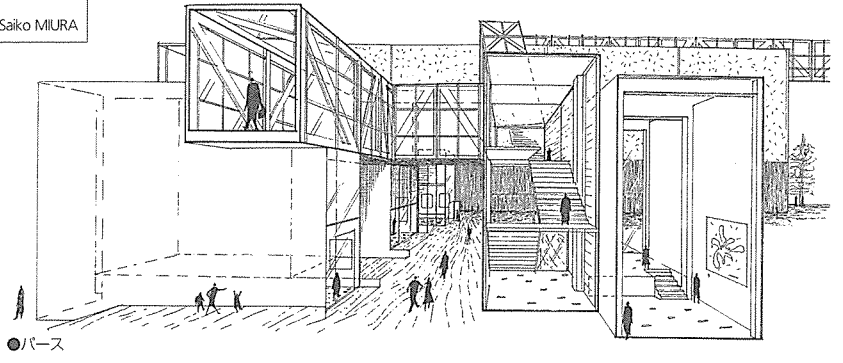
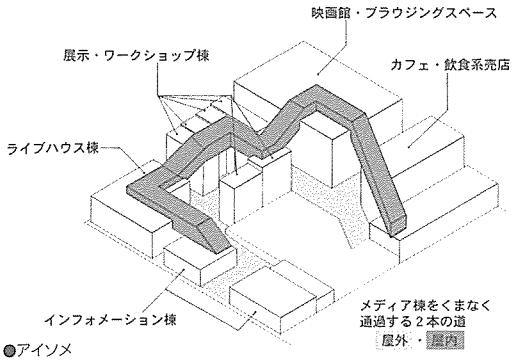
■ [せんだいメディアテーク・アネックス]

三浦彩子 Saiko MIURA

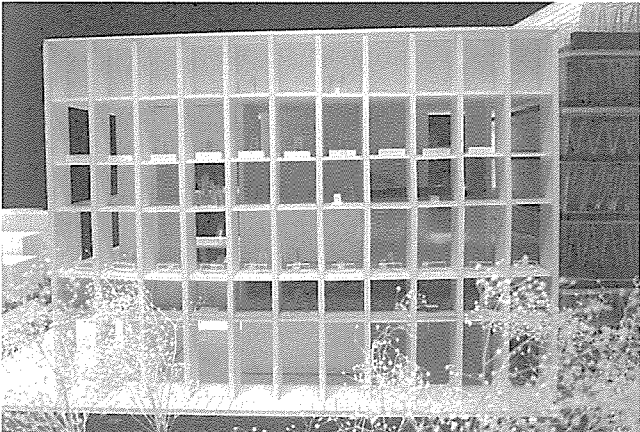
三浦——メディアテークはプログラムが層状に積み重なっていてエレベーターで移動するため、その途中にあるものは体験できません。アネックスでは、そこを通ればメディアテークに入っているものを一度に体験できてしまう道のようなものを考えました。

西沢——最初の方針はいいと思うが、それで出てきたボリュームがこれかなあ、という気がする。入り方とかわかりにくく、プランがちょっとよ

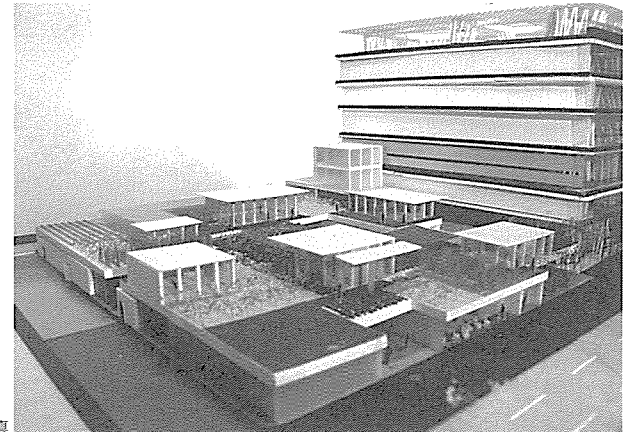
せんだいメディアテーク・アネックス 三浦彩子 Saiko MIURA



mediatheque interval
 須賀貴康 Takayasu SUGA



レギウムヴィヤンド 樟茂育 Shigeyasu KUSU



くないと思う。もうちょっと整理した方がよい。
 塚本——広場をつくっているけど、あまり生きていないよね。広場の隣りにあるものの種類と関係を豊かに。

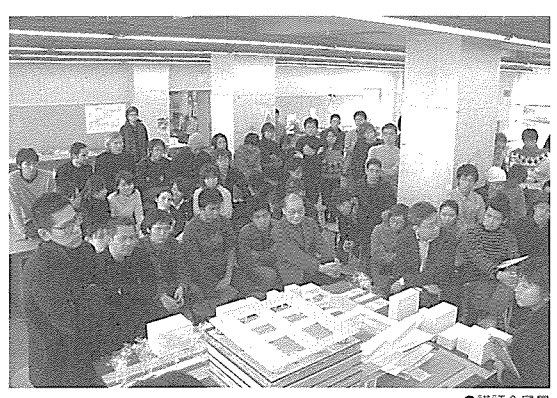
■ [mediatheque interval]

須賀貴康 Takayasu SUGA
 須賀——図書館では本を読むだけでなく勉強をしたりもするので、そのために、グリッドで仕切られた閉じた空間をつくらうと考えました。グリッドはメディアテークに合わせてつくことで階高の違いが生まれ、それを用途に対応させました。
 西沢——裏側にこれだけのオープンスペースをとることについて、何か積極的な理由がほしい。
 安田——北国だから寒い。この配置だとオープ

ンスペースが日陰になってしまう。

■ [レギウムヴィヤンド]

樟茂育 Shigeyasu KUSU
 樟——図書館にはリフレッシュするための空間が併設されるべきだと思い、畑をつくりました。外周には生産された野菜を使ったレストランなどを配置します。
 桑原——今扱っていない生のものを扱う「生もの版のメディアテーク」をやりたいのでしょうか？
 西沢——メディアテークに必要なものを考えた結果が畑だったのか？ どんな課題でも畑がでてきたように見えてしまう。つまり恣意的に見えてしまう。



安田——これが銀座にあればウリになるけど、仙台だと車で10分も走れば畑のある風景になる。わざわざここにつくる必要はないのでは。

建築設計製図第四 / 第2課題

Third-year studio Work: Autumn Semester

SELF LEARNING HOUSE (学びの家)

担当:
押野見邦英 [非常勤講師, k/o design studio]
 Kunihide OSHINOMI (Guest Professor, k/o design studio)

坂本一成 [教授]
塚本由晴 [助教授] **奥山信一** [助教授]
 Kazunari SAKAMOTO (Professor),
 Yoshiharu TSUKAMOTO (Associate Professor), Shinichi
 OKUYAMA (Associate Professor)

中井邦夫 [助手] **足立真** [助手]
久野靖広 [D3,TA] **遠藤康一** [D1,TA]
 Kunio NAKAI (Research Associate), Makoto ADACHI
 (Research Associate), Yasuhiro KUNO (D3, Teaching
 Assistant), Koichi ENDO (D1, Teaching Assistant)

[ゲストクリティーク]
安田幸一 [助教授]
 Koichi YASUDA (Associate Professor)

現代は既存の学校教育の枠組外の様々な教育学習のための施設の重要性が高まっている。例えば幅広い年齢層の知的関心に応えるための生涯教育センターのようなものから、企業内の教育を目的とした研修センター、或いは働く人が自らのキャリアアップを目指してMBA資格を取得するための大学院など様々なものがある。その立地も、コミュニティの中に位置する生涯学習センターから郊外に立地することの多い企業研修所、或いは都心のオフィス街にあることが必須となる経営大学院までさまざまである。一方どのような施設内容であれ、多人数の学習、或いは自習のための空間とはどのようなべきか、宿泊をとまなうものであればそのインテリア、共に学ぶ者の相互コミュニケーションを促すパブリックスペースのあり方等、建築空間の基本的なありかたについて共通して検討されるべきことが多いと思われるので、学びの空間のアーフォーダンスについて考えることとしたい。

Recently the importance of educational facilities quite different from the traditional school building is increasing apace. In this situation, in order to design an educational facility that reflects social needs, students had to determine site, size of facility, and program by themselves.

[進行方法]

1. プログラムフェーズ
 : どのような社会のニーズに応える学習施設を計画するのか考えて、具体化するための施設規模や内容をプログラム化し、クライテリアを設定する。
2. ダイアグラムフェーズ
 : プログラムやクライテリアを満たすための敷地を選定して、ダイアグラムをマスマodel等で表現する。
3. デザインフェーズ
 : ダイアグラムに基づきデザイン作業をおこない計画にまとめる。

[提出物]

周辺を含む配置図 1/500、平・立・断面図 1/200、インテリアのデザインを表現するパース、3D、模型、外観を表現する模型或いは3D等

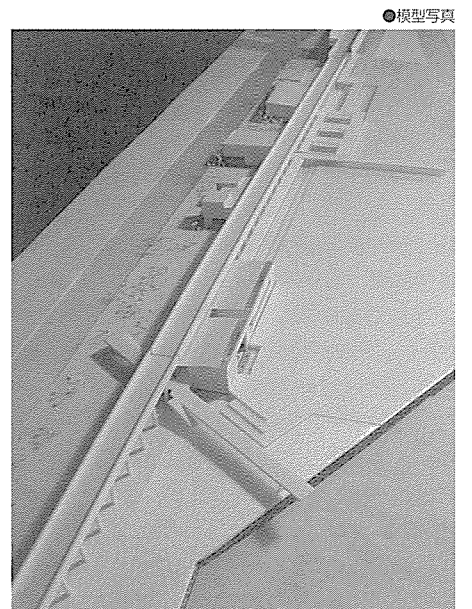
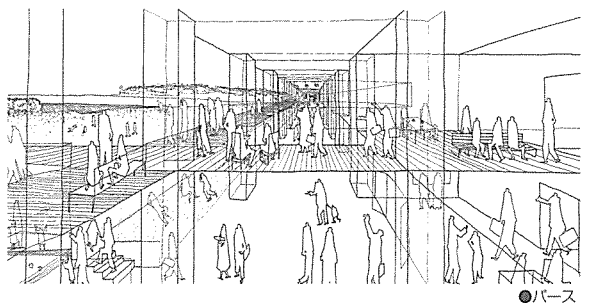
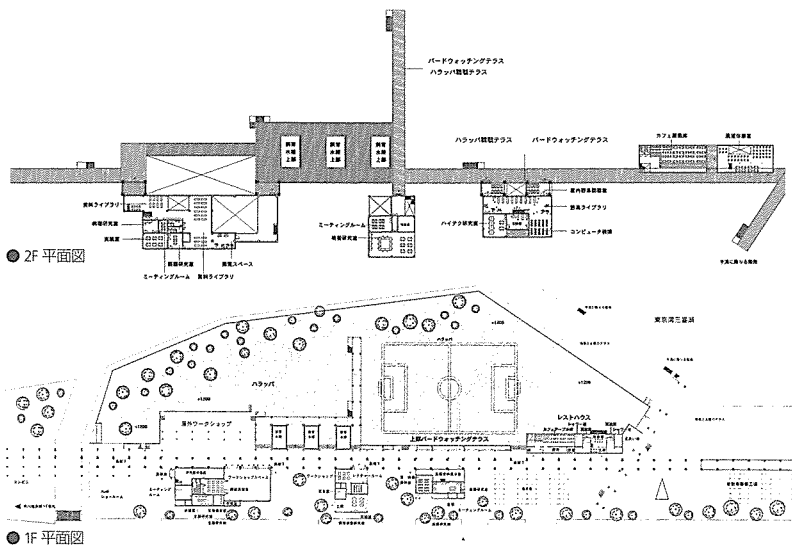


押野見邦英

Kunihide OSHINOMI
 1941年 東京都生まれ
 1965年 横浜国立大学工学部建築学科卒業
 1966年 鹿島建設設計本部
 2001年 KAJIMA DESIGN 退職
 現在 k/o design studio 主宰
 主な作品: 東京海上東日本研修センター、木とカーテンウォールの家、ECOLE DE HAYAMA

以下は2003年1月31日に行われた講評会の模様を、学生編集委員の玉井洋一 (M2) がレポートしたものであり、文責は編集部にあります (敬称略)。

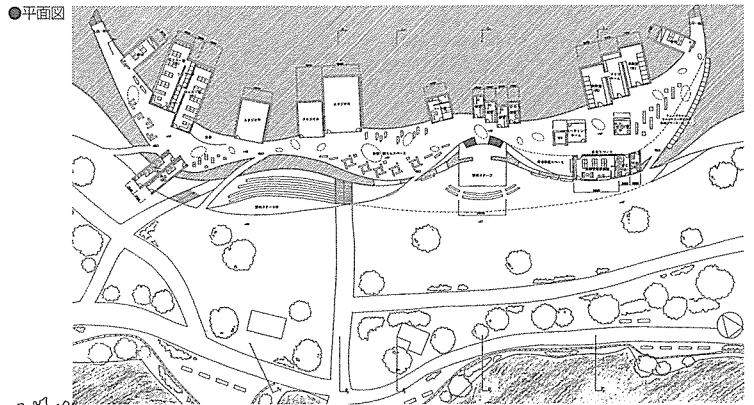
self learning house 殿井環 Tamaki TONOI



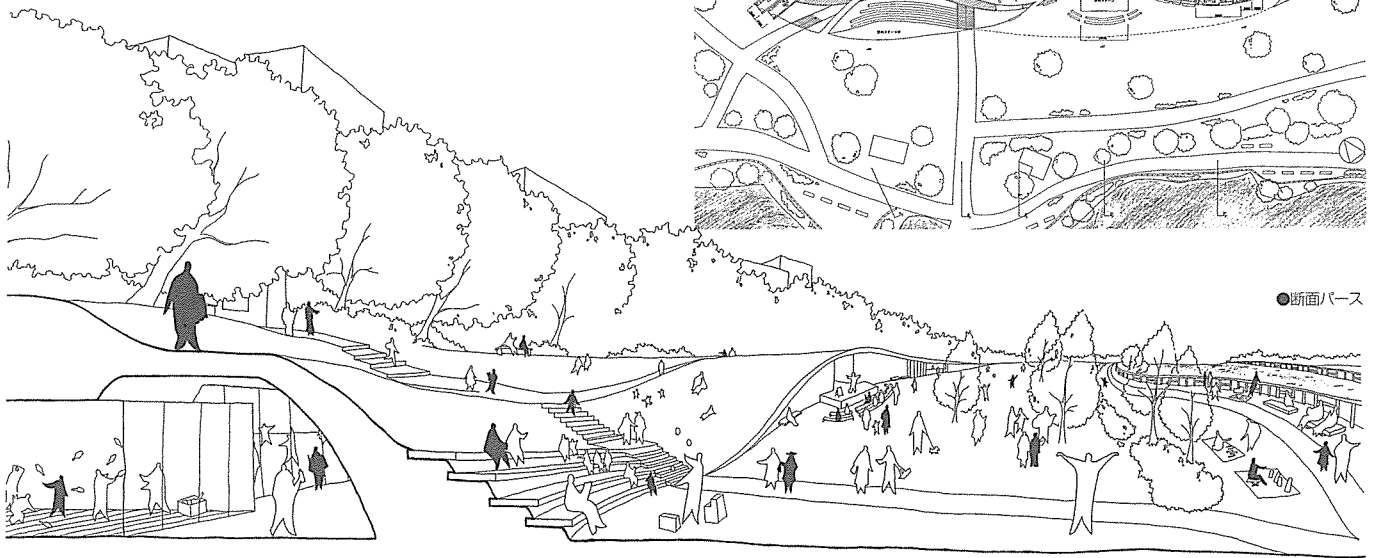
■ [self learning house] 殿井環 Tamaki TONOI
 殿井——東京湾にある干潟 (三番瀬) に、干潟を研究・保護する施設と、それをベースに生態系などについて学ぶ施設を提案しました。また周辺のベッドタウンのレクリエーション施設にもなるように考えました。
 押野見——土木構築物である鉄道高架をどう建築の空間として読み替えていくかということに対して説得力がある。建物がパラパラとあるように見えるけど、それらをネットワークとして見

せる表現が必要だ。
 奥山——分散したポリウムをデッキでうまくつなげて、全体的にまとまった計画だと思います。
 押野見——建物の作り方として、規則性を持った橋脚に対してもっと違ったものとして建物を扱った方が効果的だと思う。
 塚本——建築的にもっと大きな差をつくと良かった。鉄道高架は圧倒的な存在感をもっているんだから、それと一緒にあるべき建物の存在をもっともっとスタディするべきだった。

the preceding grotto 内部美鈴 Mirei UCHIBE



●平面図

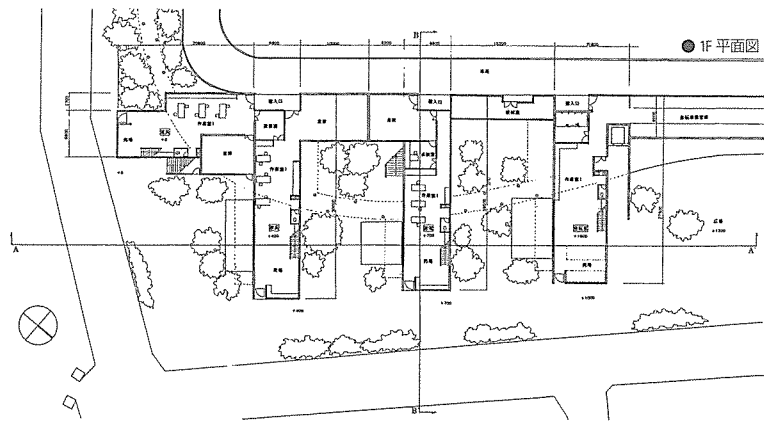


●断面パース

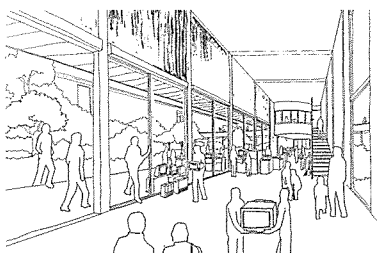
TROUBLE・ENCLOSURE 大森彩子 Ayako OMORI



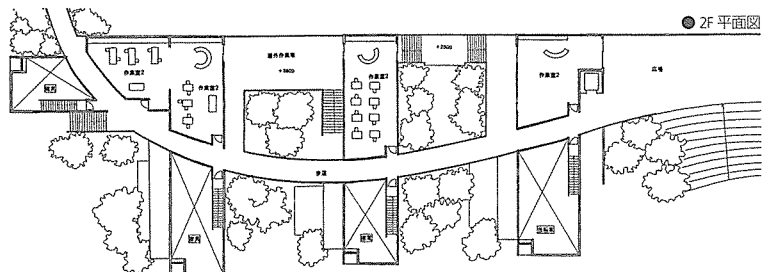
●模型写真



●1F 平面図



●内観パース



●2F 平面図

■ [the preceding grotto]

内部美鈴 Mirei UCHIBE

内部——井の頭公園に自分の腕を試すためにアーティストや芸人が集う場所を提案しました。そこは発表と学びが繰り返されるような場所です。また公園のレクリエーションをまとめる場所でもあり、公園を楽しんでいくようなものを提案しています。公園の地形と人の流れを意識しながら考えました。

押野見——従来の定型化した公園施設に対する批評があってすごいと思う。井の頭公園の静かな佇まいに対して大きな仕掛けを持ち込んでいるところはどうかと思うが、提案としておもしろい。全部がランドスケープ化されているが、

建物的な要素があるともっと空間に変化ができたのではないかと。

塚本——建物を土の中につくるのは設定にふさわしい。でも閉じた地下通路のような空間ではなく、もっと公園に対して開いて関係をもっていた方が良かったのではないかと。

■ [TROUBLE・ENCLOSURE]

大森彩子 Ayako OMORI

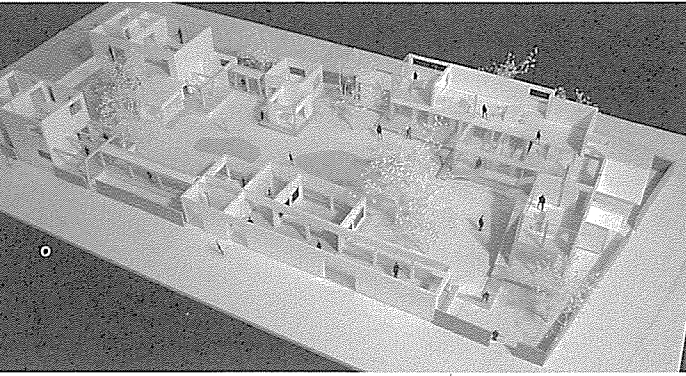
大森——迷惑施設である清掃工場の周辺を取り囲むようにして施設を配置し、住宅地に向かって建物を開くことを考えました。施設内容は清掃工場に持ち込まれたゴミの中で家具や家電、自転車などまだ使えるものを、地域住民が修理す

ることから何かを学んでいくようなものを提案しています。建物にあるデッキで修理したものを販売することもあります。清掃車の動線を考え、搬入・修理・販売という流れがうまくいくように考えています。

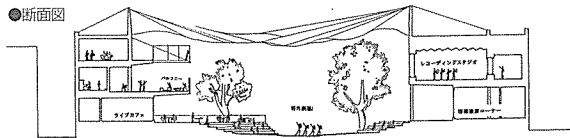
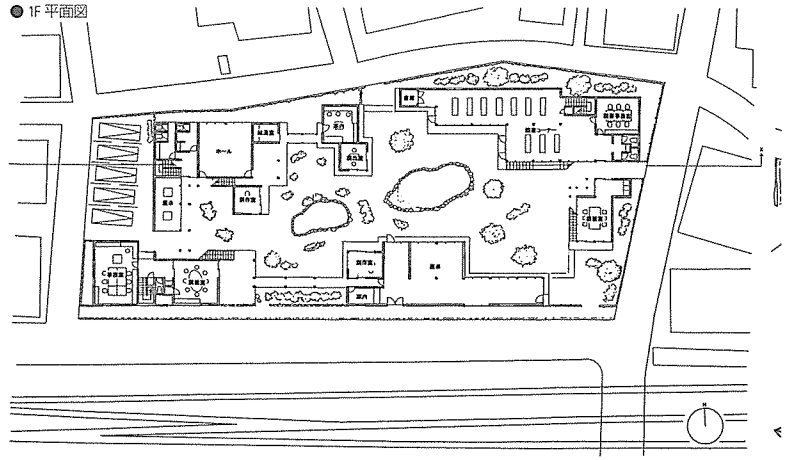
押野見——巨大施設の周辺に対する提案と今回の課題である学ぶということがうまく結びついて、とてもユニークだ。建物を一周するいろんなものや出来事が見えてくる道具立てになっている。

塚本——このような施設を実現させるには倉庫みたいな空間になるのではないかと。建物も一本調子じゃなくて大きな場所がパーンとあってもいいと思う。どこもかしこも細すぎる。

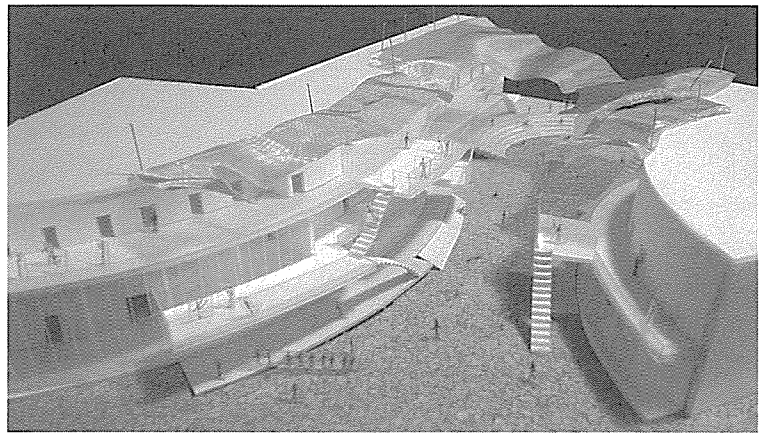
ブンガクユカリコネクター 松林道雄 Michio MATSUBAYASHI



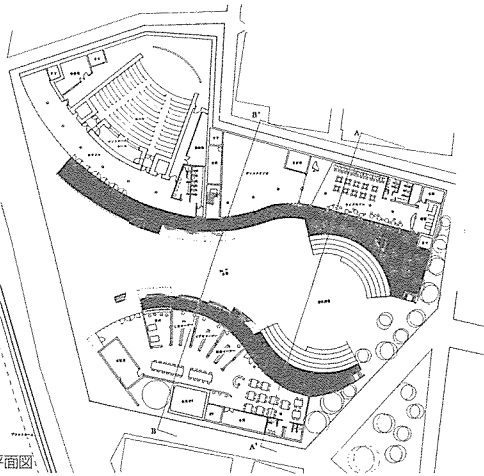
●模型写真



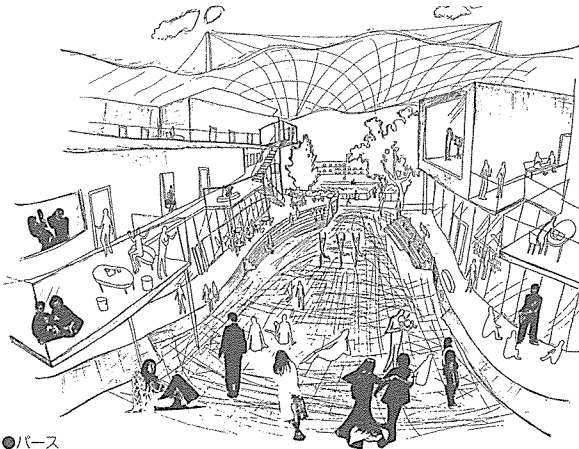
●模型写真



STUDIO D M 新保佳恵 Yoshie SHINBO



●1F 平面図



●パース

■ [ブンガクユカリコネクター]

松林道雄 Michio MATSUBAYASHI

松林——西武新宿線の中井駅から林芙美子記念館に行く途中に、文学に関する学びの家をつくりました。学びの場所は中庭を囲むように点在させ、縁側によってそれらをめぐるようになっています。また、この地域に多く見られる文学のゆかりの地を繋げるものとしても建物を位置づけています。

奥山——ひとつひとつの部屋が狭い。学びの場所としてどのように使えるのだろうか。

押野見——外と内の中間の縁のところ人が三々五々集まってきて佇んでいるイメージなん

だね。

安田——中庭がフラットですが、起伏をつけるとかもっと庭自身の見え方のデザインを工夫する必要がありますね。

塚本——建物でやることと建物の質のマッチングを考えているところがいいと思う。でも、どれも小さな部屋すぎないか。

■ [STUDIO D M] 新保佳恵 Yoshie SHINBO

新保——町田駅と川に挟まれた敷地にダンスと音楽を学ぶ施設を提案しました。駅からの視線と川から駅へ向かう動線を考えています。建物に挟まれた広場がメインの空間ですすべてのスタ

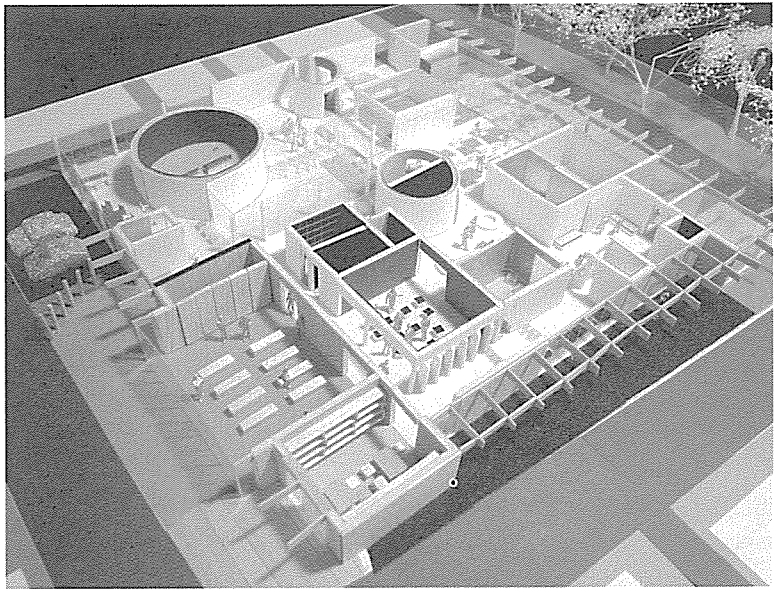
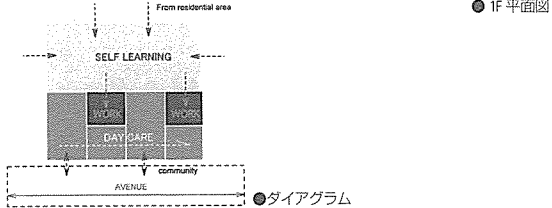
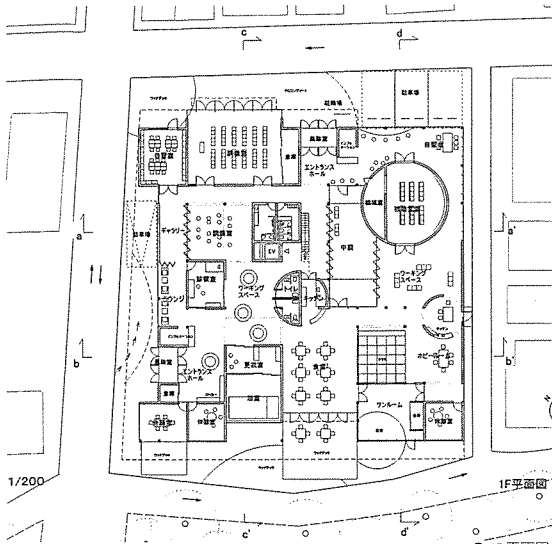
ジオにアプローチできるようにしています。またスロープ状の場所に人が座ってパフォーマンスを見れるようにしています。

押野見——いろいろなアクティビティが見えるという意図は良くわかる。ただ、建築としての提案をもっとしてほしい。2つのヴォリュームをずらしてできる空間の躍動感は成功している。

奥山——ホールがオーソドックスです。この施設に合ったホールの形式を考えた方が良かったと思う。

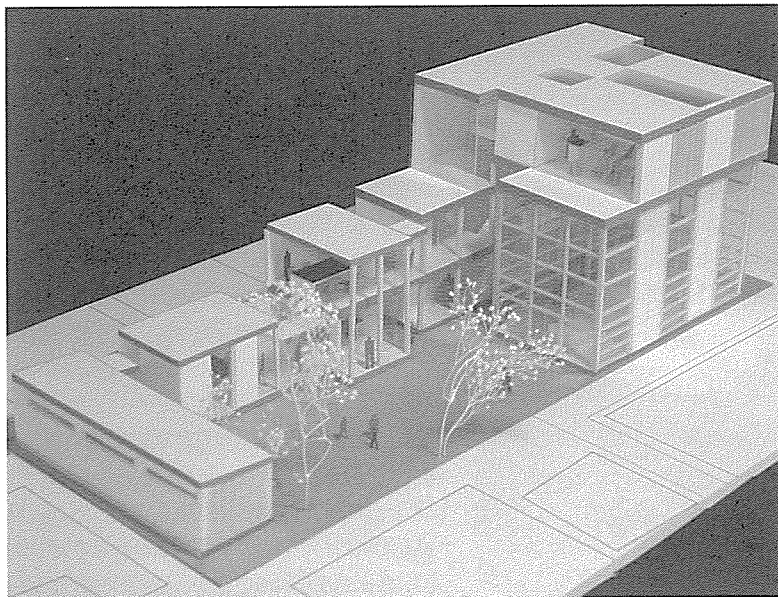
塚本——ひとつのアイデアを積み上げた成果が出ている。パースも泥臭い感じはするけど気持ちは良くわかる。

DAY CARE + SELF LEARNING 梶村建 Ken KAJIMURA



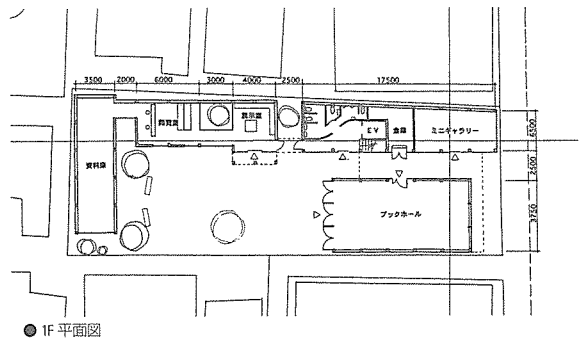
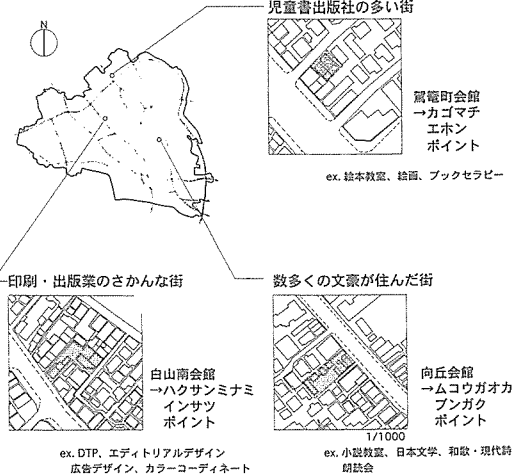
●模型写真

ブンキョウ カルチャー ポイント×3 鈴木彩子 Ayako SUZUKI



●模型写真

●全体計画



●1F平面図

■ [DAY CARE + SELF LEARNING]

梶村建 Ken KAJIMURA

梶村——緑道沿いにデイケアセンターと地域住民が介護や福祉の学習をする施設を考えました。建物は平屋で、デイケアセンターのプログラムを緑道の流れに合わせて配置しています。反対側にセルフラーニングのスペースがあり、デイケアセンターの部屋の間のスペースが実習によって学ぶ場所になっています。

押野見——プランがわかりにくい。このような形が好きなんだろうなと思うけれど、もう少し何かあっていいと思いませんか？ 綺麗だけど施設内容の革新性が無い。コンセプトを深め

る必要がある。

塚本——構成法が先行して、その空間的な意味が十分に検討されていないと思う。結局、部屋が廊下で繋がっているようにしか見えず、2つの大きな目的があるように見えない。壁のシステムの提案が中途半端だ。

■ [ブンキョウ カルチャー ポイント×3]

鈴木彩子 Ayako SUZUKI

鈴木——文京区内の区民会館は主に集会場として利用されていますが、建物は施設的に足りないものが多いので、地域の特性を生かしたプログラムを入れた小さなカルチャーの拠点を提案

しています。区民会館を三つ選んでそれぞれ印刷、絵本・絵画、文学を学ぶ施設とし、それらをネットワークとして繋がるように考えています。

塚本——一階のプランは建物が道までを含んだまとまりをつくり出していいと思う。町の人にとってキャラクターのある建物になっている。もっと提案内容を絞っても良かった。

押野見——よく考えられてはいるけど、細かいことを考えすぎている。全体を俯瞰的に見てダイアグラムをつかんだ方がいい。そしてそれをどう建築化するかを考えることが必要だ。

ワールド・アーキテクチャー・ワークショップ [WTC/911]

World Architecture Workshop: [WTC/911]

山崎範子 [修士二年] Noriko YAMAZAKI (M2)

工藤国雄 Kunio KUDO

1963年東京工業大学建築学科卒。名古屋工大教授を経て現在コロンビア大学准教授。



Designated as a "world architecture workshop", WTC/911 was held December 5- 10, 2002. The Japanese architect Kunio KUDO, adjunct professor of GSAP at Columbia University of New York, originated the joint workshop with students of Tokyo Institute of Technology.

The destruction of the twin towers of the World Trade Center, on September 11, 2001, killed nearly 3,000 people. The event was not only an enormous tragedy but also represents a greatly highlighted awareness of a new world situation, namely the presence of a cell-based terrorist movement of Middle Eastern inspiration seeking to destabilize American capitalism. The Tokyo workshop project sought ideas for creation of a new residential space in response to the psychological trauma provoked by the WTC disaster.

Work by participants from all over the world, including students from Japan, as well as from Vietnam, Romania, and Taiwan, made it clear that the perception of an identical incident is far from universal. Rather, it is individualized in a way that may, among other factors, reflect each country's political situation vis-à-vis the world at large.

2002年12月5日～10日、工藤国雄コロンビア大学准教授と安田助教授の指導のもと、短期ワークショップが行われた。参加学生は本学修士課程一年に在籍する合計10名。課題は911ニューヨークWTC事件を経験し、自分の中で起こった心理的な構造変化を空間として形成し、住宅という形で再現することであった。

工藤国雄氏にとってのWTC事件

氏は、第二次世界大戦の経験者であり、ニューヨーク在住歴も長い。WTCビルの崩壊は、一挙に数千から数万という人間が死を覚悟することできないほどの一瞬に蒸発していった惨劇であり、それは広島への原爆投下を想起させた。一方で、当事件は崩壊したビルの認識していなかった価値を表出させることにもなった。マンハッタン先端の金融街にあったその姿は氏の日常風景として本人が自覚することなく心に深く刻み込まれていたものであり、それが跡形もなく崩壊去ったとき、そのビルが氏の中でのニューヨークを支えていたこと、その価値はエンパイアステートビルが何本あったとしても到底追いつけるものではなかったことに気付かされた。

課題スケジュール

一日目：課題説明。崩壊当時に受けた衝撃を単語で羅列。

二日目：模型によるエスキス。単語という最も原子の状態での感情表現を空間作りへつなげる。

三日目：最終プレゼンテーション。ゲストクリ

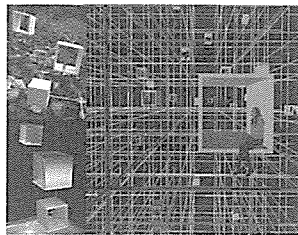
ティークは立教大学法学部宇野邦一教授、本学の坂本教授、八木教授、奥山教授、藤井晴行助教授。

それぞれのプロジェクト

○ステファナ・アンドレイ (ルーマニア)

Stefana M. ANDREI, Romania

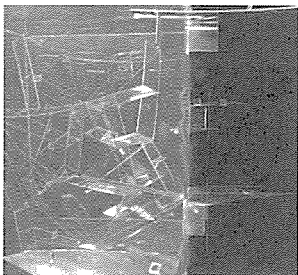
自国の政治的状況を背景に、WTC事件は悲劇のスケールは異なるにしても、個人レベルで



は同じ次元の出来事であるという捉え方をしてきた。それは数々の小さな箱が三次元空間に点在し、それぞれの箱の中に存在する個人が自分の世界を保ちながら他の箱（他の人の状況）を傍観する関係性を表現した作品であった。

○加藤悟郎 (日本) Goro KATO, Japan

透明なキューブ、内部のもろい素材を用いた多次元的でアсимトリーな面、外側の剛な素材を用いた水平



面により、事件以後に見えてきた日常の不安定さと非日常において感じうる安定さを表現した。

○ミン・シェン・ワン (台湾)

Ming Hsien WANG, Taiwan

台湾は経済的な安定に反し、政治的には中国とは緊迫した関係、また文化的には自国の文化として確立したものがないという曖昧な状況にある。基本的な立方体の中に世界の主勢力の衝突によって作り出されるボイド、それらに断面を貫くことでどの勢力にも触れ合うことのない世界の中ではエッジな存在としての台湾を表現した。



○クオク・フン・グエン (ベトナム)

Quoc Hung NGUYEN, Vietnam

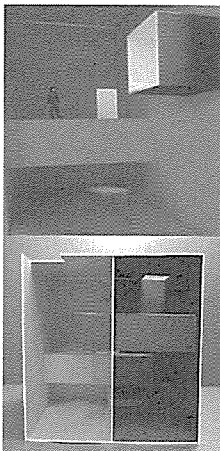
WTC事件により、立方体の中の赤と黒のふたつの世界の境界面に穴が開き、その世界が相互に入りこみ合ったことが表現された。それは世界状況が善と悪というふたつのみで存在するという最も単純な形であり、ベトナムが過去の複雑

な政治環境から脱して、近代化への道を歩む中で捉えている世界観を示す作品であった。

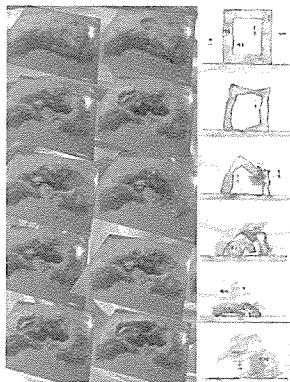
○山崎範子 (日本)

Noriko YAMAZAKI, Japan

自分の周辺の世界は確実なものであるという認識がある。綿アメと様々な色を層状に重ね合わせ、それらが外界からの衝撃やその



環境（この場合は水）に傷つくことによって本来真っ白の壁であったものが溶けだし、内部の色と混ざり合っていく様子を用いて、確実な認識が曖昧



に溶けてしまったり、また確実に戻ったりするという心の動きを表現した。

多様な世界観

911ニューヨークWTC事件は、テロ組織が世界有数の金融ビルをたった2機の飛行機によって崩壊させたという衝撃的な事件ただけではなく、アメリカ合衆国を代表とする資本主義世界対イスラム世界という新たな世界構図を明らかにすることにもなった。しかしこのワークショップの目的は新たな世界構造の認識という社会現象を表現することではなかった。それは、WTCビルという確固たる日常の風景があたかも音もなく沈んでいき、非日常という断面が垣間見えた瞬間に起こった自分の中での世界観を明らかにしていく主観的な作業であったといえる。様々な国の出身者、経験者が数多く参加した今回のワークショップでは、その空間にまで落としこんだ捉え方が個人、そして国によってまた多様であったことが明らかになったといえるのではないだろうか。



●最終プレゼンテーション風景

パリ・ラ・ヴィレット校に留学して

My experience at Ecole d'architecture de Paris La Villette

市川 知 [修士二年] Satoru ICHIKAWA(M2)

I recently spent one year at the Ecole d'Architecture de Paris, La Villette, studying the architecture and urbanism of France. Characteristics of this institution are its "freedom, emphasis on art, and internationalism". I enjoyed the year, especially the classes given by professors F. Meadows, Y. Nussaume, and G. His.

I am particularly interested in housing and residential areas. The above classes undertook to study residential districts in various suburbs of Paris.

The most interesting design assignment was a project for a small hut. For a month we students worked on designing a 9 m² hut, and we constructed a 1:1 scale model work right in the garden of the college at La Villette. The project concept was "making a connection between a hut and its physical environment." We made our hut like a gift package with a big cloth (4 x 7 m) and a rope. The floor was of corrugated carton (2 x 2 m), and the hut contained a tree.

We were also able to take part in an exhibition at IFA (Institut Francais d'Architecture) during my stay.

I enjoyed getting to know French architectural culture. It seems to me that the greatest difference between French architecture and Japanese is its expressive power in a physical sense. I have learned that such expression offers one of the greatest of all possibilities for excitement in architecture.

[Ecole d'architecture de Paris La Villette]

2001年10月から1年間、フランス国立建築学校パリ・ラ・ヴィレット校に留学し、フランスの都市計画と建築に関して学びました。この学校は日ボザールの建築科を前身とした国立建築専門高等教育機関、エコール・ダルシテクチュール(建築学校)のひとつです。パリには6校あり各校で特色は異なり、ラ・ヴィレット校は自由で芸術志向が強く革新的な教育方針で、外国人に門徒を開いたインターナショナルな学校です。フランス人のみならずドイツ、イタリア、スペインといったヨーロッパ勢から台湾、韓国などのアジア勢まで、また他の大学を卒業して学び直している人など国籍も年齢も様々な学生が学んでいます。フランス語が中心ですが時には英語で、またスケッチといった共有言語を通して議論を展開し、アイデアを深めていく日々は、非常にエキサイティングでした。この学校ではさまざまな教官の指導を受けることができ、中でも特に、F.Meadows、Y.Nussaume、G.Hisの3人の建築家率いるクラスが大変ユニークで、最も刺激的なものでした。



●授業中風景

[住宅地 la maison-de l'objet manifeste au lotissement]

F.Meadowsのクラスは私が特別関心をもつ住宅

地がテーマであり、フランスのニュータウン、ヴィル・ヌーベル (Ville Nouvelle) を対象にプロジェクトを展開していくものでした。フランスでは現在、都市住民の生活の選択の自由を保障することを目的に、パリ一極集中型を抑制しつつ、その発展を吸収する多極化の整備計画が行われており、パリ近郊に職住近接型の自立した都市が5つ計画されています。また『郊外』を都市計画としてどのように捉えるのかという問題は、フランスに限らない関心事のようで、このクラスには様々な国籍の学生が集まってきました。前期は「身体と建築」、「敷地と建築」、「住人と建築」というテーマのエクササイズを行い、都市や建築の全体を成立させている部分の条件をトピックに建築の概念を構想することが求められました。後期はヴィル・ヌーベルの1都市であるマルヌ・ラ・バシを対象に、住宅地から住宅そのものまでを計画する内容で、前期の課題を拡張して部分と全体の関係を重点的に構想し、学生の提案を通して都市の可能性を探求しながら議論が展開されました。

[小屋 la maison comme abri]

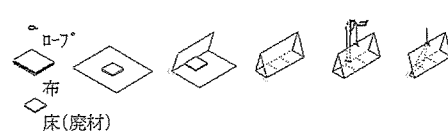
そのうち印象的なもののひとつが、「身体と建築」に関するエクササイズでした。この課題は最大9m²の小屋を、1/1でプレゼンテーションするものです。自ら制作することでスケール感や素材、構造など建物の成立する背景について実感しながら理解を深めることが目的でした。身体的感覚を出発点とし、技術的、論理的に筋が通って



●樹木を含めた小屋全景



●宙吊りの状態で子供5人は乗ることが可能



●組み立てプロセス

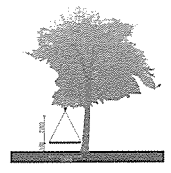
ても身体に訴えかけるものがないと評価されず、改めて身体感覚の重要性を意識した瞬間でした。ごみ処理場にある廃材から発想するもの、一筆書きを空間化したコンセプチュアルなもの、ちょうちんをモチーフにしたもの、身近なスーパーの袋を糸と見立て、編んで面を作成するものなど多様なアイデアを利用しながら快適な空間にまで練り上げていました。

[展覧会 CABANES Construis ton aventure!]

我々のコンセプトは「環境と混生した小屋」。2m x 2m サイズで、小さなテント状の形をし、一枚の大きな布で床(廃材により作成)を包み込み、ロープで吊るすもので簡単に組み立てられます。ここでは外装材である布が、自然の樹木を利用することで構造としても機能し、内部空間が成立します。さらに床全体を宙吊りにすることで、遊具的な使い方も可能になります。市販のテントのように仮設的でコンパクトである利点をもつつ、環境を積極的に利用して部材を減らし、小屋のみで完結することを避けた反カプセルです。さらに身体との関わり方として市販のテント以上の多様な使い方の可能性を目指し、高い評価を得ました。我々の案を含む数点は、フランス建築家協会(IFA)主催の展覧会で、ギャラリーの中庭に一ヶ月間展示する機会が与えられました。実際に子供たちが利用し、その様子が地元テレビのニュースとして取り上げられるなど、生の声に直接触れ、身体的な実感から建築をつくる確かな手ごたえを感じることができました。

[身体的感覚の強度 le sens des realites]

フランスで感じたことは、建築でも都市計画でも身体的感覚をとて大切にしていることです。フランス語のユルバニスム (Urbanisme) は直訳すれば「都市計画」ですが、これはあらゆる人々の生活環境に関わるすべての整備や計画を含む広い概念であり、個々の生活をスタンディングポイントとしていることが大きな特徴だと思えます。日本の都市では近頃都心回帰といった一極集中型構想が主流ですが、高層建築による計画だけを都市の発展型モデルとするのは、人々の生活を前提とせず、計画ありきの単調な都市空間のような気がしてなりません。身体的感覚から都市を再評価し、生活の選択の自由を生み出す多様な状態の中に、今後の都市の発展を受け止める大きな可能性があるように感じています。



●断面図

コンペ入賞作品

ここでは、設計競技の応募案など、設計製図の授業以外で制作された学生の作品を紹介しております。なお、投稿者の所属はコンペ入賞時のものであり、解説は投稿者自身によるものです。

■第 37 回セントラル硝子国際建築設計競技「畑のレストラン」

優秀賞 足立拓[修士2年] Taku ADACHI (M2)

畑の「交差点に建つ」レストラン。

人々と食材（野菜）が出会う都市的な空間。

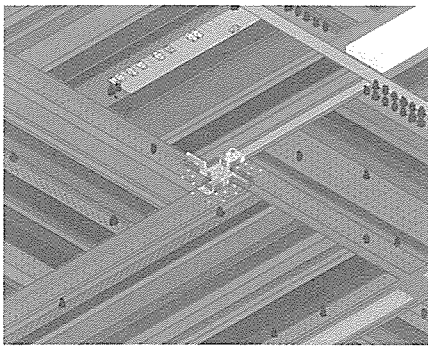
畑の「交差点としての」レストラン。

等価な広がりをもつ田園風景を分節する建築。

広大な空気を分節し、場所を作るきっかけを与えるだろう。

一般的な田園風景がもっているストライプという強い形式の中で、強い形態をもちながらも、田園風景をやわらかく分節する。

畑のレストランは「田園風景における交差点」のような建築なのだ。



■岡山県建築士会平成 13 年度設計競技

優秀賞 「-shizutani- 再思考」

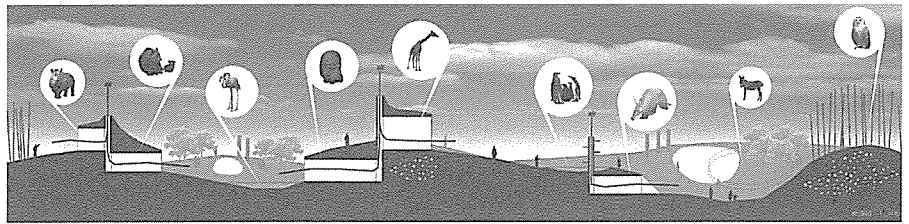
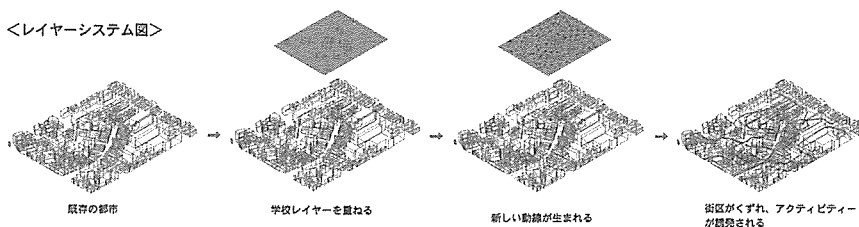
澤田 正樹[修士2年]+鈴木 勝之[修士2年]+

遠山 直子[修士2年]+服部 直記[修士2年]

Masaki SAWADA (M2)+ Katuyuki SUZUKI (M2)+Naoko TOHYAMA (M2)+ Naoki HATTORI (M2)

閑谷学校は江戸時代に築かれた日本最古の庶民学校で、学びたい人が自由に学べる学校であった。このコンペでは閑谷学校創学の精神を引き継ぎ、これからの学校のあり方を考えることであった。この精神を踏まえ、中心市街地が衰退した街の空き店舗にニーズの合った学校を設置する。既存の街区に依存しない新たな学校のレイヤーを重ね合わせることで、従来とは異なる動線やアクティビティが発生する。そこで派生した人の交流が衰退した市街地を再生するきっかけになるものとする。

<レイヤーシステム図>



■第 16 回建築環境デザインコンペティション「環境ミュージアム」

佳作 「lifescape」

玉井洋一[修士1年]+野地智美[修士1年]

Yoichi TAMAI (M1) + Tomomi NOJI (M1)

動物園は生物や環境の大切さを私たちに教えてくれる施設であると信じられており、現にそういう役割をもっている。しかし動物園というビルディングタイプは近代動物園がもっている動物のコレクションを鑑賞するという形式や、人間が動物よりも上位の生物であるという概念から導き出される建築の空間構成を未だに維持している。動物の生態系は私たちに有意義な知見を与えてくれる学校である。上野動物園の施設の老朽化にもなるリノベーションと新しい動物園という施設のあり方を通して「環境ミュージアム」を考えている。

■第 6 回 TEPCO 快適住宅コンテスト「人にも環境にも優しい快適住宅」

提案部門 「PEFC HOUSE」 佳作

遠山直子[修士2年]+澤田正樹[修士2年]+川西

文乃[修士2年]+Sangita RAJBONGSHI[修士2年]

Naoko TOHYAMA (M2)+ Masaki SAWADA (M2)+ Ayano KAWANISHI (M2)+ Sangita RAJBONGSHI (M2)

新たな省エネルギー手法の提案や、今後多様化していく居住快適性のニーズをとらえた環境にやさしい住宅を提案することが求められた。生活する上で植物を「エネルギー」と「ライフスタイル」として利用できるシステムの1つとして最低限の機能のみの週末住宅を提案する。光合成による植物発電で生じたエネルギーは電気として利用でき、外壁を覆う植物は家の中の機能と関連して利用する。家の形態は植生の位置と日照の関係から導く。環境のためだけの緑化ではなく、人の生活と植物との新たな関係である。



■「21 世紀、鋼構造技術は何ができるか」コンペティション

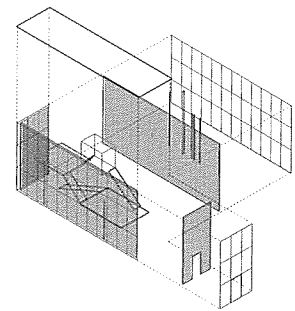
課題「鉄を使った新しい空間・機能をもった建築」の提案

佳作 「Punching Metal Structure (PMS)

Sectional Flexibility」

佐々木暁生 [修士 2 年] Akio SASAKI (M2)

フレキシブルという言葉は平面に対してのみ使われてきたが、断面的フレキシブルを追求することにした。パンチングメタルを構造体とするこの建築(システム)は、我々に新たな空間を提供してくれるだろう。自由に孔を選び、ボルトで梁を接合し床を張る。そして、それぞれの空間へガス・水道・電気などを孔を通じて供給する。3種類の大きさの孔は構造にも設備にも対応している。この建築は今までの空間概念を大きく変えるだろう。



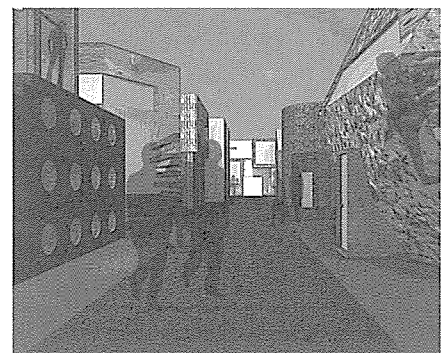
■第 8 回オープンリビングデザインコンペティション

課題「寄り道できる家」

入選 「Characterized house」

黒川智之[修士2年] Tomoyuki KUROKAWA (M2)

寄り道をコミュニケーションの一つの形として捉える。現代のコミュニケーションとしては、不特定多数の対象を相手にして確率的・偶発的に結ばれるコミュニケーションにリアリティがあると思われる。そのようなコミュニケーションを成立させるには、寄り道をする側とされる側においてある種の共通認識と特異点が必要だと考えた。そうした状況は意識レベルにおいてはキャラ立ち一萌えの関係と酷似しており、「寄り道する家」とはつまりキャラ化された住宅であると解釈できるのではないかと考えた。



INFORMATION

TIT 建築設計教育研究会会則

〔第1条〕 名称

本会はTIT建築設計教育研究会と称する。

〔第2条〕 目的

本会は東京工業大学工学部建築学科及び大学院建築学専攻における学生の設計能力の向上を側面的に支援するとともに、学生と会員、会員相互の交流を促進し、設計技術向上の相互啓発を行うことを目的とする。

〔第3条〕 事業内容

本会は次の事業を行う。

①国内外の建築家・特別講師等の招聘、②卒業設計・修士制作への賞の授与と作品保存、③展示会・講演会等のイベントの開催、④総会・運営委員会の開催、機関誌等出版物の発行、⑤その他、本会の目的にかなう事業

〔第4条〕 会員

本会は本会の目的に賛同する会員によって構成される。会員は東京工業大学の卒業生を中心とした個人または、上記の個人の関与する法人とし、その会費を基金として本会を運営する。

〔第5条〕 会費

本会の会員の会費は1口10万円とし、0.5口(5万円)よりとする。期間は1年間以上6年間までとする。(期間削除=第8回総会にて承認) 個人会員は1口1万円とし、1口よりとする。(個人会員の設置=第8回総会にて承認)

〔第6条〕 役員

本会は次の役員を置く。

運営委員9名(運営委員長1名及び監査役1名を含む)

〔第7条〕 総会

会員(法人の場合はその代表)等による総会は年に1回以上開催するものとする。

〔第8条〕 会計

本会の会計年度は1月1日に始まり、12月31日に終わる。また、会計報告は年1回会員に公表する。

〔第9条〕 存続期間

本会の存続期間は平成2年10月1日より平成8年9月30日までとする。(この項削除=第5回総会にて承認)

〔第10条〕 会則

本会則は平成2年10月1日より実施する。本会則の改廃は総会の決議を得るものとする。また本会則の運営にあたっては必要により別に細則を設ける。

(以上)

<細則>

TIT建築設計教育研究会会則・第10条により下記のとおり細則を定める。

〔第1条〕 役員

本会の役員構成は下記による。

運営委員9名(学外運営委員6名、学内運営委員3名) 運営委員の任期は3年とし、重任をさまたげない。東京工業大学建築学科の学内運営委員は主任教授その他2名とし、また学外運営委員は会員または法人会員の代表者のうち、学内運営委員の合議により6名を選任する。

運営委員長(会の代表者)1名及び監査役1名は学外運営委員の中より運営委員の互選により選任する。

〔第2条〕 総会

総会は会員(法人の場合はその代表)及び東京工業

大学建築学科教官(教授・助教授)出席による集会とする。

役員による事業報告、事業計画の審議、設計教育に関する意見交換等を行い、必要により会則・細則の改廃の決議を行う。

(以上)

2002年度役員 (03.4.30現在)

〔顧問〕中島隆(S26卒) 鹿島学術振興財団専務理事・鹿島建設(株)顧問、林昌二(S28卒)(株)日建設計名譽顧問、戸尾任宏(S29卒)(株)建築研究所アーキヴィジョン代表取締役〔運営委員長〕山下和正(S34卒)(有)山下和正建築研究所代表取締役所長〔副委員長〕三栖邦博(S38卒)(株)日建設計取締役社長〔監査役〕藤江澄夫(S35卒)清水地所(株)代表取締役副社長〔運営委員〕岡部富雄(S39卒)(株)構造計画研究所建築技術本部常務取締役本部長、服部紀和(S39卒)(株)竹中工務店常務取締役、仙田満(S39卒)東京工業大学大学院教授、坂本一成(S41卒)東京工業大学大学院教授、八木幸二(S44卒)東京工業大学大学院教授

2002年度法人会員 (03.4.30現在)

(社名/本会への代表)

大林組/杉山直、鹿島建設/矢口彰、清水建設/日置滋、大成建設/光岡宏、竹中工務店/服部紀和、日建設計/三栖邦博、松田平田/和田信昭、IAO竹田設計/竹田秀道、金箱構造設計事務所/金箱温春環境計画研究所/竹内義雄、環境デザイン研究所/仙田順子、久米設計/伊平則夫、建築研究所アーキヴィジョン/戸尾任宏、建築資料研究社/日建学院/井澤真悟、構造計画研究所/岡部富雄、清田育男計画設計工房/清田育男、日本設計/高橋徹、山田守建築事務所/山田達郎、レーモンド設計事務所/森山興真、葛西潔建築設計事務所/葛西潔、伊達計画文化研究所/伊達美徳、渡辺建築事務所/渡辺益男

2002年度個人会員 (03.4.30現在)

氏名(卒年)/東久世秀禧(S10)/黒田正巳(S13)/吉江憲吉(S14)/高田清(S16)/石田繁之介(S16)/堯天義久(S19)/栗原勝(S22)/池田忠彦(S25)/遠藤正明(S25)/中島隆(S26)/佐久田昌昭(S27)/濱田昭二(S27)/中村晃(S28)/林昌二(S28)/半澤重信(S28)/田中正美(S29)/戸尾任宏(S29)/吉井一夫(S29)/高木賢(S30)/田口好孝(S30)/城間勇吉(S31)/洪田実(S32)/中神弘(S32)/松下謹三(S32)/青柳司(S33)/太田雅三(S33)/佃隆介(S33)/増田一真(S33)/清水康久(S34)/富野壽(S34)/村口昌之(S34)/山下和正(S34)/大熊喜昌(S35)/永井雄一(S35)/野村邦夫(S35)/藤江澄夫(S35)/松野公一(S35)/森孝夫(S35)/佐々木雄二(S36)/真野晃(S36)/鈴木歌治郎(S37)/武岡茂生(S37)/最上達雄(S37)/三栖邦博(S38)/有田桂吉(S39)/岩岡文彦(S39)/岡部富雄(S39)/片野毅(S39)/仙田満(S39)/只野康夫(S39)/西野敬史(S39)/野口三郎(S39)/服部紀和(S39)/平川長(S39)/満田恒男(S39)/森山興真(S39)/高橋勇(S40)/味生威(S40)/野崎英彦(S40)/森下清子(S40)/守谷一彦(S40)/岩沢二

郎(S41)/坂本一成(S41)/志岐孝之(S41)/瀬尾和大(S42)/鈴木清友(S41)/大嶋顯世(S42)/小西敏正(S42)/瀧口克己(S42)/光岡宏(S42)/矢口彰(S42)/奥村光男(S43)/西村博道(S43)/花島晃(S43)/細入誠一(S43)/村田靖夫(S43)/和田章(S43)/藍澤宏(S44)/佐藤俊作(S44)/清水弘道(S44)/杉山文正(S44)/田中享二(S44)/牧圭介(S44)/八木幸二(S44)/山口洋一郎(S44)/青木義次(S45)/岡本慶一(S45)/岡本聖司(S45)/鳥羽広明(S46)/梅干野晃(S46)/山口潤二(S46)/大野隆造(S47)/猪子順(S47)/西尾秀平(S47)/杉原繁樹(S47)/小河利行(S48)/刈谷武郎(S48)/日置滋(S48)/藤岡洋保(S48)/保坂一夫(S48)/森行巨(S48)/伊原基(S48)/有里公徳(S49)/高田典夫(S49)/時松孝次(S49)/豊田雪夫(S49)/三橋伸夫(S49)/渡辺徹(S49)/上山博夫(S50)/河野晴彦(S50)/小林謙一(S50)/清水寧(S50)/土屋隆(S50)/高橋寛(S51)/田中一晴(S51)/宮木宗和(S51)/松永浩一(S51)/木谷靖孫(S52)/前田康憲(S52)/猪村彰(S52M)/熊谷昌彦(S53M)/浦春彦(S53)/白川裕信(S53)/宮本文人(S53)/岡河貢(S54)/鈴木敏彦(S54)/常木康弘(S54)/武田直行(S54)/前田哲男(S54)/小室清高(S55)/三上貴正(S55)/吉田親史(S55)/伊東龍一(S56)/乾靖(S56)/仲野順一(S56)/宮本昌明(S56)/高橋晶子(S57M)/津金猛(S57M)/酒井星志(S57)/西田達生(S57)/平島信一(S57)/山口勝巳(S57)/安部武雄(S58D)/坂田弘安(S58)/横山裕(S58)/新井貴(S59)/幡田秀樹(S59)/中村安志(S60M)/大佛俊泰(S60)/小田宏正(S60)/加茂紀和子(S60)/所司護(S60)/湯浅和博(S60)/若松均(S60)/中村芳樹(S61M)/奥山信一(S61)/曾我部昌史(S61)/竹内昌義(S61)/山田泰範(S61)/鈴木達也(S62)/塚本由晴(S62)/鈴木重則(S63)/五十嵐規矩夫(H1)/今井賢治(H1)/栗原正明(H1)/斎藤千尋(H1)/鹿野秀馬(H2)/山崎鯛介(H2)/岩岡竜夫(H2D)/木島千嘉(H3M)/渡邊哲也(H3M)/片庭修(H3)/中井邦夫(H3)/櫻井康雄(H4)/足立真(H5)/保住秀樹(H5)/菅原正則(H5M)/藤岡務(H6M)/是永美樹(H6)/井澤真悟(H7)/木下芳郎(H7)/村田淳(H7)/井上寿(H8D)/七田裕(H8M)/菅菜々子(H8)/笠井蒼仁(H9)/吉田佳代(H9)/西村康志郎(H9)/荒井拓州(H11)/藤井晴行(現職) 以上190名

2002年度大岡山建築賞

2002年度大岡山建築賞受賞者は以下の通りに決定し、6月17日に開催予定の第13回総会にて授賞式が行われる。詳細については次号で報告する。

〔大岡山建築賞〕

服部拓庸「Ground Line」(卒業設計)

松島潤平「MoCa-Sa」(卒業設計)

平林政道「ウィンド・シティ・プロジェクト/風を利用した都市空間の再編」(修士論文(制作))

〔大岡山建築賞銀賞〕

宇佐美洋平「AKIBEYA HUNT Project」(卒業設計)

中島俊明「caf.」(卒業設計)

藤井亮介「レイトルピア」(卒業設計)

小池秋彦「インターフェース・アーキテクチャー」(修士論文(制作))

編集委員:八木幸二/奥山信一/是永美樹(以上幹事)/横山裕/堀田久人/湯浅和博/足立真/井上寿/木下芳郎/中井邦夫/山崎鋼介

学生編集委員:塩崎太伸/卜部祐加/倉林貴彦/玉井洋一/野地智美

取材・編集協力:大学院修士課程1年有志

編集協力:デザイン=岡本洋平/翻訳=ディヴィッド・スチュアート

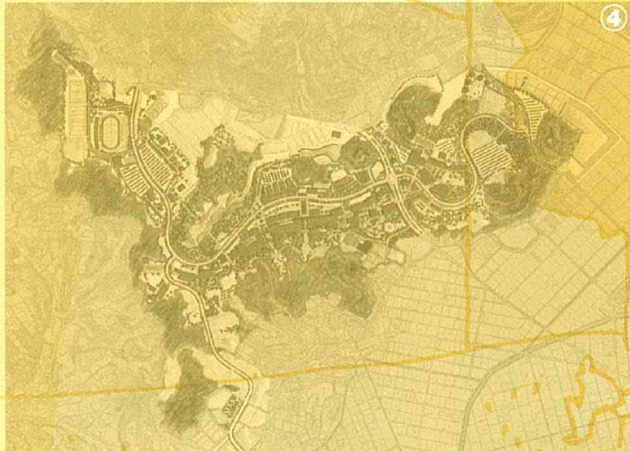
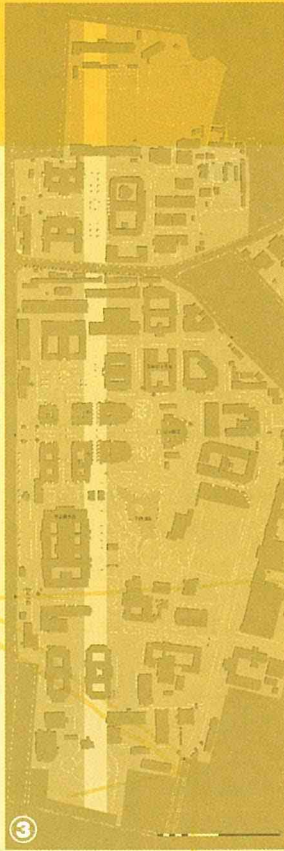
表紙:[②・④=九州大学新キャンパス/©シーザー・ベリアンドアソシエーツジャパン(株)、①・③=東京大学本郷キャンパス/©東京大学岸田研究室、

⑤=東京工業大学緑が丘地区再計画/©東京工業大学理工学研究科建築学専攻 坂本一成研究室]

発行:TIT建築設計教育研究会[2003年6月発行]

(事務局:東京工業大学理工学研究科建築学専攻 坂本一成研究室)

定価:800円



Edition Committee: Koji YAGI / Shinichi OKUYAMA / Miki KORENAGA (above steward) / Yutaka YOKOYAMA / Hisato HOTTA / Kazuhiro YUASA / Makoto ADACHI / Hisashi INOUE / Yoshiro KINOSHITA / Kunio NAKAI / Taisuke YAMAZAKI

Student Edition Committee: Taishin SHIOZAKI / Yuka URABE / Takahiko KURABAYASHI / Yoichi TAMAI / Tomomi NOJI

Coverage, Edition Cooperation: Master 1st student volunteer

Edition Cooperation: design = Yohei OKAMOTO / translation = David STEWART

Cover: Kyusyu University New Campus © Cesar Pelli & Associates Japan, Inc. / Tokyo University Hongo Campus © Shogo KISHIDA lab. Tokyo University/

Tokyo Institute of Technology O-okayama Campus Midorigaoka Area Project © Kazunari SAKAMOTO lab. Dept. of Architecture Tokyo Institute of Technology

Publish: TIT society of architectural design education (06.2003.)

(secretariat: Kazunari SAKAMOTO lab. Dept. of Architecture Tokyo Institute of Technology)

Price: 800 yen